春の宵人作

牧の子

春之舍著譯

『春舍漫筆』（華文）　明治廿四年九月出版　實價金廿錢

「壹圓紙幣の履歴ばなし」は壹圓紙幣の物語に托して中流以下の情態を描ける一種の小說、「梓みこ」は神子の語を假りて近松、馬琴、西鶴を評論し兼ねて明治の文壇に及べる諷刺滑稽の文、「をかし」は歐米詩文人の奇譚逸話等を集め、「政界叢話」は歐米名士の珍聞を蒐めたり

『小羊漫言』（評論）　明治廿六年六月出版　實價金廿錢

『春舍漫筆』は著者が明治廿三四年間の叙事の華文を集め本書は同年間の批評及び論辨を集めたり明治二十二三年のころの文界の傾向は本書によりて瞥見するを得べし

『桐一葉』（脚本）　明治廿九年二月出版　實價金廿八錢

豐臣氏の末路を舞臺として片桐且元の苦忠淀殿の猜忌等を描きいだせる著者が脚本の初作なり

『文學其の折々』（評論及び隨筆）　明治廿九年九月出版　實價金壹圓

千ページに垂んたる大册、明治廿四年以後廿九年までの諸種の評論、漫筆等を集めたり

『梨園の落葉』　明治廿九年十一月出版　實價金五十錢

前書と同種のもの、但し專ら演劇及び脚本に關する評論のみを集めたり

『ふたごゝろ』（小說）　明治卅年三月出版　實價金卅八錢

米國作家某の作を義譯せるもの、大膽不敵なる惡人を主人公とせる物語なり

『列傳躰德川小說史』　明治卅年五月出版　實價金七十五錢

水谷不倒氏と共著なり、紙數七百頁に餘る大册、古くはお伽草子、怪談ものゝ昔より近くは假名垣魯文に至るまでの諸作家の傳統は此の書によりて詳かに知るを得べし

牧の方はしがき

此の作は明治廿九年一月にはじめて稿を起し、さて引きつゞき『早稻田文學』の紙上に掲錄し、同じ年のうちに完結すべかりしを、種々の塵事いできて思ふまゝならず、遷延して同三十年の春に及び、かくてやう〳〵三月のなかばに稿を脫し、更に修正の筆を加へ、こゝかしこ添削して、こたび一卷となしゝなり。事柄の大むねは、正しき史乘に據りたれど、枝葉は悉く作者の想像に成りて、殆ど何の據り所もなきが多し。されば人物の都合、舞臺の趣など考へて、年月、地理など

は、ほしいまゝに伸縮せり、例へば、實朝、政範の年齢の如きは、おの〳〵二年づゝを減じたり、義時、牧の方、は た同例なり。又鎌倉府の廣袤の如きも、其の實の二倍大となし、御所と北條邸との距離をも其の實より遠きものとなしたり。かゝるたぐひの事柄尚あまたあり、讀者心得たまひてよ。

明治卅年四月中旬

春のや主人識

北條氏血統

- 政子、後、尼御臺所（嫁ニ源ノ頼朝ニ）
  - 女某（嫁ニ稻毛重成ニ）
    - 次郎重政
    - 照子の前
  - 女某（嫁ニ畠山重忠ニ）
    - 六郎重保
    - 其他
  - 相摸守義時（妻、吳羽ノ前）
    - 泰時
    - 朝時（相摸ノ次郎）
    - 其他
  - 萩の前（嫁ニ平賀朝雅ニ）
  - 左馬介政範
- 源ノ頼朝ニ
  - 源ノ頼家、後、二品禪室
    - 善哉、後、公曉
    - 千壽、等
  - 千幡、後、源ノ實朝
  - 一幡

◎北條時政

先妻所生

牧ノ方所生

表中批點を附したる分は本編中に形をあらはせる者也、編中に見ゆる姻親の關係頗る複雜なれば讀者まづ此の表によりて相互の位置を知了せんことを要す

登場人名

男

千幡御前後ニ三代將軍源ノ實朝
北條相摸守平ノ義時
平賀ノ右衞門ノ佐源ノ朝雅
稻毛ノ次郎重政
結城ノ七郎朝光
深見ノ三郎二郎致與
籠手田ノ勘六
和田ノ小平太并ニ北條相摸ノ次郎(朝時)
琵琶法師某
商賈工匠
北條遠江守平ノ時政
同左馬ノ權ノ介政範
稻毛ノ三郎重成入道
畠山ノ六郎重保
牧ノ左源太輝英
穗積ノ瀨平
木匠四郎作
輝英ノ僕、藤太并ニ藤内
醫師、紀河ノ宗近
侍士、雜人、軍兵及ビ力士等

女

時政ノ室、牧ノ方
笹尾ノ局
牧ノ方腹心ノ侍女、魚、米、升
女童數人
義時ノ室、吳羽ノ前
稻毛ノ女、照子ノ前
北條家ノ女房、侍女等
伊豫ノ局
侍女、折枝
呼賣ノ女、二人
尼御臺所
荻の前
二品禪室(頼家)
畠山ノ次郎重忠

場に登らずして屢々編中に見えたる人名

牧の方目次

第一段
(其一) 往來の雜說……自第一頁
(其二) 中門外の爭論……自第一三頁
(其三) 奧殿の風波……自第二一頁
第二段
(其一) 藥師堂の落慶供養……自第三一頁
(其二) 堂內の密談……自第四五頁
(其三) 山下の人殺し……自第五八頁
第三段
(其一) 七夕の大雷雨……自第六八頁
(其二) 旅館の曲者……自第八六頁
(其三) 奧庭の落花狼籍……自第八九頁

第四段
（其一）閑室の密談……自第一〇〇頁
（其二）噴恚の狂亂……自第一〇四頁
第五段
（其一）杜かげの伏兵……自第一一七頁
（其二）由比が濱の血の雨……自第一二〇頁
第六段
（其一）浴室の逆謀……自第一二八頁
（其二）築山邊の小逍遙……自第一三八頁
第七段
（其一）月前の平家琵琶……自第一四四頁
（其二）橋殿の一刹那……自第一五〇頁
（其三）釣殿の大團圓……自第一五三頁

牧の方

春のや主人

第一段

（其一）往來の雜說

鎌倉今小路と長谷小路との間に懸りたる橋の袂に、五六人の工匠商賈、壁塗鍛冶、檜物師、染殿など、今ま店先から飛んで出たといふ風にて、各々商賣道具を手に持ッたまゝ、烏帽子袴の時服、一同今小路のかたを見込み、立ちかゝりゐる（九月下旬晩景）

二「あんだッぺい〳〵。あんだッて大名衆が、泡アくッて、ぶッそろッて、御所のはうへ出掛けるだか。これハア只事ぢやアあんめいぞ。三「何んでもハア此間中から、地震のでッけいのがつゞくだから、縁起でもねえこんだと思ッてゐたゞ。二「地震

と謀叛人は土地の名物　三「又ハア謀叛人かも知んねえ。三「眞に聞いては見ては
とやらー　將軍さまのお膝元も、居ついては近劣り　四「草創のそも〳〵から、又して
も謀叛々々と　三「物騒な噂ばかり。四「慾につられて六年前、引越して來たは見込
ちがひ　三「今にも軍がはじまろかと　四「片時も心が休まらない。五「大名衆でも、
御連枝でも、賴まれぬは浮世の常ー手近いためしは賴家さまー此間までは日ッ本國
に、だんだひとりの大將軍さま　四「其の例ない御榮華も、變れば變るけふびのお暮
らし　五「尼御臺さまのお沙汰とあッて、おいとしやお髪をおろし　三「お代がはり
となッたばかりか、御ン若君の一幡さまも、比企の判官さまも御滅亡　二「おとゝッこ
の千幡さまは、まだハァ十一か、十二ぐれゐ　三「北條さまが預ッて、お世話をさッし
やるといふこんだが　二「かういふ時にやア、わりい人が、えて謀叛を　三「たくらむ
もんださ。五「さういへば賴家さまも、えらう御無念がッてムるといふゆゑ　三「エ、
そんだら何ぞ　四「そんな噂が　五「イヤ、あるでは無けれど、知れぬは世の中ーイヤ
モ物騒なことぢやわいの。

此のうち、向う今小路の方より、呼賣の女二人荷箱を頭の上にいたゞき、バタバ
タにてかけ來たり

呼二人「コレ、事ぢやぞや〳〵。二「オヽ、濱小路の姉御たち　三「事ちふは何だッぺい。
三「早う樣子を　四「きかした〳〵。　呼二「くはしい樣子は知りましないが、北條さま
にムらッしやッた、若君樣の千幡さまが　呼二「御膳さなかに俄のお立ち　呼二「三浦さ
まと結城さまと、大勢で御守護なされ、あわてゝ御所へお歸りなされた　呼二「それが
元で噂はとり〴〵　呼二「北條さまの界隈は、上を下への　二人「騒ぎぢやわいなア。
二「ハレマ、それはハァたまげたこんだぞ。二「マァあんだッて歸ッたゞか。三「北條
さまは實の祖父さま　四「何の氣遣ひも無い筈ぢやに。呼二「サァ、だが氣にもさう思
へど、圖られぬは心の奥底ーナソレ、牧の御ン方さまは、大きな聲ではいはれねど、御總
領の義時さまや、尼御臺さまとも成さぬ中　二「エ、そんだら何ぞ怪しいこんでも
呼二「あッたといふは世間の取沙汰　呼二「まことか虛かは知らぬけれど、御膳のなか
へ毒を去こみ　皆々「エヽ。

ト皆々大きな聲する。

一呼「アヽコレ。すぐ橋むかうは由緣のお邸牧の左源太輝英さま。

ト皆々よろしくこなし。

呼二「それぢやによッて、いつ何時　呼三「軍がはじまらうも知れぬゆゑ、今から直に私したちは　呼二「こちのに知らせて、まさかの用心。呼三「そんなら皆さん　二人「さらばムんす。

ト二女は急ぎ橋を渡り、長谷小路の方へ走りゆく。

二「こりやかうしてはをられましない。四「嗅に知らせて、まさかの用心。三「そんだら皆の衆。皆々「ござれ〳〵。

ト皆々あわてゝはいる。ト橋向より牧の方の甥、牧の左源太輝英、直垂を裏がへしに被て、袴を前うしろに穿き、その裾をひきずり、烏帽子はかぶらず、すべてトンチンカンの服裝、家來甲乙のうち、乙は佩刀と取りちがへて樫の棒をさゝげ持ち、主從大あわてにて出で來たり、橋を渡り、今小路の方へかけゆく間、始終

棄せりふにて家來を叱ること。

左「身仕度にて餘程のひまいり—遲參いたしては相すまぬワ—うつけとは汝等がこと—うぬらゆゑにかくの仕合せ—エヽ急げ〳〵。たとへ酩酊いたしをらうと——エヽ急げ〳〵—たとへ熟睡いたしをらうと、なぜ早やく起しをらぬ　甲乙「ヘイ〳〵

左「エヽ急げ〳〵—遲參いたしては相すまぬワ。

家來乙、輝英の袴の裾をふまへる。輝英つんのめる。

左「アイタ〳〵。　甲「こりや何となされた。　左「ヤイ〳〵〳〵。がッといへばすッと申す—急ぎをれと申せばとて、主人を突倒すちふことがあるか。乙「まヽ眞平御免下さりませ。　左「氣をつけをれ、うつけものめ。ヤ、最前から脚のあがきが合點ゆかずとぞんじをッたが——ヤ、こりや成らぬワ、後まへだ。ヤ、こりやどうだ、此の直垂は。ヤイ〳〵、如何に狼狽いたせばとて、汝よく裏がへしに被せをッたな。

甲「ヘイ〳〵。　左「うぬ〳〵—ヤヽヽ、無いぞ〳〵、烏帽子が無いぞ。こりや成らぬワ。取ッて返さば時刻がおくれる、さりとて此のまゝ——エヽ是非が無い、かういたそ。

予はこれにて身仕度致す、藤太はすぐさま取ッて歸し、予が烏帽子を持參いたせ。

家來甲、一散に橋向うへかけてはいる。

左「エヽ重ね〳〵不屆至極。ヤイ、ぬがせをれ—さうではないわい、右から先へぬがせをれと申すに。ヤ、何だ〳〵、そりや何だ。うぬ、そりや何を持參いたした。乙「ヤ、こりや如何ぢや。お太刀と思うた此の品は　左「ヤア重ね〳〵不屆者めが。如何に狼狽いたせばとて、佩刀は武士のたましゐ、うぬ、よくも〳〵取りちがへ、すでの事に予が面に、泥を塗らうといたしをッたな。乙「まま、眞平御免下さりませ。左「うぬ、此の分にはさしおかれん—手打にする、覺—ヤ、右手指はいかゞいたした。さては心の焦だつまヽ—こりやありがちの不覺ぢやわい、君を思へば身を忘るヽ、こりや有りがちの粗相ぢやわい。ヤイ藤内、うぬも早速はせかへッて、予が兩刀を持參いたせ。

家來乙、とッちてはいる。あとに輝英一人殘り、棄せりふにて小言をいひ〳〵、橋の袂にたちて衣裳を着直すこと。こヽへ畠山六郎重保が僕穗積の瀨平、今

小路筋を一散に走り來る。あとにつゞいて、稻毛入道重成が女照子の前の腰元折枝、武家女房のこしらへ、かつぎなしの下髮姿。モウシ〳〵と呼びながら、息を切ッておひすがる。

折「アヽコレ待ッて、瀨平どの—これほど呼ぶのに聞えぬかいの、待ッてというたらまッていの。瀨「ヤ、誰れかと思へば折枝どのか。何の用かは知らぬが、若殿を火急のお迎ひ—御免なれ。

トゆかうとする、折枝あわてヽ止め

折「アヽコレ待ッて、瀨平どの、是非頼まれて貰はにやならぬ。外でもない、此のお文を、そちの若殿六郎さまへ　瀨「何ぢやお文ぢや。文と聞いてはひらさらまッぴら、文なら餘人に頼まッしやれ。目のまはる急ぎのお迎ひ

トかけいだす袂をとらへ

折「エヽマ、もぎだうな、またしやんせ。照子の前さまのお心を、知ッてゐながら他人らしい—是非きいてもらはにやならぬ—たとへ親御さまと親御さまとが御中た

がひをなされう、と、お二人はおいとこどし、筒井づゝの幼な馴染、御婚禮の其の折を、指折數ぞへて待ちこがれ　瀨「エヽ、そのやうな長物語り、きいてゐる間は無い、大事のお知らせがおそなはる―そこ離した。折「イエ〳〵、離さぬ、離さぬわいの。いとしほや照子の前さま、ひよんなことが元となり、御破談となってそれからは、只くよ〳〵と物案じ、三度のお物も進まぬがち、一日〻〻に痩さッしやる、はたの見る目も痛〻しい、親御さまは兎も角も、聞えぬはそちの重保さま　瀨「それをおれが知ることかえ。折「それにまた憎らしいは、新大名の左源太づら、牧の方さまを笠に被て、照子の前さまへ無體の戀慕―慾には目の無い入道さま、どのやうな間ちがひから、諸とおッしやるまい物でもない、若さうなッたら如何あらうぞ―いぢらしいは照子の前さま、其のお心を推量して、お前もどうぞ傍から口そへ、元の通りに直るやう、其の掛橋は此の玉章、六郎さまが御覽したら　瀨「エヽ、それだらば尙さら御免だ。折「イエ〳〵、如何あッても頼まにやおかぬ。瀨「イヽヤ離せ。折「離さぬ〳〵。瀨「こりや叶はぬ。

ト瀨平ふりはなし、逃げだすをおひかくる。此のうち左源太、たちぎヽ、腹の立つこなし、づヽと出る、薄くらがりの心。出あひがしらに、かけだす瀨平と、双方見事に額あはせする。

左瀨「アイタ〳〵。　左「ヤイ、うぬれ、無禮者めが。　瀨「何だ、無禮だ、額あはせはあひみたがひ、身勝手なことをいはッしやるな。　左「こいつが〳〵。それがしを誰れだと思ふ。うぬ、此の分にはさしおかれん。おのれ、如何樣なる遺恨あッて、不意にそれがしを突倒した、眞直に白狀いたせ。　瀨「とんだいひがゝりをいはッしやる。知りもせぬお身さまに、遺恨も執念もあるものかえ。　左「ヤイ〳〵〳〵―言はせて置けば雜言過言―うぬ、それがしを誰れだと思ふ―北條どのゝ奥方、牧の御ン方には實の甥、牧の左源太輝英だわやい。瀨折「エヽ。　左「只今かしこでちらときけば、うぬはたしかに畠山の惣領、六郎重保が下郎だな。　瀨「エヽ　左「重保が下郎とあれば、ハヽァわかッた、こりや何ぢやな、主人の羽ぶりよきを鼻にかけ、新參者のそれがしゆゑ、何がな恥辱を與へんとて――ウンニャ、さうだ、きッとさうだ、北條どのへ參第の、其の妨げを

いたすのぢやな。瀬「めゝ、めッさうな、毛頭さやうな　左「ヤア、いふな〳〵、一定それに相違はない。新參なれども當將軍家の直參たる、此の左源太を惡口なし、うぬ、いひがゝりだとぬかしたな。瀬「サアそれは—薄くらがりゆゑ、あなたさまとは夢さら存せず　左「ヤア、きかぬ〳〵。うぬ、此の上は　折「アゝ、申し、慮外ながら、あなたさまへ申上げます—只今のお粗相は全くわらはの不束ゆゑ、そのお人の存じませぬこと—どうぞ此の場ばは此のまゝに　左「ム、、さう申すは、稻毛どのの腰元な。

折「ハイ。左「そもじが折入ッての取做しなら、魚心あれば水心、きいてとらすまいものでもなけれど—ヤイ、よく聞けよ、新大名は一段と、當座の面目が大切なるに、見よ、晴衣裳にまッこの通り、泥を塗ッた不屈奴、無禮至極の下郎め。此の分にはさしおかれん、此の處にて、手—ヤ、こりや成らぬ。アノ家來共は、エゝ、何をいたしをる。おのれ手打にせば刀の汚れ　—かうしてくれう。

ト たちかゝる。

折「マア〳〵お待ち下さりませ、御存じの上からは、どうぞナアわらはに免じ、おゆるされて下さりませ。其の代りには何事でも、あなたさまの御用とならば　左「きくと申さば　—ウンニヤ、きかぬ—きかぬ〳〵。

ト 又たちかゝるを折枝とめる。此の中、橋向うより以前の家來、甲、乙、烏帽子、太刀指添を持ち急ぎ出來る。

左「ヤア、よいところへ。ソレそやつを叩き伏せろ。甲乙「心得ました。瀬「ヤア、大身として容赦すれば、あまりといへば無體のふるまひ　左「何がなんと。ソレ、ぶッちめろ。瀬「何を。

折枝うろたへ、とめうとして誤ッて灸所をあてられ、悶絶する。四人はげしき立まはり、トゞ瀬平、左源太につかみかゝる、左源太鞘のまゝ指添にて眉間を打つ、瀬平アッといッてたぢろく。主從たちかゝり、散々に打擲する。

左「ざまア見ろ。者共いそげ。

ト 主從一散に今小路の方へかけゆく。折枝心づき起あがり、瀬平が倒れたるを見て驚き介抱する。瀬平無念のこなし。

瀬「北條どのを笠に被て、人を人とも思はぬ左源太。　折「サヽ、其の腹立は尤もなれど、主人持の身を忘れ、一徹短慮はお前の病ひ、何處ぞ怪我はしをやをやんせぬか。ひどう痛みはせぬかいの。これといふのも畢竟は、戀の遺恨に六郎さまを憎いと思ふ八當りーひよんなことであッたわいなア。

このうち畠山六郎重保、狩衣裳騎馬にて弓を携へ、郎黨一人つきそひ、すべて野狩の歸りといふこしらへにて、長谷小路のかたより橋を渡り、こヽへ來かゝる。

瀬平星あかりにすかし見て

瀬「オヽ、そこへおこしなされまするは、若殿ではムりませぬか。　保「さいふ汝は、瀬平ならずや。　折「マ、よいところへ、六郎さま。ひよんなことでムりました。　保「そなたは折枝、合點ゆかぬ此の場の有樣。汝が眉間の其の血汐は　折「お聞きなされて下さりませ、無念なはたッた今がた　瀬「エヽそこぞころかーモシ若殿、一大事でムりまする。　保「ナニ、一大事とは心懸りーシテ、其の仔細は　瀬「サ、其の仔細は、如何なる故かは存じませねど、尼御臺さまの御沙汰とあッて、若君さまには俄の御還御。大

倉あたりは上を下へ、今にも戰がはじまるかと、思ふばかりの亂ちく騷動。北條さまが、御謀叛と、はや一ばいに噂は口々　保「ヤ、、、。瀨「兵具を整へ西の御門へ、我れ先にと大名がたースハ大變と存ぜしゆゑ、お迎ひの爲、下郎めが、これまで參ッてムりまする。　保「さてこそ珍變。つゞけ。

ト其の儘馬に一角入れてかけだす。郎黨つゞく。瀨平ついと起ち、よろ〳〵とよろめき、ふみこたへて行かうとする。呆氣にとられてゐたる折枝、此の時あわてゝ、瀨平をとめ、

折「コレ瀨平どの、此の照子さまのお文をば　瀨「エ、、そこどころぢや

ト折枝を突放し

瀨「ありましないわい。

ト一散についてはいる。折枝呆れたこなし。

（其二）　中門外の爭論

大倉が谷なる北條時政が邸。中門外。馬の嘶き、人聲、物音、騒然たる初夜の景。

こゝへ門内より前の塲の牧左源太、手に松炬をもち、うろたへてかけいで

左「サア事だ、サア事だ。老公の一徹短慮に、かてゝ加へた牧方の疳癪、火のつきさうな眞最中へ、薪に油は平賀朝雜どの――こりや大事にならずにやおかぬワ。いざ合戰となッたが最後、流箭一つ飛んで來ても、此の素肌では――こりやならぬワ。藤太はゐぬか。藤太、々々。

ト下手より郎黨藤太、いそぎ出で來たる。

左「オヽ、藤太か。事だ〳〵。一大事と相成ッたワ。太「ヒエヽ、そんなら彌々噂の通り、御所から討手がまゐりまするか。左「討手は如何だか存せぬが、風の手も火の手もわるい。所詮は事だ、合戰々々。汝は直さま韋駄天走り、邸へ戻ッて甲冑もろとも、身共が弓矢を持參いたせ。太「ヒエヽ。左「ヤイ、なぜ起たぬ何をうぢ〳〵――時刻が後れる、急げ〳〵。太「ごヽ御免なされて下さりませ、こゝ腰がぬけましてムりまする。左「ヤア、うぬれ、臆病者めが。勇將の下に弱卒なし、疾く參らずばぶッたなすぞ。太「まゝまゐります〳〵。

ト此のトタン、向うより同じく左源太の郎黨藤内、ばた〳〵にて一さんにかけ來たり、左源太主從に突きあたり、けしとぶこと。

左「ヤア、無禮奴、何をいたす。内「ヤヽ、御主君――たゝ大變でムりまする〳〵。左「たゝ大變とは　内「表御門へ、うヽ討手の大軍　左、太「エヽ。内「有無をいはせず無二無三に――アレ〳〵あしこへ　左「ナニ、あしこへ――ヤヽいかにもあまたの――ヤヽヽヽヽ。内太「南無三。

ト藤太、藤内、こけつまろびつ門内へにげてはいる。

左「ヤア不忠やつ、まて〳〵、うぬれ。ヤアかたぐ――コレ、まッてくれ〳〵――いであひめされ――いであヽヽヽヽヽ。

ト左源太臆病の思入、いろ〳〵うろたへ、トヾ腰のぬけたるこなし。すぐに向うより稻毛重成入道、同じく男次郎重政、物具に身を堅め、兵器を携へ、郎黨大勢ひき具していで來たる。

左「いでわひめされ〳〵。　稻「そこにムるは牧ノ左源太どのではムらぬか。　左「くわばら〳〵。　政「コレサ、左源太どの、照英どの　左「南無阿彌陀佛〳〵。　稻「これはしたり、照英どの。左「ヤヽ、貴殿は、――オヽ、稻毛どのでムりましたか。　稻「驚き入ッたる今宵の珍變、若君御前の御事より、老公御夫婦に御嫌疑かヽり、程なく御ン討手としきッて風説　政「信僞はわかねど、びッくり仰天。　稻「スハ老公の御ン一大事、萬一讒者の寄せ來ん備へ　政「日ごろの忠節此の時と、取るものも取りあへず、手勢を引き具し稻「稻毛父子推參いたすと、すぐさま御披露　稻、政「下されたし。　左「さては討手と――イヤナニ、うヽ討手をひきうけ、一人にても、防戰なさんと存せしところ、持病の癇氣に敵しがたく　稻「ヤア、何はさかれ、奥の御摸樣、シテ、老公にはいづれに御座ある。　政「平賀朝政どのには參着ありしか。　稻「シテ、御ン方には御異變なきか。　政「シテ、相州には　左「マヽヽヽ、さやうにたヽみかけてお尋ねあッても――まヽ癇氣が、動氣が――兎も角も御披露〳〵。　さばらく〳〵。

ト左源太あわてヽ門内へはいる。

稻「ヤア案外なるうろたへ者――もどかしい、奥の樣子心元なし。　ヤイ、汝等はこヽに据へてゐよ。伴まゐれ。

ト稻毛父子、門内へ入らうとする、ト向ふにて

保「さばらく〳〵。

ト畠山六郎重保烏帽子直垂、ばた〳〵にてかけ來たり

保「申すことあり、さばらく〳〵。　稻「誰れかと思へばおことは重保　政「珍事の仔細は知られつらんに　稻「悠長らしき其の打扮　政「呼びとめられしは　稻「何等の所要だ。　保「こは心得ぬ其のお言葉、不思議の御嫌疑かヽッたるは、當北條家未聞の惡名、まづ第一の御詮議は、讒者の有無をとり糺らべ、老公御夫婦の御ン濡衣乾し奉るを急とすべし、然るに何ぞやげう〳〵しく、兵具を携へ馳けつけられしは、道路の匹夫を驚かし、嫌疑を加ふる粗忽の振舞　政「ヤア、おしだまッて聽いてゐれば、おのが不覺を棚へあげ、我々親子をさみなす暴言。　高木風をまぬかれず、當家を妬む卑劣のともがら、舌刀を研ぐと兼ねての風説。　讒者のわるなし調ぶるうち、討手理不盡に

寄せ來たらば、六郎には何とせらるゝ。保「たとへ御ン討手寄せたりとも、三代相恩の御所に向ッて、一矢たりとも弓引かんや。さらぬだに此の年來、外戚の威權にほこり、我意の振舞おはするなんぞ、口無惡なき世上の取沙汰。御疑ひかゝッたらば、まづ御謹愼あるべき折柄、門内に兵馬を集へ、不穩の振舞これあらんは、いよ〳〵以て逆意の疑ひ　稻「默れ、逆意とは何のたはごと。我意の振舞おはするとは、前後を存せぬ無禮の一言。和主の如き無分別が、兎角に浮説の基を作る、取りも直さず讒者のかたわれ　保「ヤア聞にくし其の一言。今ひとたびおほせあれ、伯母聟とて、聞棄には致しませぬぞ。稻「何だ〳〵。血相かへてそりや何だ。讒者と言ッたが何と致した。保「他人の口より出でば知らず、便佞讒誣を異名に呼ぶ、えせ入道のそこもとが、讒者呼ばゝりかたはらいたし。稻「何がなんと　政「うぬ

ト重政をぢりいで、抜かうとする、重保其の手を抑へ

保「こりや何とする、次郎重政。政「何とするとは知れたこと、父をさみなす汝がそッ首　保「フム、すりやそれがしを斬らんず心か。政「知れたことだ。保「何を。

ト重政また抜きかけるを、重保つき戻し、左右にわかれ、双方柄に手をかけ、きッとなる。此のトタン奥にて

朝「兩人ともに、まッた〳〵。

ト平賀右衞門佐源の朝雅、烏帽子直垂にて、松炬もッたる童、郎黨を隨へ、門内よりはせいで、二人の間にわッていり、よろしくこなし。

朝「大事の折から、嗚呼の鬪諍、兩人ともに鎭まりませうぞ。保「右衞門佐どの、お退き下され。堪忍ならざる次郎が雜言。政「うぬ、そのおとがひ——お退き下され。朝「ヤア、一大事を前にひかへながら、血氣に前後を忘れたるか。入道どのも年甲斐なし、何故おとゞめなされませぬぞ。

トこれにて入道恥ぢたる思入。

稻「面目なし、右衞門佐どの、無體の過言を申せしゆゑ、ついそれがしまで釣り入れられ——こりやヤイ重政、据へをらうぞ。政「ぢやと申して　稻「エ、据へをれと申すに。

ト重政ぶ〳〵ひかへる。

朝「イヤナニ入道、仔細は已に知られつらん、尼御臺がこよひの御處置は、近ごろ以て理不盡千萬、まッた今以て義時ぬしの、かつふつ何等の音沙汰無きは、一定父母をなみする同腹、當家の恥辱、未聞の惡名、このまゝにはすて置きがたしと、烈火の如き御腹立、時宜によッては兵士をひき具し、御自身御所へ參入あらんか。利害善惡決しがたく、今奥殿にて御評議最中。保「ナニ御自身にて兵士をひき具し　朝「重保にも重政にも、とく列席いたさるべし。保「法外なる其の御所存　稻「ゑからばすぐさま政參候なし　保「ことばを盡し、おとゝめ申さん。

ト此の時門内より以前の左源太かけいで

左「かた〳〵これに御座ありしか。相州公の奥方、吳羽の前、只今俄に裏門口より、御參入でムりまする。朝「ナニ、義時ぬしの内室が　稻「アノ裏門より　保「オヽそれぞさいはひ、いで〳〵すぐに。

ト重保つゝと先にたち入らんとする、稻毛へだてゝ

稻「ヤア尾籠なり、六郎重保。和ぬしは禮義をぞんじをらぬか。

ト手荒く突き戻す。重保くわッとなッて意氣ごむを、朝雅さそくに押しへだて

朝「アイヤー左源太どの、稻毛どのを、案内めされい。

ト重保無念のこなし、稻毛よろしく思入、朝雅に會釋して先にたつ。皆々つゞく。

(其三)　奥殿の風波

北條邸の奥殿の一室、まんなかに遠江守時政、白髮かづら、烏帽子直垂、うしろに太刀持の小童、下手、前のかたに、相模守義時の室、吳羽の前、下髮當時の盛服、手をつかへてゐる(談話なかばの體なり)。

時「スリヤ全く世上の浮説を、しづめん爲の餘義なきはからひ、義時は申すに及ばず、尼公にも疑念はなきよな。かつふつ他念は無いと申すか。吳「何の御他念がムり

ませうや。そも〳〵こよひの一條は、義時とても寢耳に水、あまりの珍事に仰天なし、取あへず伺候の上、事の仔細を承らんと、ひそかに用意の其の折から、大江をはじめ和田三浦、在鎌倉の大名小名、前後の思慮なく動擾なし、一時に參集なされしゆゑ、いよ〳〵廣がるゆゝしき風說、一定仔細のはんべることゝ、夫の察しにつゆ違はず、此の流言の源は、禪室さまに加擔のともがら、同志うちさせうず結構にて、申し觸らせし苦肉の策略　時「ムゝ、さてはさやうの仔細であッたか。さる深意ありと知らざるゆゑ、只理不盡なるはからひと、老の一徹忍びがたく、すぐさま御所へ推參なし、目のあたり尼御臺を、詰問なさんといらだちしは、アゝ我れながら、不覺々々。此の上は義時の諫に去たがひ、じッと蟄して御沙汰をまたん。　昊「其のお言葉をうけたまはり、夫に代り御ン使に、立ッたる此の身が心の安堵歸ッてかくと傳へんには、夫相州にも嘸よろこび。そんならいよ〳〵御ン怒りは　時「オゝサとけた、さッぱりと解けたはやい。

ト此のトタン、小簾のうちにて

牧「イゝヤ解けぬ、解けませぬわいの。　昊「エゝ。さう、おッしやるは、母上さま　牧「相州ぬしのお使ひがら、母が對面しませうわいの。

ト時政の、室、牧、の方、下髮時樣の盛服、去づ〳〵とたちいで、上手前のかたにすまふ。

昊「オゝ、これは〳〵母上さ、ま、母上さまにもあらためて、宵よりの一伍一什を、よう申しわけいたせいと、くれ〴〵も夫のいひつけ　牧「アコレ〳〵、其の間にあはせの追從言葉、やめにして貰ひませう。何ぢや、此の母にも、あらためて——其のにもとは何のため。コレ、そもじもよう知ッての通り、三從は女子の訓、嫁いでは夫に去たがふ時政殿に否が無くば、みづからが何の故障いひませうぞ。去かるにあらためて此の母にもとは——マゝゝゝおきゝやいの、此の母をば——夫はあれどもないがしろに——マゝゝ我意をふるまふ邪心女と——イエ〳〵其の證據は今宵の措置、三代相恩の御主君をば、毒害なさうず惡人と、ようかりそめにも疑うた、よう惡名をおつけやッたの。昊「サゝゝ其の仔細はつい只今、父上さまに、申しひらき、根無し

事とはとくより御ぞんじ　牧「フム、すりや根無し事と知ッてゐながら、義時も、尼御前も、事ありさうに若君御前を、多勢で守護なし、還御せさせ、此の鎌倉中一ぱいに、ます〳〵惡評募らせしは、只此の母に、みづからに謀叛の惡名つけうず爲か。　吳「何のマア物体ない、さら〳〵以てそのやうな　牧「さうで無くば何故に、まづ根無しごとの發頭たる、其の惡者をば糺問せいで、なぜ浮名をば募らせましたぞ。　吳「サアそれは　牧「まッた、みづからは兎も角も、北條一家の大恥辱と、よも氣づかぬとは、えいふまい、然るに何ぞや、義時は、影も見せず、沙汰もせず、今となッて体よきいひわけ――みづからは繼母ゆゑ、ないがしろにするも道理なれど――父御に對して不孝でないか。　吳「サアそれは　牧「サア〳〵〳〵、其の返事きゝませうか。

ト吳羽の前じゆつなきこなし、時政始終氣をもむ思入ありて

時「マヽヽヽ、奥の腹立も一理あれど、義時が申すも道理、畢竟は世上の動擾を鎮めんため、餘義なく一時　牧「すりや義時の申すことをば、アノ道理ぢやとおぼしめすか。なさぬ中ゆゑ人百倍、まはり氣邪推もあるならひと、千幡君の介抱にも、心を摧き身

を惱まし、夜晝苦勞の絶ゆる間なく、心をつくせし御もてなしを、何ぼなさぬ中ぢやとて、かりそめにも逆心とは――エヽどこを見て、どう睨んで　時「サヽヽヽ、それがおことのひがみごゝろ、義時がうたがうた譯では無けれど　牧「ナニ、ひがみぢやとや、まはり氣とや。成程まはり氣でムらうわいの、みんな邪推でムるわいの――イエ〳〵みづからはひがんである、ひがんであるゆゑひがみの無い、尼御前にも義時にも、若しや邪推があらうかと、生中無うてことかけぬ、政範といふ實子あるゆゑ、苦勞の絶ゆる間は無く　時「そヽ　牧「エヽきかぬ〳〵、きゝませぬ。生まれて女子の身となるとも、繼しい母にはなるまいもの――エヽなぜ、今ごろ悟ッたぞ。それにつけても不便なは、不便なはあの政範　時「そヽヽさう一圖に仔細もきかず　牧「エヽ、其の仔細は聽くに及ばぬ。義時が疑うたを、みづからが疑うたを、有理ぢやとあるからは――さうぢや、みづからが心は定ッた。

ト牧のかた憤怒の形相、ついと起ち、すぐに奥へゆかうとする。　時政、吳羽の前はッと驚き

時「こりや何處へ　吳「まあ〳〵おまちなされませい。牧「エヽ、はなしや――はなして下され。たッた一目和子に、政範――時「マヽヽヽ、まあ〳〵下に。

ト時政牧の方をとめる、牧の方狂氣の如く、とゞむる兩人を振拂ひ、奥のかたへかけ入らんとする、此の時下手より前の場の平賀朝雅、重成入道の二人急ぎ入り來たり、やう〳〵牧のかたをとりおさへる。牧のかた聲たてゝ泣き伏す。

時政、吳羽の前、氣を揉み立寄り、何事かいひ慰めんとするを、朝雅とゞめ

朝「吳羽の方には、六郎重保、何事やらん願用ありとて、御便宜を彼方の一間に――此の場はそれがし心得たり――まッた考公には――稻毛どの、ソレ最前の一伍一什を。

トよろしく皆々に呑込ま」せる。

稻「オヽいかにも――老公には、憚ながら、御閑室にて暫時の間――吳羽御前にも、マヽあちらへ。

ト吳羽の前心得て下手へ、時政は小童をつれ、稻毛と共に奥へ、皆々はいる。あ

と牧のかたと朝雅と殘る。牧のかた尙泣き伏してゐる、朝雅すりより、あたりへこなしあッて

朝「先刻よりの御怨言、一々御尤とお察し申す。義時の疑ひは、畢竟尼御臺の御ンさしがね、賢女なれども、さすがは女性、さかしきだけに疑念深く、兎もすれば御ンまはりぎ、これ去かしながら上下君臣と別かれさせ、いまだ母上の御氣質をようお酌取遊ばされぬゆゑ――さもあれ不貳のまごゝろは、竟に天地に通ずるためし、必ずお心に懸けられまするな。牧「ノウ推量して下さりませ、あの政範さへ無いならば、けふより前にも幾たびか、口へだしていひたいこと、主であらうが何であらうが、まことをいへば我が子も同然、それに何ぞや、將軍家の威を鼻にかけ、後妻と見くびッて、事につけ物につけ、意地くねわるい尼御前、そのかた組の義時夫婦、いひたいことは山々あッても、ひとつは主といふ名前が楯、又た二つには政範をば、跡目にでもせう下心かと、義時はじめ一門に、肚さぐらるゝがくちをしく、こらへこらへてゐたものを、邪推にもことをかき、千幡君を毒害なし、あの政範を將軍家の、跡目になさんくわだてと

は――よう邪推したぢやムらぬかいの。此の邪推の鹽梅では、よしや今度の濡衣は、此のまゝに乾いても、不憫なはあの政範――貌ばせなら、聲音なら、千幡若に似たゝけに、おひゆくさきの末々まで、嘸世の人にも目をつけられ、野心もあろかと疑はれ、如何なる憂目を見やらうぞや。それを思へば此の母が心はちぎるゝ思ひぢやわいのう。朝「そのお歎はお道理千万、今大小名多しと雖も、何人か老公の威權に及び申さうや。其の内方たる母上は、若し御實母でおはさうなら、尼御臺は申すに及ばず、恐れながら將軍家とても、憚り重んじたまはんずらんに――まつた御愛兒政範ぬしも、ゆめさらさやうの懸念もなうて、立身出世あるべき筈を――げにまゝならぬ世とはいへど、容貌こそはよう似たれど、發明怜悧は千幡君に、はるかに優る稟性――こよなき家門に生れながら、げに母上の仰の如く、先を取越し案ずれば、心にかゝる和子がゆくすゑ　牧「サアそれゆゑに今日を限り、時政どのとの縁を切つて黑髪おろし――みづからさへ無いおらば、和子が身に嫌疑もあるまい――どうぞあの子の行末は、ナウ婿どの、朝雅どの、頼むは御身の外には無い、稻毛親子とも協議し

て、どうぞ頼ない政範の、力になつて下されいのう。

ト牧のかた愁のこなし、朝雅よろしく思入。此の時奥より稻毛入道たちいで

稻「アイヤ其の御思案、よろしかるまい。

ト去づかにいひ、牧の方の下手にすまふ、牧の方、朝雅よろしく思入。

稻「イヤナニ、牧の御方、和子の行末を案じさせられ、御隱居遊ばされん御決心は、さることには候へども、御方おはしまさず相成りなば、平賀朝雅どの在すと雖も、他は悉く他人も同然、和子の後楯はと〳〵無く――まつた承る所によれば、怪しからぬ今宵の浮説は、前將軍家に一味の輩が、申し觸らせしことゝあれども、一旦かゝるよからぬ風説、鎌倉中に廣かつたれば、容易に疑ひは取消しがたし。イヤナウ朝雅どの一たび染つたる白き絲は、また故の色に復るを難んず。濕るれば草枕の諺あり。御高慮はいかゞでムるな。

ト氣味あひにていふ朝雅も思入あつて

朝「げにそこもとのいはるゝ如く、世上一ぱいに喧傳したれば、彼の悪説の根を絶つ

こと、一朝一夕には叶ひがたし――まッたいちはやく根を絶たざれば、枝葉を生じ花實を結ぶ。

ト稻毛と牧の方とへ思入あッていふ。此の間牧のかたぢッと思入。

牧「ほんに言はるればそれも有理――すりや如何にせば我が子の身の爲　稻「されば――それがしが存ずるには――所詮疑ひのかゝりし上は、毒食へば皿の喩――さきんずれば他を制す――此の上はいッその事に　牧「エヽ。

ト朝雅、コレとおさへ

朝「ハテ卒爾千万――壁に耳が

トあたりへこなし。

朝「ござりまするぞ。

ト三人よろしく思入こなし。

第二段

(其一)　藥師堂の落慶供養

上のかた石の階段、岡の上に新築の鐘堂、階上階下共に、三ッ鱗の紋附いたる幕を張り、はるかに大藏郷の山野森林の遠見、正面にほッたて小屋、新御堂普請小屋場と書いたる棒杭、材木いろ〳〵立てかけあり。木工四郎作(五十格好)同じく甲、乙、丙、丁、いづれも烏帽子袴の時裝、長き板材にゐならび、又は大なる角材に腰かけ、銘々下賜の酒を飲んでゐる。恰も本堂にて供養最中、鉦太鼓など賑かにきこゆる。すべて鎌倉大藏郷新御堂背面の躰。

甲「ナント北條さまの御威光はすばらしいものか。たッた三月の間に、かういふ滅法界もない藥師さまのお堂が出來た。何でも世の中は威光と金だ。乙「さうとも〳〵。お大名衆も多いが、威光くらべぢやア、こちの北條さまに齒はたゝねえ。四「ほんに齒がたゝぬといへば、お憫然に二品頼家さまは、どう〳〵お薨りなされたげ

な。頼まれぬは人の身の上、誰れあらう前の大將軍さまともあらう御身が――ア情ない〳〵、なんまみだぶ〳〵。　甲「ヤレまたお、株のお念佛か。おめへのやうに常住はかなんでゐた日にやア、所詮は人間をやめにやアならねえ。　丁「さうよ〳〵、世の中は廻り持よ。驕る平家久しからず、あッちが下りやアこッちが上り、天運とやらが順環して、北條さまの御全盛　丙「こちとらが願うては、ねッから聽かッゑやらぬ神佛も、全盛な北條さまが願はッしやれば、二つ返事の御利益　甲「牧の方さまの御願が叶ひ、御秘藏子の政範さま、お齡はたッた十四なれど、從五位下左馬ノ介さまにならッしやッて、今度御臺所さまお迎ひの爲に御上洛、御副役は平賀右衞門佐さま、畠山六郎さま。　丙「其のお祝ひやら、御祈禱やら、お堂の落成たお慶びやら、前代未聞の此の御供養　乙「其のお庇でこちとらまで、たらふく酒が飲めるといふのは、ナント有難いことではないか。

ト皆々よろこぶ、四郎作ひとり浮かぬ顏。

四「人盛ンなれば天に克つ、お憫然なのは前將軍さま、あのやうなお身分でも、非業といふことはまぬがれない。　ア、なんまみだぶ〳〵。　乙「コウ〳〵〳〵、何ぞといふと二言目に、ヤレはかねえの、無常のと、北條さまの御全盛に、おめへはケチをつける氣だな。　四「めッさうな、なんでそのやうな　乙「ウンニャさうだ。どうかすると平常から、奥齒にはさまッた物のいひやう。なんまみだぶつの譯をきかう。ヤイなせなんまみだぶつだ。

ト立ちかゝる、皆々とめる。

丙「マ、、、、いゝとことよ〳〵。　乙「よかねえ。なせなんまみだぶつだ。　甲「マアサマアサ、なんまみだぶつは口癖だアな。　乙「その口癖が氣にくはねえ。　甲「そんな無理をいふもんぢやアねえ。　乙「何だと、無理だ。　丙「コレサ〳〵、マアいゝとことよ〳〵　乙「よかねえ〳〵。　皆々「マアサ〳〵　乙「きかねえ〳〵。

ト立ちかゝり總立になる。此の騷ぎのうち、上のかた石段より、前幕の牧ノ左源太、家來二人つれて出で來たる。

左「かしましい、鎮まりをらぬか。

トこれにて一同うろたへ、下にゐる。

左「場所柄をも辨へぬ不屆者めが。　豈「へイ〳〵　左「もはや御供養も相濟んだれば、御下向に程あるまじ、立騒いで無禮あらば、どいつもこいつも首がないぞよ。　豈「ヒエヽ。　左「以後をきッと慎みをらうぞ。　豈「へイ〳〵。　左「汝等には用事はない、穢いものを取りかたづけ、きり〳〵と退散いたせ。　豈「へイ〳〵、畏りましてムります。

ト皆々はいる。あと左源太家來に向ひ

左「コリヤヤイ、牧ノ御方には、こよひ御祈願の御趣意あッて、子の刻まで御籠り、たゞし相州どの、左馬ノ介どのには、もはや御歸館に程あるまじ、予は少々此のところに所要あれば、其の方共身共に代はり、必ず共に粗相なきやう　家「心得ましてムりまする。　左「ゆけ〳〵。

家來はいる、左源太殘り

左「ヤレまづこれで相濟んだが、さて、これからが、此の方の一大事ぢや、是非とも今日は、まづ入道から口說きおとし、あの美しい照子の前を、申しうけねば相ならぬが、

どうぞ首尾よくあの入道を。

ト思案の思入、此のうち醫師、紀河の宗近、人をもとむる體にて、下手より入來たり

家「そこにおいでなされまするは、牧ノ左源太さまではムりませぬか。　左「あのうつくしい照子の前を　家「モシ〳〵、左源太さま〳〵。　左「申しうけねば相ならぬが

家「コレサモシ、左源太さま。

ト背をうつ、左源太びッくり

左「エヽ、びッくりいたした。和主は醫師の紀河の宗近ではないか。　家「よいところでお目にかゝりました。今日の御供養には、御一門御參會と承り、稻毛ノ入道さまに、火急の御内談がムりまして。どうぞ閣下さまのお肝煎で、おわはせなされて下さりませ。　左「何ぢや、稻毛どのに火急の内談、ハテ似たこともあるものぢやわえ。此の方も稻毛どのに火急の内談、第一は此の方の内談、其の方の内談相すまんうちは、此の方の内談――イヤさうでない、此の方の内談相すまんうちは、其の方の内談

相濟まんうちは――エヽ何だか原意がわからなくなッて去もうた。ヤヽ入道は何とせられた、今一應尋ねてまゐる、和主は此のあたりに相待ちをりやれ。宗「ありがたうムりまする。

左源太石段を上り、はいる。

宗「ハテ何のことか、ねッからわからぬ。それはさうと、どう考へても、あの毒藥トいひかけて、あたりへこなし。

宗「一足飛に立身して、御典藥になりたいばッかり、ツイ稻毛さまの口に乘り、うッかり調劑は去たなれど、どう考へても腑に落ちぬは、稻毛さまの口ぶり――きのふ大工の四郎作が、問はず語りの噂といひ、萬一ひよんなまきぞへに――エヽ思ひだすもそヽげがたつ。どうあッてもあの藥を、コリヤ取りもどさにやならぬわえ。

ト心配の思入。こヽへ向ふより稻毛入道の女、照子の前、腰元折枝、かつぎなり、塗笠を持ち、いで來たり

折「御病後のおからだゆゑ、嘸お艸臥でムりませう。アレあそこに見えまするが、今

度出來ました新御堂でムりまする。照「スリヤあの御堂に、六郎さまは　折「さやうにムりまする。照「エヽうれしや、早う案内してたもいの。折「マヽ、おせきなされまするな。よう心得てをりますわいなア。

ト折枝さきにたち、小屋の前へ來たり、宗近を見つけ

折「モシ〳〵、ちと物が尋ねましたい。畠山の六郎さまは、よもやまだ、アノお下りではムりますまいな。宗「オヽさうおッしやるは、稻毛さまの――お腰元ではムらぬか。二人「エヽ　宗「オヽ、あなたさまは御息女さま。

二人は惡い處で見つかッたといふこなし。

宗「よう御參詣でムりましたナ。ヤレ〳〵おすこやかな其の御樣子、もうおさッぱりとなされたかナ。折「さうおッしやるは、宗近さま、マわるいところ――イエアノわるいどころか、ずんとおよろしうムりまするわいなア。

ト二人貌見あはせ、困ッたといふ思入。

宗「それは〳〵、重疊々々。ヤ、重疊といへば、先以て幸ひの上天氣、此の上もない御供

養會、入道さまにはさぞお疲れ、ちやうど愚老も入道さまに　折「アモシ、いさゝか仔細あッて、けふ此のところへ姫さまが、おこしあッた其の事は、入道さまには内々ゆゑ　宗「ナニおこしあッた其の事は、入道さまには内々とは　折「ハイアノ極内でムりますれば　宗「ハテナ、すりや最前お下りでないかとあッたは　折「ハイアノそれは　宗「アノあれは　折「サア畠山の六郎さまに　宗「ナニ畠山の六郎さまに。成々、成る程〳〵。　折「アノいさゝか、わたくしが、お願ひ申す事あッて　宗「アイヤ〳〵——その儀は兼ねて、成るほど、如何さま——こりや御内密が御尤。よろしうムる、呑込申した。幸ひ愚老序ムれば、六郎さまを此のところへ　折「スリヤアノあなたが——それはマア〳〵忝うぞんじまする、が、どうぞ入道さまには　宗「ようムる、念には及ばぬ。ようムる〳〵。

トひとり呑込んで石段を上り、はいる。

折「むさくるしうはムりまするが、マこれへなと、去ばらくお掛けなされませ。

ト折枝材木の塵を拂ひ、主從腰をかける。照子の前思入あッて

照「父上の目を忍び、たッた一言六郎さまの、御心根をきいたる上と、やう〳〵あくがれ來て見れば、忽ち人に見咎められ、あさましい目を見たわいのう。折「アレまたしてもお氣の小さい。おいひなづけの中といひ、おちいさいから御一所に、お育ちなされたお從兄弟ぐし、密事といふではなし、何のマアその御遠慮。今にもあれ六郎さまが、こゝへお出遊ばしましたら、存分お怨みをおッしやりませえ。いざ御婚禮といふ間際になッて、何ぢや、仔細がある、破談する——橋市の賣買ではあるまいし、ヨウマあのやうに言はれたもの。サ、何がお氣にめしませぬ、家柄か、御縹緻か、お育ちか、お氣だてか　照「アゝコレ、又してもはしたない。誰彼時でもこゝは往來。折「ホイわたくしと去たことが、あんまり貴嬢がお内氣ゆゑ、マ此のやうにおッしやらばと、思うたのが口へでゝ、ホゝゝゝゝ。マそれにしても、あんまりなは先方さま、一年二年三年と、ツイ延び〳〵に沙汰もなく、藪から棒の御破談は、どうした表裏でムりまするか、さッぱり合點がまゐりませぬわいな。照「サア薄々は知ッての通り、そも此のたびの御破談は、伯父婿畠山重忠さま、公け私しの事につき、祖母上御存生の

其の頃さへ、父上とはお心合はず、それを祖母さまが苦勞にして、兩家の爲にと五歳まで、六郎さまをみづからをば、御膝元で手鹽にかけ、お育てなされし海山の御恩がへしもならぬ間に、祖母さまには御大病、其の御いまはに、忝なや、六郎さまをみづからをば、行末必ず夫婦にせよ、それぞすなはち天下の爲、兩家の爲ぞとくれ〳〵も、繰り返しての御遺言。何辨へぬ子供氣にも、世に嬉しかりし約束の、反古となッたるけふこのごろ。

ト照子の前愁の思入。此のトタン、折枝ふと石段の方に目をつけ

折「アヽモシあそこへ六郎さまが、嬉しや、お從者もおつれあさらず。幸ひあたりに往來もなし、ナア申し日ごろのお怨み、存分におッしやりませ。

ト折枝下手へゆきかける。

照「アヽコレ何處へ。ナウコレ待ッて、そなたがこゝにゐやらいでは　折「イエ〳〵速に歸りまする、ツイアノ一寸　照「アヽコレ折枝――ナウまッて――アヽコレ折枝きかぬふり、足早に下手へはいる。照子の前あとを追うて下手へ行く、此

のうち畠山の六郎重保、石段を下り、人を求むる風情、四下へこなし、上手を見廻しながら眞ン中へ、照子の前は下手を見やりながら眞ン中へ、双方おぼえず突きあたりてびッくり、よろしくこなし。六郎無言にて上手へ戻らうとする、照子の前こらへかねし思入、思ひ切ッてかけより、六郎の袖をひかへる。

照「喃、まッて下さりませ。保「さういはるゝは、稻毛の御息女、照子の前どの。何ぞ御用ばしムりまするか。

ト袖を拂ふ、照子の前うつむいてすゝり泣き、默ッてゐる。

保「さてはそれがしに用事の人とは――公向の御用ならば、只今にも承らん、私事に候はゞ、往日申進せし通り。御用とは何事でムるな。

照子の前ヤハリ無言で泣いてゐる。六郎ッカ〳〵と行かうとする、照子の前あわてゝおひすがり、また袖をひかへる。

保「馴々し、おはなしなされい。照「六郎さま。あんまりでムりまするわいなア。親と親とはどうあらうと、自からとあなたとは、六歳五歳まで一所に育ち、大きうなつ

ても北條の御別邸では面をわはせ、互ひに氣心知りあうて、親と親とが仲たがひを、必ずなだめ行末は、祖母上さまの御遺言を　保「ヤア祖母上の御遺言を、忘れぬ御身が何として、祖父時政どのを說き惑はし、祖母上をおしこめまゐらせ、北條家の後妻となりし、あの牧の方に阿りへつらふ、父と兄とを諫めたまはぬ。照「サヽ、それにこそは譯あること　保「剩へ、それのみならず、前將軍家禪室樣をば、御身が父の重成入道、讒言なせしそれのみか、修善寺にての御他界は――御横死と專ら取沙汰。照「エヽ　保「此程の問答も、庭訓に戻る憚り。さらばでムる。照「ナウまッて下さりませ、父入道にそのやうな、非道の行ひあらうとは　保「イヤ其のいひわけ無用でムらう、非道の嫌疑解くるまでは、まッた父と一つで無い、忠義の證據の見えざるうちは　照「すりや其の證據が見えたなら、亡き祖母さまの遺言通り

ト照子の前思はず取りすがらうとするを、六郎ついと身をすさり

保「ヤア、公私を混せし其の一言聞く耳は持ち申さぬ。

ト口早にいひ、見かへりもせずはいる。此の以前、石段より牧ノ左源太、酒に醉

うたる、こなし、酒おくびをしながら下りかけ、此の躰を見てびッくり、嫉妬の思入、ぬき足して下り來たり、普請小屋のかげに去のぶこと。照子の前よろしくこなし、聲たてゝ泣き伏す。トゞ、貌をあげ思入あッて

照「いはうと思ひし万分一も――あんまりすげない、六郎さま。

ト此のうち左源太よろめきながら忍び足に立ちいで、照子の前のうしろへ來て

左「あんまりすげない、てゝ照子の前

トだしぬけに抱きしめる。

照「エヽ、誰れぢや〳〵。左「みゝ、身共ぢや。照「エヽ、慮外な、誰れぢや〳〵。左「アイタアイタ。ハテ大事ない〳〵。身共ぢや〳〵。

トいひながら手をはなし、前へ來てずッと貌をだす。

左「ソーレ身共ぢや。ハヽヽヽ、牧ノ左源太照英でムる。

照子の前むッとしてきッとなり

照「誰れかと思へば左源太どの、嗚呼のふるまひ――ウハヽヽヽ。嗚呼とは〳〵、おことこそは嗚呼のふるまひ、日ごろは蟲も殺さぬ貌して、どこを春の風が吹きまする、何のかのとすましておいて、人のぬぬのを幸ひに、あの石地藏の六郎と　照「エヽ　左「コレ聞いたぞよ〳〵。　サ此の上は堪忍ならん、此の通り入道にぶちまける――トサいふのは嘘だ。ハヽヽヽ、マヽヽヽこゝへムれ〳〵。　ハテムれといふに。一體全體、武士の意地づくより申せば、只今の如き不埒、聞棄には相成らん、がマヽさやうな儀はどうでもよろしい、まだ結納は相すまねど――コヽヽヽ何處へ〳〵、身共の宿の妻ときまッたそもじ　照「エヽ馴々しい、そこおはなしなされませい。左「コヽヽヽ照子の前、そりやあんまりすげないといふもの。現在親御「ごにんだう」入道どのが、諾というて宿の妻に

ト袂をとらへる。

照「たとへ父がどういはうと、わらはと父とは　左「エ　照「一つでは、ムりませぬわいなア。

ト手荒く振りはらッてついと行く。おッかけてすがらうとするを突き戻す。左源太ヨロ〳〵となる。照子足早にはいる。左源太くる〳〵とまはりトゞべたりとなる。

（其二）　堂内の密談

正面新薬師堂の左右には三ッ鱗の幕を張り、堂内には奥深く壇を左つらひ、本尊薬師如來の像を安置し、鏡板、欄間、等式の如く、香爐、燈明、花瓶、供物、禮盤、其の他飾り付けよろしく、其の前よきところに、時政の室牧の方同子息左馬權介政範、廣廂に近く稲毛重成入道、同じく息、次郎重政、よろしくすまひ、手をつき頭をさげてゐる。供養式全く果て、參詣の人々已に散じたる初夜の體。

稲「法雨を法界に降し、災難の垢穢を洗はせらるゝは、醫王善逝の御威德、梵席に梵風を扇ぎ、短縮の命を延べさせらるゝは、忝なくも、藥師如來の御本願、尤も妙なりと承る　政「世にありがたき御建立、我々どもは申すに及ばず、結緣の爲に群參せし、無智

蒙味の細民まで　稙「信心膽に銘し　政「隨喜の思ひを　二人「いたしまして厶りまする。牧「建立の其のはじめに、かゝる大造を營まんは、前將軍家二品禪室、伊豆にて御他界の間際といひ、まつた近年御賦役かさなり、士民疲勞の折柄ゆゑ、世上のおもはくもいかゞなんど、例の畠山重忠父子、まつた義時の異見もありしが、もとより此れは私し事、病身なる左馬ノ介が、一身安全の宿願ゆゑ、更に下民をわづらはさず、夫時政が自力の營み、如來も御納受ましまして、滯りなきこたびの落慶。これといふのも畢竟は、親子の衆の骨折ゆゑ、ほんに嬉しう思ひまするぞや。稙「惶れ入つたる其のおことば、滯りなき御落成は、全く以て、時政公の御威德、人皆なづき去たがふゆゑ、令せざれども事はかどり、また〻く間に此の大造　政「天が下廣しと雖も、北條家の御威光に、ならぶものなき御全盛　稙「憚りなく申さうならば、將軍家は置き物同然、誰がいつし鎌倉山の星月夜、星は即ち大小名、誰が目にもつきは將軍、大日輪の執權は光あまりにまばゆきゆゑ、名所の名にこそうたはれざれ、照らすは月の幾百倍

トいひかける、此のうち政範よろしく思入、牧の方重成を目でおさへ、政範へ思入あつて

牧「イヤナウ、其の星月夜といふことは、星影月に似たるをいふとか。鎌倉山にいひかけしも、名所ゆゑにはあらずと聞く。オヽ、それはさうと、日もはや全く暮れはてたり、ドレみづからは改めて、誦しかけし御經を。今がたもいうた通り、夜半の風の身にさはらん、和子は館へ、片時も早く

トこなしあつていふ。

範仰ではムりますれど、母上が子の刻までは　牧「イヤナウそれは要なき遠慮。義時どのも、右衞門佐も、さきだつて歸られたり、母の身は案じずとも、早う館へ戻りやいのう。稙「あのやうに仰せあるに、お違背あるは却つて御不孝。御方の御意に去たがひ、サヽ御館へお歸りあれ。今ごろは遠州公にも、嘸かしおまちかねに候はん。政「サヽ、お歸りなされ〳〵。

ト皆々すゝめる。政範心の殘る思入、やがて決心して母に對ひ

範「さやうならば母上さま、お先へ退るでムりませう。牧「オヽそれがよい〳〵。ソレ次郎、侶まはりを　政「ハヽ、心得ましてムります。

ト次郎立たんとする、此のトタン下手にて「うせう〳〵ト左源太の家來、藤内藤吾、前の塲の木匠四郎作をひッたて堂の前へ來る。次郎たちあがり廣椽にいで

政「ヤアさう〳〵しい、何事なるぞ。吾「ハッ稲毛さまへ申上げます、主人左源太の命にて、御境内に非違なきやう、警固いたしまかりありしに、うさんなるは此れなる耄奴　内「最前暇を遣しましたに、尚うろ〳〵と徘徊なし　吾「只今もお幕の蔭より、去きりにこなたをさしのぞきけしからぬ獨りごと　内「なんまみだぶつとちやんぽんに、お舘をさみなす口吻此奴胡亂と存せしゆゑ　二人「ひッたてましてムります。四「なんまみだぶ〳〵。政「ナニ、お舘をばさみせしとは。吾「左馬ノ介さまがお十四にて、從五位下に御昇進は、法外過分と申せしのみか　内「榮耀には餅の皮分に過ぎた御全盛此の行末が懸念なぞヽ　吾「存外なることを申し散らし、剩へ前將軍

家の御他界をば、當お舘の御ン去わざと、いはぬばかりの奇怪の雜言。四「なんまみだぶ〳〵。稲「ナニ前將軍家の御薨去をば、當家の御所爲と申せしとな。容易ならざるその一言。察する所そやつめは、前將軍家をそヽのかし、御謀反すヽめたてまつりし、比企、仁田が餘類ならん。次郎、きッと詮義いたせ。吾「仰の如くこやつめは、もとは比企さまにお出入せし、木匠めでムりまする。稲「さてこそ〳〵。油斷ならざる當節柄、必定同類これあるべし。ソレ汝ばり上げて白狀させい。四「アコレ待ッて下さりませ、お處刑は厭ひませねど、白狀することはムりませぬ、同類も何もムりませぬわい。ツイ思ふことが口へ出て、ア、なんまみだぶ〳〵。政「ヤアいけしぶとい其の老奴、ぶちのめして白狀させい。吾、内「心得ました。

ト藤内藤吾たちかヽる。此のうち左馬ノ介思入あッて

範「兩人控へい。吾、内「ハヽ。範「無用なるぞ。吾、内「ハヽ。

ト二人ひかへる。稲毛親子不審の思入

稲「何故に政範ぞのには　政「此の拷問を　稲「無用なりとは。範「其の老人の申す所

は、一々ことわりぢやとぞんじまするゆゑ。政「何とおッしやる。

ト これにて牧の方もよろしく思入。政範少しく膝をすゝめ

範「長兄相州義時どのすら、御齢四十までは小四郎にて、いまだ受領の御沙汰無く、まッた父上時政公は、草創の御功臣、御舅にて在せしかど、君御一代の其の間は、曾て受領のお許しなく、六十歳の御時まで、北條四郎と申せし由。其の例には似もやらず、寸功もなき若輩が、分に過ぎたたびの任官、冥加の程もおそろしと、みづからすら思ふもの――其の老人が正直の、言葉に科がムりませうや。程「左馬ノ介どのゝお言葉ながら、それはちとちがひ申すぞ。積善の家には餘慶あり、父祖の德は子孫に報ふ。時政公の御功勞によッて、此のたびの御任官、何の其の、遠慮に及びませうや。政「況や才智抜群にて、大人も及ばぬ政範どの、御任官に何のひがこと。それをさみなす此の耄奴剩へ、前將軍家に最負なし、當家をそしるは必定曲者。いで、それがしが苦を加へ、本音を吐かせ御覽に入れん。

ト また立ちかゝるを

範「アイヤ、其の御折檻には及びませぬ。政「とはまた何故にな。範「老人が正直は、面と言葉にあらはれたり、曲者とは思はれませぬ。前將軍家の御他界に、不審をいだくも尤なれば、當家の所爲をあやしむも、ことわりかとぞんじまする。喃母上、長兄はじめ重忠どのが、御異見ありしはこゝのこと、此の政範が過分の任官、まッた御他界の間もなきに、目ざましい造營供養、人皆目をそばだて、心のうちでそしッても、威勢におそれ、言はぬと聞く。老人が直言は、此の方のよき誡め、慮外をゆるし、放免あるやう、母上へ願ひまする。

ト 此のうち四郎作涙を流し、思入

四「アありがたいおこゝろざし、活如來さま〳〵。かういふお方があればこそ、どんな業も消滅し、一人出家して九族天に昇るとやら。アなんまみだぶ〳〵。

ト 牧の方じッと思入あッて

牧「なるほど、和子のいやるもことわり、殊には供養會の折でもある、藥師如來の寶前にて、苛責の苦はいとわさまし。ナウ次郎、其の者の詮義は無用、そのまゝ放ち遣し

ませうぞ。政「スリヤアノこやつを、このまゝに　牧「いかにも。これも罪業消除のいとぐち　政「稲「エ　牧「イヤナウ、これがまことの、放生會ぢやわいのう。

ト稲毛親子がてんのゆかぬといふ思入。

政「ヤオレ者共命冥加の老奴めを、ナソレ、きり〳〵と、ぱッたてませい。

ト藤内藤吾に向ひ、ぢばりあげて邸へつれゆけトこなし。政範それと見て取りし思入。

範「アヽイヤ、その老人には、いさゝか問ふべき仔細もあれば、それがし只今引立て申さん。政「それは餘りに憚り多し、かゝる卑しき下人をば　範「それがしが勝手でムれば　政「ぢやと申して　範「ハテ勝手ぢやと申すに。政「へー。範「左樣ならば母上樣、御兩所にも、御免下さりませう。稲「左馬ノ介どのゝお立ちなるぞ。

トこれにて從者小童大勢いで來たる。政範、四郎作に早うついて來いトこなし。四郎作手を合せ拜むこと。皆々政範を警固し、向ふへはいる。

牧「圖らぬ事に思はぬ暇どり、御身がたも嘸氣づかれ。餘事は左源太が心得居れば、

遠慮なう退出して、一日の疲れをお休めあれ。ドレ更めて御經を。

トかたへの經づくゑに向かはんとする。此のうち入道親子貌を見合はせ、思入あッて膝をすゝめ

稲「アイヤ老ばらく。最前より、申上げん〳〵とぞんじながら、兎角何かと人目の妨げ、さしひかへまかりありしが、せんころ縞にきこえおきし、南蠻傳來の秘密の藥劑牧「エヽ　稲「やう〳〵のことにて、手に入れましてムりまする。

ト懷中より式の如く包みたる藥劑をとりいだし、牧の方の前に置く。牧の方ぞッとしたる思入、貌をそむける。

稲「さて此の毒藥の効能といッぱ、効神の如しと雖も、不思議の藥劑、故、皮膚の色も變らず、外目には只急病と相見ゆれど、四五日にて衰弱なし、竟には全く命を取る、おそろしき大毒藥。牧「エヽ　稲「まッた、此の如く、色もなく、絶えて香りもムらぬゆゑ、如何なる食にお加へあるも、決して勘づかるゝ氣づかひなし。時機は失ふべからず、御臺所御下向以前に、御下手あるが最上策。さすれば万一にも事露れ、一大事に及

ぶといふとも、朝雅上洛の其の間に、かなたにて策をめぐらし、かやう〳〵と兼ねての手配り、やつがれまた策略あり、決して御懸念に及ぶべからず。何は去かれ、此の品は、またと得がたき奇薬なれば、人目にかゝらぬ其のうちに、何卒お納め下さるべし。

ト此のトタン御堂のうしろ、下手幕蔭より、前の塲の醫師、紀河の宗近うかゞひいづる。同時に同じく上手、立木のうしろより、北條相摸守義時、忍びすがたにて立ちいで、樣子を窺ふ。宵闇にて、四下おぼろげなるこゝろ。此のうち牧の方いひだしにくいトいふ思入よろしくあつて

牧「イヤナウ重成どの、今更となつて、此のやうなことといふときは、嘸や、女子はいふ甲斐なし、何事も出來ごゝろ、頼まれぬ根性ぞと、嘸、さげすみもなされうなれど、榮耀に限りは無しとかや、今更やう〳〵心附けば、空怖ろしい身の罪障。此の身の榮花、我が子の譽、ありし昔の月見れば、盈つればかけし宿願の、忽ち叶ふ如來の靈驗――あらたかなるを見るにつけ、そゞろ懺悔の萠せし折柄、けふまた導師が供養會に、あり

がたかりし御宣說――空怖ろしくかたじけなく、さッぱり心が變はりましたわいの。政、稻「エヽ。牧「いつぞやの商議は、只一時の夢と思ひ、淺ましいその品は、早う取り納めて下さりませ。

トこれにて親子貌見あはせ、呆れし思入、入道膝を進め

稻「牧の御方、そりや御本心で仰せらるゝか、イヤサ御本心で――ナニ御本心――ハテナア。

トよろしく思入、ずッと寄りて聲をひそめ

稻「イヤナニ榮耀には際限なし、盈つれば虧くると、仰せあれど、人間わづか五十年、花咲かぬ木も秋來れば、落葉に漏れぬ有爲無常。十二分と望をかけ、やうやく八九分が世のならはし。はじめよりちゞこまり、三ケ國の受領もあらば、世の思ひでとおぼしめさば、兎角思ふとはたがひ易し、老公は早や古稀の御齡、一旦萬一の御事あらば、尼御臺は申すに及ばず、相模守どのも苦手なれば、笑止や、和子のうしろ楯は、天にも地にも朝雅どの――たゞ一株の稚櫻、うきをみ山にうづもれて、日蔭の春をや送

りたまはん。政「心憎しとおぼしめす、尼御臺が御權柄も、當將軍家の御腹ゆゑ。主客たちまち處をかへ、尼御臺になり代はり、新將軍家の御母と、かしづかれたまはんもお心一つ。稻「いま日ッ本國に、天子はあれども無きに等し――六十餘州に此の上なき、榮華の手蔓が目前に、散らつくものを、いふ甲斐なや、事成らんず今となり俄に二の足ふませらるゝは――さては左馬ノ介どのゝ御任官にて――さすがは女性。すりや從五位下で御滿足か、イヤサ、左馬ノ權ノ介と、日本六十餘州の總追捕使、大將軍のみくらゐとは、天地のちがひと御存じ知らずや。齡ばへなら、貌ばせなら、瓜を二つの政範どの、新將軍家とならべて置いて、何らを取ると申さんに、似たるが中に勝劣あり、品といひ、器量といひ、たがの目にも和子へ落札――然程の器量はありながら、くちをしや、御陪臣のひこばへゆゑ、右を見ても左を見ても、皆丈高き老松古柏　政「其の古株に蔽はれて、花は咲くとも見えがくれ、埋もれたまはん行末を、御無念とはおぼしめさぬか。牧「サア、その行末も氣がゝりなれど、生中のことゝいださば、自身は兎も角も、政範が身の上に　稻「サヽ、生中のことならば、其の御懸念もことわりな

れど、六十餘州の大君を、つみなはんもの天下に無し。事なッたる曉には、やつ七鄕は築山同然　政「七里が濱も泉水つゞき　稻「將軍宣下の御拜賀に、千幡どのゝ衣冠束帶、去年の拜賀を見るにつけ、姿かたちもそッくりあのまゝ、何と、見るやうではムりませぬか。政「かほど申せど、御がてんなく、いふ甲斐なくも掌に握りし寶を棄てさせらるゝか。牧「サアそれは　稻「尼御臺にはわるずゐせられ、相州どのには邪魔がられ、さらでもいとゞあぢき無き、老後を送らせたまはん所存か。牧「サアそれは稻「機會は失ふべからず、此の藥劑は天の賜　政「片時も早くお用ひあッて　稻「モシ御ン方　政「牧の御ン方　稻「いかゞでムる　政「いかゞでムる。

ト兩人つめ寄る、牧の方じッと思入。此のトタンどろ〳〵と俄にはげしき山風の音。堂內の燈火一時に消え、毒藥の包、ひら〳〵と庭上に飜りおつる。

政「ヤヽ只今の山颪に　稻「誰そ無いか。ともしび〳〵。政「父上、大切なる藥劑は稻「オヽいかにも。ヤヽ無いぞ〳〵。誰れかある、ともしび〳〵。

ト此のうち入道親子堂內をさぐりまはりて藥包をさがすこと。

稻「正しく風にて庭上へ――ソレ次郎、人の來ぬ間に　政「ハヽ。

ト此のうち下手より、醫師宗近窺ひいで、這ひまはりて藥の包を拾ふ、トタンに上手より義時うかゞひいで、一寸たちまはり、次郎其の間へはいりダンマリ摸樣、トゞ義時藥の包を奪ひて元の幕蔭へ身をかくす。醫師は一散に向ふへ逃げてはいる。

政「さてこそ曲者。

ト向ふを見込みキットこなし。堂内の牧の方稻毛、不審の思入。左源太松炬をとってかけいづる。

（其三）　山下の人殺し

正面岡の裾を見せ、所々に立木、皺だゝみなどよろしく、上手に大なる松の立木。下弦の月やう〳〵昇りたれど、四下は尚おぼろげなる心すべて大藏鄕南の山下道の體。爰へ向ふより前の場の木匠四郎作「なんまみだぶ〳〵ト念佛を

となへながら出で來たり、よき所にとまり

四「若殿さまのお慈悲にて、惜しうもない命を拾うたれど、世の成行を見るにつけ、淺ましいことばッかり。御最負うけし比企さまはじめ、仁田さまも御滅亡、上つがたから下々まで――アあさましい〳〵、ちやうど痩犬の食爭ひ、之れを思へば、早う如來さまにひきとられた、女や婆々アどんが羨ましい。なんまみだぶ〳〵。

ト念佛をいひ〳〵正面へ來る。此のトタンばた〳〵にて、向ふより醫師紀河の宗近、一散に逃げて來て、四郎作に突きあたり、げしとんで飛びこえる。同時に又ばた〳〵にて、稻毛の次郎、拔刀にて一散にかけて來る。宗近うろたへて松の幹に上らうとして、上られぬことなし。此の中倒れたる四郎作起き上る、次郎かけつけ宗近と思ひ、一刀に斬倒す。宗近之れを見て、腰のぬけたるこなし、松の幹にだきついて藏れてゐる。次郎死骸に立ちより、月影に透かし、貌を見ること。

次「ムヽさてこそ。

ト引起こし、懷中を探ることよろしく、トゞさがしものゝ見あたらぬといふ思入、不審だといふこなし。

次「一度ならず二度までも、樣子を窺ふ不敵の曲者、心はやり只一刀に――エゝ去なしたり。正しく外に今一人。

ト思入。宗近これを聞きふるへる。

次「詮義の手蔓を失ひしは、我れながら不覺の至り。

トよろしく思入。此のうち下手に松炬の見ゆるこゝろ。次郎驚き、急に血刀を拭ひ、鞘に收めうとする、トタンに下手より左馬ノ介政範、老僕に松炬をもたせ、太刀持の小童をつれ、潛行の體にて出で來たる。次郎つゝと出で、血刀にて松炬をたゝき落す。老僕驚いてけしとぶ拍子に、四郎作の死骸につまづき、ワッといッて逃げる。此の聲に驚き、小童も太刀を持ッたるまゝ、一所になり、一散に元來しかたへ逃げゆく。政範指添へに手をかけキットとなる。此の間に次郎元來し方へ一散に逃げのびる、之れと同時に紀河の宗近松の蔭より這ひ

だし、起き上り、上手へ逃げうとする。政範目早く見とめ

範「曲者まて。

トこれにて宗近また腰のぬけたるこなし、ヘタクタとなる。政範走りよッて襟上をとる、宗近ふるへながら手をあはせる。

範「合點ゆかざる此の場の光景。オゝ無慚なる下人の去かばね。今逃げ去ッたる曲者は、必定汝が同類ならん、眞ッ直に白狀いたせ。宗「わゝゝわたくしは、どゝ同類ではムりませぬ。御免なされて下さりませ。

ト此のうち政範月影にて宗近の貌を見ること。

範「汝は醫師の宗近ではないか。宗「エゝさうおッしやりまする貴下さまは――オゝ若殿でムりましたか。政「ヤイ宗近、定めし仔細を存じをらう、眞直に申さずば、疑ひは汝にかゝるぞ。

ト四郎作の死骸に立ち寄り、つく〴〵見て

範「こりやこれ正しく最前の――ヤイ宗近、此の夜深に何用あッて、汝はこゝらに徘

徊きをるぞ。宗「その儀は。範「老人を殺せしは何者ぢや。宗「サその儀は。政「ヤア胡亂な、眞直に申さずば、父上に申しあげ、嚴重に申し附けうか。宗「マヽ申し上げます〳〵。ぢやによッて愚老めが、この塲に居あはせました其の事は、何卒お慈悲に、御内分に　範「ナニ此の塲に居あはせしを、内分にして呉れいとは　宗「愚老が此のところに、居あはせしことが知れますれば、此の首がムりませぬ。その老人は愚老と見ちがへられ、ツイばッさりとやられました。ヤレおそろしや〳〵。政「シテ何故に其方は、此の塲に居あはせしを包み藏すぞ。宗「その儀はどうもわなたさまには　範「言はずば邸へ引ッたてやうか。宗「ぢやと、申して此の事ばかりハ　範「ムヽ童と侮り白狀せぬな。此の上は邸へ歸り、仔細を父上へ申しあげん――さうぢや。

ト政範行かうとする、宗近あわてゝ袖をひかへ

宗「申します〳〵。ぢやによッて御大事を、立聞ました其の事は、何卒わなたさまのお慈悲で、お包みなされて下さりませ。範「ナニ立聞きせし大事とは　宗「サア其の大事といふは　範「其の大事とは

ト宗近絶體絶命だといふ思入。

宗「何をおかくし申しませう、いつぞや稲毛の入道さま、ひそかに愚老をお招きなされ、云々の仔細がある、毒藥調合仕れと、のッぴきならぬお頼み。慾に迷うて毒藥を、ツイ調進致したれど、よく〳〵思へば心ならず、御供養會はこれ幸ひ、御退出をまちうけて、入道さまにお目にかゝり、何卒藥を取戻さんと、待つ間のたいくつ御堂の脇、聞くともなしにお三方が、世に怖ろしい御相談　範「ナニお三方とは　宗「稲毛さま御親子と　範「稲毛父子と　宗「御母上の牧の御方　範「エヽ。シテ其の怖ろしい御相談とは。

此のうち立木の茂りたる間より、北條相模守義時前の塲の忍び姿にて、ひそかに立ちいで、二人の問答を立聽きしてゐる。

宗「恐れ多くも將軍家へ、私しめが、調進せし、其のおそろしい毒藥を

トいひかける、義時「つゝと」出て拔きうちに宗近を斬り倒す。宗近すぐ息絶ゆる。政範おどろき飛びすさり、指添に手をかけ、キッとこなし。

義「お騒ぎあるな左馬介――義時なるは。

ト血刀を拭ひ鞘に收める。

範「ヤヽ、さういふお聲は――オヽあなたは兄上、此の體は。　義「ホヽ、不審はもッとも――まづ〳〵これへ。

トこれにて政範前へでる。

義「下人は口のさがなきもの――かりそめにも母上の、御ン身の上にかゝはる大事――ふびんながらも――ナ

ト死骸へ思入。

範「スリヤ兄上には、最前よりの一伍一什を　義「いかにも――まッた御ン身が懸念の種たる、其の怖ろしき藥劑も、仔細あッてそれがしが、圖らず手に入れ、ずなはちこゝに　範「エヽ。すりや今きゝし一條は、アノ眞實でムりまするか。　義「申すもうたてき、事なれども、我れはたいさゝか仔細あッて、圖らず今宵の御密談を　範「エヽ。すりやいよ〳〵母上さまが　義「コレ。御密談の其の最中に、さと吹きおろす山颪、

燈火消えし宵闇の、御堂の庭に吹きとぶ藥劑――ゆくりなくも手に入れたり。是れ天道の助くる所か。焦眉の大事は除きたれど、心にかゝるは此の行末　篤「エヽなさけなや、淺ましや、さういふお心おはさうとは、さら〳〵思ひもかけざりしが、心ならぬ事あるゆゑ、供養會の歸途、内意を含め從者をかへし、最前ひそかに兄上の、御館までまゐりしところ　義「同じ心に我れもまた、取ッてかへせし新御堂　篤「藥師如來も母上の、其の邪まな御心を、まもッてはたまはらぬか。何足らぬことも在さぬに、なぜそのやうなおそろしい、世にあさましい御ンくわだて。エヽなさけない、母上さま。

ト政範よろしくこなしあッて、なげく。

義「聲高し、人や聞く。子は親の爲にかくすとか、此の上は死を以ても、兄弟互ひに母を諫め、道ならぬ御ン心を、正路に戻しまゐらすべし。畢竟おことを秘藏のあまり、ふと御心の迷はせられ――イヤ、誠心を以て諫めんに、なぜ御迷ひの晴れざるべき。ゆめ忠孝を忘れたまふな。とはいふものゝ、兒故の闇には　篤「エ　義「アイヤ、

子ゆゑに迷ひ、子ゆゑに悟る、煩悩やがて菩提のことわり。一つ環の接目となるは、子を思ふ親の愛着心――迷ふも悟るも、子を可愛しと思へばこそ。天にも地にもかへじとまで、復なきものにおぼしめす、おことが諫めまゐらさバ、御ン迷ひの晴れんは必定。よく〳〵分別し賜へよ、母上、父上の御ン大事、まッた天下の、御ン爲なるぞよ。

ト思入あッていふ。政範じッと思入。義時懷中より毒藥の包を取りいだし

義「此の品は御ン身の手元に――御異見申さん其の折の、一つの證據ともなるべければ。

ト政範藥をうけとることありて

範「サアそれにつき兄上に　義「アヽコレ。あの人聲は、正しく迎ひの

ト下手へ思入。此の時下手より、以前逃げゆきし老僕、小童先きに、義時の家臣數人、松炬をもちて入り來り、二人を見て

甲「ヤヽそれに渡らせらるゝは　乙「我が君ではムりませぬか。　丙「オヽ左馬ノ介さまにも　丁「御安泰にてゐらせられ　皆々「祝着至極にぞんじまする。　義「オヽ、汝等は

左馬ノ介を警固し、片時も早く上館へ　皆「ハヽア。

ト松炬をふりてらし、死骸を見て驚く。

義「ア、コリヤ〳〵。此の場の樣子は他言無用、老公の御下問あらば、下館よりと申しあげよ。イザさらば、左馬どのにも　範「さやうならば兄上さま。　義「サヽおゆきやれ。何事も、明日の日また

ト氣味あひ。政範心の殘る思入、皆々に警固せられ、上手へはいる。あと義時ひとり殘り、思入。

義「女子と小人とは養ひがたしと――機運おのづから循環して、天北條氏に禍す、十かへり松の、榮えも今の間、その機を知らぬ女性の猿智惠――ア度しがたし〳〵。ふびんながら政範は、遂には幹を枯らすべき、其の毒蔦のはびこる原、それとなく謎をかけ、みづから枯れよと勸めおきしが、齡にはまして利發なれば、所詮は與へし毒藥にて――ムヽ。心外一物無し、仁義、骨肉、觀ずれば皆方便。愚昧なる者此の理を覺らず、親疎に執着して親を傷ひ、名に執着して實を殘ふ。テモあさはかな人ごゝ

ろぢやなァ。

第三段

(其一)　七夕の大雷雨

正面、廣椽附の奥座敷、照子の前居間の體、書棚小簾など、飾りつけよろしく、下手さげて、廊下續き廻り椽の別室。居間前、秋草の茂りたる前栽、ゑよろ〳〵流れ。下手枝折戸。よき處ろに數脚の机をすゑ、幾本の燈臺に火を點し、香爐、供物など、總て古式の通り。居間の上手に照子の前、机をひかへ、菊燈臺の下に梶の葉に古歌を書いてゐる、女童甲、乙、小手卷に卷いたる願ひの糸(一)いろ十筋づゝ五色小手卷の數五ツ)を竿にかけてゐる。

唱「一、せに、只一夜てふ棚機つめの、契さへこそ羨まし、身はすて小舟梶の葉に、こがるゝ思ひかくとだに、誰れかさゝぎの橋わたし　淨「稲毛の入道重成が、此の一秋の、かりやしき、つくらぬ庭の千草かげ、いつしかくゝるゑよろ〳〵、水小萩がくれの蟲の、聲、星祭る夜の風情なり

ト此のうち女童糸をかけゑまふ。照子の前梶の葉に歌を書きかけ

照「オヽふたりとも太儀であッた。用あらば呼ぶ程に、遠慮なう退ッて休みや。やんがて折枝が戻りやッたら、よい褒美をとらせませうぞや。甲「ありがたうムりまする。乙「さやうならば　甲、乙「わたくしどもは　照「オイノウ。若し折枝が戻りやッたら、すぐにこちへというてたもや。甲、乙「かしこまりました。照「ゆきや〳〵。

甲乙「ハヽア。

ト廊下よりはいる。

淨「ともしのかげに照子の前、ゑよんぼりと筆さしおき

ト此の間歌をかきかけて愁のこなしあッて

照「いつぞや藥師の御堂にて、父上大逆の御所行ありと、重保さまのお物語り、びッくりはゑたなれど、よもやと思ふ未練から、心ためさん方便かと、重保さまをば疑ひしが、思ひぞあたる、昨日けふ。萬一疑ひが眞とならば、日ごろの願ひは皆うたかた、生

き存へて何たのしみ。あの折枝にいひつけて實否を探る其のうちも心にかゝる善と惡。吉左右か、惡左右か、幸ひこよひは七夕の願ひ一つは叶ふといふあの遣り水に祈願を籠め、此の梶の葉を當座の歌占。さうぢや〳〵。

浮「ひとりうなづき前栽に降りたつ裾の秋の風千草の蟲も音をとめて、かたわれ月のかたふくや、空くろ〳〵と雨もよひ、

ト文句の通り、照子の前、歌をかきたる梶の葉をとりて階子を下り、ぢよろ〳〵水に立ちより、空に向ひ祈念すること。

照「我が祈る事は一つぞ天の河、空に知りても違へざらなん。「表は吉兆、裏は惡兆。

浮「祈願をこめて抛入る、折からさッと落す風、あなやと見る間梶の葉は、行衛白萩夏萩の、ぢづえがくれに流れゆく

ト照子目をねふり、梶の葉を水中に投げる。ドロ〳〵と風の音、梶の葉、ぢかけにてはるかにとび、萩の下枝にかくれて流れゆくこと。

照「エヽどんな。もしもやこれも、願事の

浮「若しや叶はぬ知らせかと、又女氣のしをり戸口、息せきかけ入る腰元の、折枝は目早く

ト照子の前、愁然と流をみやり、よろしく思入。下手より折枝急がはしくいで來たり、折枝戸をあけて内に入り

折「オヽ照子の前さま、こゝにおいでなさりましたか、一大事になれましたわいなア。

照「エヽ大事とは、心がゝり。折「マヽあれへ、こゝは端近

浮「誘はるゝも誘ふも、胸轟くや、遠鳴りの、神來たるらん大空は、くろみ渡りて物すごし

ト折枝こなしあッて照子の前を促して居間に上る。此の間遠雷の音。

照「シテ大事とは、その仔細は　折「お氣のせくはお道理ぢやが、容易ならぬ御ン大事、大きい聲ではいはれぬこと。大殿さまがお留主ゆゑ、心をゆるし飲ッたか、左源太さまのけふの泥醉、お邸からの歸路でがな、小間物巷路の往來で、のめらしやるやら、反吐すやら、お侶は鈍な藤内どの、恰どそこへ出合がしら、貧乏くじと引きおこし、水ま

あらする、貌洗ふ、ばづみに落ちし一通の、穢い物で汚れたを、洗ふはづみに封とけて、ふッと讀んでびッくりぎやうてん。マヽこれ讀んでごらうじませ。

淨「いひついさしだす一通を、ふるふ手にとり、見るよりぎッくり

ト文句の通りあッて

照「ヤヽこれは父上から、牧の御ン方への　折「アモシ

ト折枝よろしくこなし。

淨「封もたのみも切れ果てゝ、讀むこと〳〵に驚きの苦痛とかはる阿鼻叫喚、わッとばかりに泣き伏せしが、ずッくとたちまち文まきをさめ、奥の間さしてかけいづる

ト照子の前、密書を讀む〳〵驚く思入、悲歎のこなしよろしく、大なきに泣く。

トゞ決然と貌をあげ、密書を手に持ち、急に奥の方へゆかうとする、折枝あわてゝ袂をひかへ

折「アヽモシ何處へ、血相かへて——こりや何となされました。照「エヽ止めやんな、そこ退いた。面とあうて證據は此のふみ。折「スリヤお前は大殿さまに、其れを證

據に御意見を　照「ハテ知れたこと、そこ離しや。折「イヽヤめッたに離されませぬ。如何お年がゆかねばとて、お前はお氣でも狂うたか。これほどまでの御大事、けふまでもお前にまで、お包みなされし御惡事を、今さら御意見なされたとて、おいそれと大殿さまが、何でお聽きなされませう。毛を吹いて疵とやら、破れかぶれといふ事が、どんな大事にならうも知れぬ、お心しづめ、コレ申シ、マア〳〵おまちなされませ。照「それぢやというて、此のまヽには　折「サア其の邊をわたくしも、案じたなりやこそ此のおしらせ——マア〳〵下にござりませ。短氣は損氣、此の折枝が、一生の智恵袋、事の破れにならぬやう、あざといながら思案がある——マヽ下にゐて下さりませ。

淨「言葉をつくしなだむれば、又はりゆるむ女氣に、涙のみこそさきだてり

ト折枝よろしくとめる、照子の前下にゐて又泣き沈む。

折「コレ泣いてムるところでない、此事餘所より露見せば、お家は滅亡それのみか、焦れてござる重保さまに、彌勒の世までも逢はれませぬ——サヽヽ、ぢやによッて

分別どころ、大殿さまの御爲にも、お前の爲にも此の大事は、成ッても大事、洩れても大事、外から露見せぬうちに、コレ申シ照子の前さま、お前の口から内々でかやうかやうと重保さまへ　照「エヽ。折「マヽヽヽお聽なされませ。仁義に強いと一ばいに、評判高い畠山樣、ふッとあうた其の時は、つれないやうにお見えなされても、親御樣も、重保さまも、お情ぶかいお氣質と、よう呑みこんだ此の折枝――サヽヽ、たとへ日ごろはどうあらうと、御親類なり、御こ大事、たのめば引かぬ義俠心に、きッとあぢよう双方の、破れにならぬそれのみか、親御さまとは別々の、お前の心も揭焉に成るかな成らぬか大事の瀬戸命にかけて折枝がお使ひ。幸ひこよひは重保さま、まだ腰越にござる筈、お侶がしらは瀬平どの、此の折枝が一生懸命、足らぬところは口上で、十が十までえおはせます。かういふうちも心がせく、ちやッと一筆、此の事をば　照「それぢやというて、親の惡事を　折「洩らすが却ッて孝行なら、何の仔細がムりませう。たとへお前がどのやうに、御意見あらうと日ごろから、聽く親御さまぢやムりませぬ。ましてや此れは牧の方さま、兄御さまヽで御合體、生中な事いひだせば、毛

を吹き疵のそれよりか、北條さまにも御緣者なら、仁義に強い畠山さま、何のお爲にわるからう。迷うてござるところでない、幸ひあれに筆硯――ヱヽモ鈍な、御料紙が

淨「ひとり氣を焦るまな先へ、ひらめく稻妻鳴る、神に、あなやとすさる後にも、キラリ稻妻刄のひかり、わッとたまぎる聲の下、ぬッといでし稻毛の入道

ト折枝料紙筆硯をとりそろへて、照子の前の前へ持行かんとする、トタンに雷近く鳴る、稻妻室内に入る、折枝びッくりたじろき、背後の襖につきあたる。襖越しに刀刄あらはれ、折枝手を負ひ倒れる、ト襖をけひらき、稻毛の入道血刀をひッさげいづる。

照「ヤヽあなたは、父上さま――こりやむごたらしう折枝をば

淨「かけ寄る姫をはッたとけたふし

ト文句の通りあッて

稻「いはうやうなき不孝者めが。子は親の爲に匿すといふ、其の一大事を他人に知

らせ、主親の破滅を思はぬ、揃ひし横道者めがうぬ。

浮「照子の前貌ふりあげ

ト照子の前起きかへり、きッとなッて

照「コレ横道といふことを、父上、あなたは知ッてかいなア。稻「なんと　照「今更いふはおそけれども、なさけない御くわだて、如何なる天魔の魅入れしぞや、だとへ非道の御大望が、首尾よう成ッても十年廿年、只かりそめの御榮花、天知る、地知る、後の世の報應はおろか此の世でも、大惡人の名を取ッて、淺ましい御最後を、今目のまへに見るやうな。横道者といふことを、かりにもおッしやるお心なら、御法體にもはぢたまひ、コレ喃申し父上さま、お心あらため下さりませ。

浮「袂にすがりかきくどけば、手負ひもやう〳〵面をあげ

ト折枝手きすをこらへ這ひより

折「此の折枝が人智惠も、所詮はお家を思へばこそ、人で無しとはお情ない。惡事をおぼしたちたまふも、御子孫の御爲に、成就しても成らず、成就ぬときは、何御ぞんじ無

い姫さまで、かゝりやつながる惡緣に、焦れてムる御方との、えにしの絲の斷れたなら、取りも直さず姫さまの、御玉の緒を斷らしやりまするが、コレ親御さまの慈悲かいなア。姫さま不便とおぼしめし、怖ろしい御くわだて、思ひとまッて下さりませ　照「オゝよういうてたもッたぞ。それほどまでにみづからを——コレ手は淺い、氣をたしかに——必ず死ぬまい、死ぬまいぞや。

浮「手負ひにひッしと抱きつき、いたはる袖に滾々と、流るゝ血汐血の涙、入道は耳にもかけず

ト文句の通り、よろしくある。

稻「ヤア身勝手なるよまひ言、女童の知ることかえ。助からぬ汝が命、きり〳〵とくたばりをれ。照「エゝなさけない其のおことば、すりや此れほどに申しても、道ならぬ企をば　折「思ひとゞまるお心は　二人「モシ、ござりませぬかいなア。稻「ハテ、くどい、しれたことだワ。照「ハゝハア。

浮「はッとばかりに泣き伏せしが、もう此の上はと、父が指添、ぬくより早く、喉へあは

やと這ひ寄る折枝、ひッたくッて我れと我が、乳の下深く貫くきッさきッと流る丶血は瀧津瀬、折枝は苦しき息の下

ト照子の前つゝと寄りて、入道の指添を扳き、自害せんとする、折枝指添をひきたくりて我が乳の下を貫く、照子驚き介抱する。

折「アヽモシかまうて下さりますな。どうせ死にゆく此の折枝が、最期に殘すたッた一言――お前樣は今こゝで、空に死なしやる御身で無い。叶はぬまでも異見して、命のばゝり、親御さまも、また兄御さまも助かッて、願の通り六郎さまと――たゞ

力艸「は六郎さま

浮「隙を見あはせ片時も早う、とい、ふ舌こはる斷末魔、入道怒りの聲荒らげ

稻「ヤア死際まで要らざる入智惠、にッくき不忠の下司女め。

浮「手負をはッたと椽より下へ、喃無慙やと照子の前、かけ寄る頭にはたゝがみ、抱きおこせば縡斷れて、ばッたり落つる指添の、血汐を洗ふ雨の足、車軸を流す如くなり

ト入道折枝を階段の下へ蹴落とす、照子の前かけよりて介抱すれど、折枝は已に息絶え、雷雨彌々はげしくなる。

浮「折しも奥よりかけ來る次郎

ト次郎重政、下手廊下口よりかけいで

政「父上こゝに御座ありしか、一大事と相成りましたぞ。稻「ナニ、一大事とは　政「ヤ、折枝があの體は　稻「大事を知ッたる下司女、むすめ照子をそゝのかし、訴人せんといたせしゆゑ、たちどころに成敗せり。シテ〳〵大事とは何事なるぞ。　政「密事を知ッたる紀河の宗近、當晩より行衞知れず、さてこそは油斷ならずと、思ふにたがはず宗近めは、當夜南の山下にて、義時の手にかゝり、空しくなりしと只今注進。稻「ヤゝスリヤ、義時が、こなたの密事を　次「氣取りしからは露見は目前。父上にはこれより直に、執權邸へ御ン越しあッて、御ン方と萬事の御商議。　稻「オヽ、先ンずれば他を制す、此の上は一刀兩斷――時宜によッては、義時もろとも　政「幸ひ平賀の右衞門佐どのも、こよひはいまだ腰越宿り、うれがしより密使を走らせ、いざといはば兼ねての計畧　稻「オヽ、何事も餘事はおぬしに――かういふうちも心がゝり、イデ〳〵

すぐに

淨「はや立ちあがる椽端に、これ喃まッてと照子の前

稻「エヽ又しても邪魔なとめだて　政「父上にはこゝかまはず　稻「オヽ合點

淨「奥の間さしてぞはしり入る

ト文句の通り、照子の前椽端にかけ上りとゞむるを、次郎立ちふさがる。此のひまに入道奥へはいる。此の間雨休み雷遠く鳴る。

照「此の上は――オヽさうぢや。

淨「はしりよッて死骸のそば、落ちたる指添、血染の柄、取る手をおッかけ、去ッかと止め、

ト文句の通り、照子の前自害せんとする、重政とびかゝり其の手をおさへ

政「ヤア血迷うたか、たはけものめが。折枝が最後は自業自得、何うろたへて此のありさま。照「エヽ何ゆゑとは何事ぞいのう。かくまで根深き御惡事を、知りつゝ御異見言はうにこそ、非道をすゝむる不孝不義。兄で無い、汚らはしい、そこ離して下

さりませ。政「ヤア兄に向ひ無法の雜言。コリヤおぬしは狂氣したな。マヽ離せ。

照「いや〳〵離さぬ、そこ離して

淨「兄妹爭ふ其の折柄、又一しきり降り來る雨蓑笠出立甲斐々々しく、枝折戸口よりかけ入る郎黨

ト文句の通二人爭ふうち、下手より稻毛の郎黨、籠手田の勘六、蓑笠でたちにてかけ來たり、

勘「大殿さまの御いひつけ、腰越への火急のお使ひ、一大事の御書狀は、はや御出來でムり升るか。政「オヽ心得た。今即刻

ト指添をもぎとッて、かなたへ抛げやり

政「いひふくむる仔細もある、書院先に相待ちをれ。勘「ハヽ畏ッてムりまする。

淨「はッと答へて引かへす、又吹き落とす山颪に、横ぶる强雨はたゝがみ、庭には千艸の逆浪だち、なびき倒るゝ供物机、まろぶ小手卷竿もろともに、五色の絲のさら〳〵

ト此の間照子の前もがき狂ふを、おさへながら、ふッと糸に目をつけ

政オヽこれ究竟。

淨これ究竟と、五色の小手巻、ひッちぎッてさそくの機轉氣も半亂の、妹の小腕ねぢあげて、泣き入りもがくをいましめ縄、餘るはぐる〳〵樣先の、柱にきッかと身づくろひ

次不便ながらもちばしの究屈

淨いふ間も心は奥のかた、足を空にぞ入る後に

ト此の間大あらしになり、前栽の飾り附けはた〳〵と倒れること、五色の絲竿のまゝ重政に倒れかゝる。ふと心附いたる思入泣きくるふ照子の前を、五色の絲を一束ねにして取縄のやうにして、之れにて縛り、樣先の柱に結びとめ、其のまゝ急ぎ奥へはいる。

淨無慚なるかな照子の前は、姿も亂れ、黑髪も、おどろ〳〵とふりみだす、雷雨が軒にいましめの、これや五濁の身を色絲に、もがくほど尙搦み縄

これ究竟と五色の小手巻、ひっちぎってさえくの
機轉氣も半亂の、妹の小がひなねぢあ
げて、泣き入りもがくをいまゝめ
縄、あまるはぐるゝ樣先の、
柱にまっかを身づくろひ
次「ふびんながらも
ちゃばゝの
窮屈

照「喃誰れぞ來て、此の絲解いて――たもいのう。叶はぬまでも今一度、いうて見たい、とめて見たい。

淨「我れを忘れてかけいだし、あせればまろぶ軒の端に、ひらめく稻妻横しぶき、さらでも袖の雨やさめ、骨身もそぼつばかりなり

ト文句の通り、いろ〳〵ありて、トゞ玄ばられたるまゝ泣き伏すこと

照「エヽ情なや、もはや時刻もおくれたり、此の上は折枝もろとも、父上の御ゝ爲に、玄で三途のみち玄るべ。幸ひあそこに指添が

淨「おぼえずかけよる目先に、ぬれそぼちたる以前の密書照子の前きッと目をつけ

ト文句の通り。トゞ軒端に落ち散りて雨にぬれそぼちたる以前の密書に目をつけ、きッとなる

照「折枝が最期の遺言に、叶はぬまでも此の事を、六郎さまにひそかに知らせ――オヽそれよ、こよひは六郎重保さま、まだ腰越にムるなら、こゝからは七八里、たとへ百里が千里でも、思ひこんだる女の念力、幸ひあらしの暗まぎれ、父兄と一つで無い、此

の身の心を神佛の、おはれみたまはば此の一念、やはか貫かいでおかうか。一念凝ッては石ともなる。南無や八幡大菩薩、觀音さま、藥師さま、こよひにちゞまる一家の運命。南無、叶へたまへ、きッてたべ。天道さま、佛さま。エヽきれぬか、くちをしや。

淨「躍り上りとび上り、正體なげくかうべの上、黑雨をつんざく稻びかり、又もや目につく以前の指添

ト照子の前、いろ〳〵もがき狂ふことわりて、トゞ指添に目をつけ

照「ムヽ、此の身も共に切らば切れ――あの指添で――オヽ、さうぢや。

淨「かけよる軒端にぐわら〳〵、轟くいかづち氣は半乱、身を横さまに白刄の上伏しまろび〳〵、糸もろともに身をすりつけ、きらん〳〵と狂乱の頭にひらめく稻びかり、左右に波うつ五色の糸、もつれ乱るゝ黑髪は横ぶる雨にさかたてがみ、蹶かへす裳裾のからくれなゐ、牡丹はな咲く石だに川に、母失ひし兒獅子の悲しみ狂ふ風情なり

ト照子の前、半狂乱となりて指添のほとりへかけ寄り、文句の通り、身をすりつけ、絲を切らんとする去ぐさいろ〳〵あり。トゞ數ケ所に疵を負ひ、尙きれぬこなし。

照「エヽきれぬか、きれぬかいのう。

淨「七顚八倒身もだへし、もがき狂へばいつしかに、雪の肌に紅の、雨篠みだす大叫喚かくとはるかに次郎重政、あなやと驚きかけいづる、椽ばな間近くぐわら〳〵、又もや破るゝいかづちに、あッとたまぎる右左り、づんざく柱、燃え立つ炎いましめも、ふッつと氣のつく照子の前

ト重政奥よりはしりいで、照子の前をとりおさへんとするトタン、椽の柱に落雷する、二人ながらアッといッて倒れる。照子の前は刄の上へ手ひぢく轉ぶこゝろ。

照「ヤヽきれた。チエヽかたじけなや、うれしやなア。

淨「手に取る指添肩先より、流るゝ血汐の雨灑津瀨腰越さしてぞ

ト照子文句の通り、一散に向ふへはいる。

(其二)　旅館の曲者

腰越驛旅館の中門外。深夜の躰。こゝへ平賀朝雅の郎黨甲、乙、丙、松炬をふりてらして、上手よりばた〳〵にてかけいで

甲「合點ゆかざる今の物音　乙「つゞいて聞こえし女の聲　丙「何にもせよ、とくと實否を　甲「たゞし申さん。

甲、乙、丙、下手へはいる。引きちがへて、下手より、北條政範の郎黨、△○□、同じく松炬をもちて出で來たり

△「ヤレ〳〵何の事だ。藤澤までとのお侶觸れが、急に腰越とかはッたゆゑ　○「けふばかりはのんびりと、霄寂の果報と思ひの外　△「ぐッすりよい心持に寐入ッたところを　○「きやッといッた女の聲と　□「今の物音で起こされたが　△「何の事だ、女はおろか鼠一疋　○「立ちさわいだ躰もムらぬ。　三人「ハテサテ馬鹿々々しい。

此のうち下手より以前の甲、乙、丙、戸板の上へ前の場の籠手田勘六(簑笠打扮)の死骸を載せていで來たり

甲「そこにムるは北條どのゝ御家來衆ではムらぬか。乙「只今かしこの古木の底にて　丙「うさんな死骸を　三人「見つけてムる。△「ナニ、うさんな　△○□「死骸とは

ト皆々立寄る、甲、乙、丙、戸板をおろし

甲「最前の大がみなり、一定此のあたりへ落雷とぞんじをりしが　乙「御覽なされ、あの折雷火に撃たれしものにや　丙「まッ此の如くくすぶりかへり　△「いかさま、甲斐々々しき此の打扮　○「こりや曲者に　△○□「相違ムらぬ。甲「此のまゝには捨置きがたし。○「いで我々も諸共に　丙「めい〳〵主君へ　皆々「申しわげん。

と此の時中門内より

藝「アイヤまゐるに及ばぬ。朝「それへまゐつて　二人「撿分なさん。

ト小童に松炬をもたせ、左馬ノ介政範、右衞門ノ佐朝雅、中門よりいで來たる。

朝「只今委細は聞き知つたり、面體は見わかずとも、衣服身のまはりに見覺え無きか。

範「懷中を改め見よ。　△○「ハヽ、畏ッてムりまする。

ト△○、勘六の懷中を改むること、密書のなかば雷火にて燒け焦げたるをとりいだす。

甲「なかば燒け焦げてはムりますれど　乙「どうやら怪しい此の一通。

トさしだすを政範うけとり

範「さてこそ。松炬これへ。

ト政範密書を繰りひらく、朝雅も立ち寄り見る、小童松炬をさしだし紙面を照らすこと。讀むうちに、政範朝雅双方一度に驚くこなし。

範「ヤヽ、これは

ト朝雅さそくに小童の松炬持つ手を抑へる、ト火炎密書に觸れてすぐ燃えあがる。

朝「エヽ何を粗相

ト小童をひきとらへ

朝「いたしをるのだ。

ト突きとばす。小童よろめき倒れる。皆々驚くこなし。政範、朝雅双方よろしく思入。

(其三)　奥庭の落花狼籍

畠山重保が寢所の前、旅館の奥庭。こゝに前の場の稻毛の女照子の前氣絶してゐるを、重保が郎黨瀨平、抱き起こし、重保燭をとり立ちかゝりゐる。瀨「ヤヽ曲者と思ひの外、こりやこれ正しく稻毛の御息女。重「ナニ稻毛の――照子どのとな。

ト重保も驚きて顔を見ること。

保「げに思ひがけぬ照子の前。かゝる深夜に只一人　瀨「ヤヽおめしものも血汐にまみれ、手疵を負はせたまへる御樣子。保「如何なる椿事出來せしか。何はしかれ、疾く介抱。瀨「心得ました。

ト介抱することよろしく

保「照子ぞの。瀬「照子の前さま。

ト照子の前やう〳〵心づき、目をひらき

照「オヽあなたは、六郎さまか

ト照子とりすがるを、重保しッかりとおさへ

保「コリヤ照子ぞの、氣がつきしか。照「そんならこゝは腰越かいの。すりや一念が屆いたか。チエヽ、かたじけない。

トうれしき思入ありて泣く。

保「氣がゝりなり、照子の前ぞの、如何なる變事の　瀬「起こりましたぞ。保「とく仔細を　瀬「お話しなされ。照「ナウ重保さま、一大事になりましたわいなア。

ト泣く。

保「不覺なり照子の前、泣いてゐる所でない。シテ其の仔細は　照「サア其の仔細は——此の一通——マこれを見て下さりませいなア。

ト懷中より前の場の密書をとりだし、重保に渡すを、受取りて讀む〳〵、大に驚く思入。

保「ヤヽヽ、こりやこれ正しく、御ン身が父の入道より——ムヽかたうぞは平賀の朝雅——容易ならざる此のくわだて。照「圖らず折枝が手に入れし、其の密書にて知ッたれぞも、何とせんかた談合を、立聞く父が非道の又不便や折枝は、あへない最後。

保「ナニアノ折枝が　瀬「エヽヽ　照「それさへあるに父兄が、惡事露見と見てとッて、平賀どのへ火急の內通、一定君の御ン大事と、聞き知る此の身はいましめの、えんにからまれ猶豫せば、親を地獄へおとすも同然、思ひ切ッたる未練の繩目、あなたを力の此の御訴訟、御ン方はじめ父兄にも、別條無いやう重保さま、此の身不便とおぼしめし、調停なされて下さりませ。

トよろしくこなし。此のうち重保密書を讀み了はり

保「驚き入ッたる大逆無道、此の文面による時は、毒藥調進の一條は、牧の方は申すに及ばず、あの右衞門ノ佐朝雅も、一味たること掲焉なり。ヤイ瀬平、汝はすぐさま飛

脚の準備。我れはこれより奥へまゐり、此の密書を證據に、日ごろより不審と存せし、あの朝雅めが作り忠義の面ひッぱき、きッと糺明いたしくれん。照「エヽ、すりやあなたは此の事をば、アノ表沙汰になされうとや。保「オヽサ照子どの、御身の心中も不便なれど、驚き入ッたる入道が大逆心、御身との縁もこれまでなるぞ。照「エヽヽヽヽ。保「ヤイ瀬平、何をうぢ〳〵。瀬「アヽモシ仰ではムりますれど、女性の御身ではる〳〵と、雷雨も恐れず腰越まで、おこしなされし照子の前さま、親御さまのお命を、助けたいばッかりの、其の御孝心をお察しなされ、何卒此の儀は穏便に　保「ヤアそれしきを汝に聞かうや。天は一物の爲に季節をたがへず、忠義を存ずる武士が、公道を私情にかへんや。瀬「サヽさやうでもムりませうが、あなたさまと姫さまとは、おいひなづけの御ン中らひ　保「默れ、瀬平、かゝる大逆露顯の上は、牧の御ン方とて用舍は無い、まして逆家のかたわれをば、緣者などゝは汚らはしいわえ。照「エヽそりや聞こえぬ、お情ない。子の口づから現在の、親の非道を御訴訟も、一つは心の潔白を、あなたに知らせほめられて、せめてもそれを功に、親の命を助けうと、思うてゐ

たを情ない、聞こえませぬ、六郎さま。保「ヤア見さげたり、照子の前、おのれを清うせん爲に、父を訴人とは不孝の振舞。照「ハヽハヽハア。保「エヽ、時移る、きり〳〵と支度いたせ。照「すりやどうあッても、此の身の願ひは。保「くどい、叶ひ申さぬ。照「ハヽハヽア。

ゆかうとする、袖を捉らへてはなさぬを、手荒く拂ふ。照子はたと倒れて其のまゝ泣きおとし、すぐ懐刀をぬいて乳の下を貫く。

瀬「ヤヽこりや何と――早まッたことをなされましたなア。

ト瀬平うろたへ介抱する。

照「イヽヤ早まらぬ〳〵。子は親の爲にかくすといふ訓に戻りし不孝の罪死ぬる時刻は後れたれど、只一目でも重保さまに、息あるうちに逢ふことの、叶うたは身の本望、たとへ不孝の子となるとも、それに心は殘らねども、此の身の心を重保さまに知られで死ぬるが、いまはの迷ひ。

トよろしく苦しむ。重保は手負に寄りそひ

保「オヽ其の心は此の重保、よう推量して候ふぞや。照「そんならわらはの心中は
保「オヽ心底見えた。照「チエヽうれしや、かたじけない。
ト重保の手をとらへ嬉しき思入、だん〳〵におちいる。
保「南無阿彌陀佛、〳〵〳〵。
ト照子ばたりとなる、主從よろしく愁のこなし。トゞ氣をかへ
保「オヽ我れながら不覺千万。汝は死骸を取りかたづけ、急ぎ出立の用意いたせ。
瀬「畏ッてムりまする。雪「早くいたせ。瀬「ハヽ。
ト瀬平死骸をいだき下手へはいる。
保「いで此の上は、朝雅を糺問なし、時宜によッては、たゞちに鎌倉へ引きかへさん。
オヽさうだ。
トゆきかける。
朝「アイヤおいでに及ばず、朝雅みづからそれへまゐり、委細申開くでムらう。
ト下手奥の植込のかげより、平賀右衞門佐たちいで、氣色ばみて立戻る重保に

向ひ
朝「イヤナニ六郎どの、最前よりのあらましは、ぱゞ物かげにて承ッたり、密書を證據
にそれがしを、疑はるヽ條道理なれども、それには深き仔細あること　保「ヤアさら
〳〵し右衞門ノ佐、和殿が表裏の心腹は、それがし夙より疑うたり、言葉巧みに陳ず
るとも、此の一通が動かぬかすがひ、速かに觀念なし、尋常に白狀あるか、但しは繩う
ちひッたてゆき、問注所の白洲に於て、きッと糺問仕らうか。朝「逆上まい、六郎重保。
身不肖なれども此の朝雅は、忝くも源家の嫡流、頼義朝臣が六代の末孫にて、故右幕
下の猶子でムるぞ。出所不明の密書を證據に、見事和殿が一存にて、繩うたるヽな
ら、うッて見られよ　保「ヤア舌長し。え打つまいと思はるヽか。罪證既に顯然た
るに、不明呼ばヽりかたはらいたし。朝「ハテサテ、死人に口無し、誰れを證據に、其の
一通の出所を明すぞ、イヤサ、畠山と稲毛とは、人も知ッたる多年の確執、僞筆謀書も
間々あるならひ――サヽヽ曖昧不明の證據をいひたて、人もあらうに執權の、其の
執權たる牧の方を、大逆罪におとさんなどヽは――ムヽさてはいひなづけと聞き

及ぶ、女が自害に動顛して――コリヤちと血の氣が上ッたさうな。笑止至極、ハヽヽヽ。保「ヤア存外なり、たけ〳〵し。おのが心に引きくらべ、此の六郎重保が、執權の威勢に怕れ、おめ〳〵かゝる大逆を、見のがすとばし思はるゝか。證據不明の咎めあらば、此の肚かッさばく分の事。六郎が心は鐵石、今一言、用捨はないぞよ。朝「フムすりや、理不盡に此の朝雅に、手を下さん所存なるか。コヽヽ今一歩進めて見よ、私の闘諍に我が手を下すまでもなし、上洛の侶まはりの外に、兼ねて京師護衞のため、ひそかに具したる數百の兵、一呼すれば、前後左右人の山だ。何と、一歩でも出されまいがな。保「ムヽ　朝「ハテサテ馬鹿なつらな。ウハヽヽヽヽ。

ト嘲弄する。重保無念のこなし、トゞこらへかねし思入。

保「もう此の上は

ト刀の柄に手をかける。これより先きあけかけたる雨戸に寄りそひ、始終を窺ひゐし左馬ノ介政範此の時あッと叫び、椽側よりまろび落ち、血を吐き苦しむこと。二人とも驚きかけ寄り、抱き起こし介抱する。

保「こは如何に――こりや何となされましたぞ。朝「俄の煩悶心得がたし――ヤア誰れかある。燭火々々。

ト呼びたつるを政範制して、苦しむこなし。

範「アヽコレ玄ばし――内々にていふことあり――ナウひそかに〳〵。保「ナニ内々にて　朝「いふことありとは。範「右衞門ノ佐どの、六郎どの、世にあぢきない左馬ノ介が、語るもつらき物語り、ナウ一通り、聽いてたべ。六郎どのゝ手に入りし、密書に仔細は分明ならん、改めいふには及ばねど、まことや慾には頂きなし、獸に心奪はるれば、紛ふまじき太山も、獵夫が眼に入らぬと聞く――情なや母上様、此の政範を、不便とおぼすお心から、怖ろしい御ッくわだて、稻毛の法師が勸めにて、毒藥を調劑せさせ、日毎の供御に加へつゝ、次第に御不例募らんやう、くわだてたまふ淺ましさ。不思議に手に入る毒藥は、兄上の御こたまもの。千疋の駒狂ふも、母御が意の駒の所爲、其の駒に鞭くるゝは、罪深や此の身ぞと、兄上にをしへられ、はじめて知ッたる惡因緣――夙より覺悟は極めたれど、未練が殘り死にかねて、肌身はなさぬ此の毒藥。

こよひ最後の時到り、日ごろ信ずる佛神へ、此の身を犧牲の誓願は、母が善心發起のため、又二つには天が下の、騷動未然に除かんため。ナウけふあすの此の身をば、不便と思うて給はらば、遺恨を忘れ意趣をすて、母牧の方が惡事をば、内分にして下さりませ、此の政範さへないならば、源涸れし濁り江の、末の流れはおのづと清む、ナウ聽き入れて下されいのう。

ト右と左にとりすがりて、よろしくこなし。重保も愁のこなし、感じ入りし思入。

堅けなげに候ふ、左馬ノ介ぞの。和君が切なる心のうち、察し入りて候ふぞや。御わざはひの根だに絶えなば、意趣遺恨は私しごと――平賀ぞのゝ所存はいかに。孝子の心を無にせんこと、武士の本意にあらじ。朝「申さるゝ所我が意を得たり、朝雅いかでか異存あらん。只こゝに一つの難義、左馬ノ介は、御臺所御迎ひの正使なるに、思ひがけぬこよひの珍事、勿論上洛は叶ふべからず、さりとて直ちに引き返さば、恐らくは疑惑を生じ、間ちがひ出來のもとゐとならば　簫「ナウ、それにも思案あ

重「六郎かゝてあらん限りは、オヽすや〜と寐入るゞ如くハテあや〜き二人「毒のきゝめト左馬介眠るやうになりて抱いてある

り、我れ若しみづから毒を飲み、世を早うせしと聞きたまはば、母さまが泣き悔み、ま
たどのやうな御ひがみ。こよひの事は秘しかくし、明日死なうとも駕にて、病氣と
いひたて上洛し、彼方にて煙となし、程經て病死と知らせてたべ。
　トよろしくこなし。重保感心の思入。
保「ア、殘る隈なき心づかひ――如何なればかくまでに、器量すぐれて生れながら
朝「魁けて咲く此の花の、魁けて散るならひとて　保「芳しき名を末の世に、傳へんす
べもなさけなや　鼓「海より深い母さまの情を仇と身を悔やみ、たんだ一目御貌を、
見ること叶はず死ぬるとは　保「今いにしへにたぐひ無き　範「いかなる惡緣　雪「
惡因の　朝「もつれつながる　保、朝「因果ぞし。
　トこのうち政範うツとりとなる、重保朝雅よろしくいたはる。
朝「コリヤ左馬ノ介姉もろともに右衞門ノ佐が、おことに代り末長く、母御の介抱心
得たるぞ。必ず心を安んじませうぞ。保「六郎かくてあらん限りは――オヽすや
〳〵と寐入るが如く――ハテあやしき　二人「毒のきゝめ。

ト左馬ノ介眠るやうになりて抱いてゐる重保の腕へグタリとなる。朝雅、重保貌見あはせ、双方よろしく思入こなし。

第四段

(其一)　閑室の密談

北條邸の一室、上手に平賀右衛門佐朝政、うつむきて愁の思入、下手よき所に北條家の女房甲、乙、丙、ゐならび、皆々愁の思入、うつむいてゐる。

朝「二無き者におぼされし、左馬介が不慮の夭折、老公のお力落し、牧の御方の御愁傷まのあたり睹る如く、此のたび下向の途々も、さこそと推察致しをッた。スリヤ所詮御方には、御對面は叶ふまじきか。甲「さればでムりまする。御持病の御痞は、やう〳〵癒らせたまひたれど　乙「三度のお物もめしあがらず　丙「昨晩も夜もすがら、泣き明させたまひしゆゑ　甲「そのお疲れにやうと〳〵と　乙、丙「つい御寢なッてござりまするゆゑ。朝「オヽ、さもさうず、さもあらん。御寢なるは何より良藥。

ゆめ〳〵驚かしまゐらすべからず。去からば身共は此のところにて、お目ざめの時刻をまたん。遠慮は無用、お身たちは奥へまゐり、御介抱申してよからう。甲「さやうなれば仰に去たがひ　乙「慮外ながら　三人「わたくしどもは　朝「オヽ、お目ざめを知らせくりやれよ。　三人「かしこまりました。

ト甲、乙、丙、會釋して奥へはいる。朝雅殘り、よろしく思入。

朝「左馬介が非業の最後は、願うても無き我が仕合せ。新將軍家は幼弱にて、到底負荷に堪ふべからず、今天が下廣しと雖も、此の朝雅を除いては、系圖器量双つながら、兼ね備へし者一人なし。はじめはたかゞ執權職を、望みにかけし大望も、待てば甘露の日和とやら、左馬ノ介世に無き上は、遠州夫婦が祗犢の、其の恩愛を取りも直さず、あの政範と血を分けし只一粒の愛女、萩の前の戀聟たる、此の朝雅が身に集めんと、我が三寸の舌頭次第。機をはづさず智畧を運らし、稻毛の法師を玉に使ひ、遠州夫婦の心を動かし、機密を氣取りし重保親子、まづ馬鹿者から押しかたづけ、其のほとぼりの冷ぬ間に、將軍もろとも義時めを、ムヽ。ハテ時節は俟つべきもの。

トにッたり思入、此の時下手の扉をひらき、稲毛重成入道ひそかに立ちいで

稲「右衛門ノ佐どの。

トあたりへこなし

朝「オヽ入道どの、待ちかね申した。これへ〳〵。

トこれにて入道、朝雅のそばにすまひ

稲「お悦びあれ、至極の上首尾。朝「ナニ、上首尾とな。すりや兼ねていひ觸らせし、彼の流言を信となし　稲「イヤ〳〵彼奴も流石は曲者、容易くは動くべうも無かッしゆゑ、僞書を作り、上使をまたて、遠州公の命といつはり、今般謀叛の輩あッて、鎌倉表へ寄するの由、其の姓名も歴然たれど、事極秘なれば、委細は參着の後、執權の御口傳たるべし、さて右につき、重忠に追討使仰付けらる、早速一族を驅り催し、十分に兵器を調へ、火急の發向嚴命なり、と眞實しやかに言はせしかば、市に三虎の喩に漏れず、鼻元思案の二郎重忠、信と心得、狼狽なし、已に昨日武藏の國を出發なせしと飛脚の注進。朝「ホヽ出來されたり、あつぱれ〳〵。此の上は片時も早く、天の入を以て言

はしめし、其の謀叛人は重忠なりと――踟躕は事の破るゝ基――手を分かッて老公夫婦に。有無を言はせず討手の準備、必ず共におぬかりあるな。稲「念にや及ぶ兼ねての手配り。執權の一言次第、討手の先鋒は倅重政、こよひを過ごさず重保めを、由比が濱邊へおびきいだし、まッた重忠めは、武藏の國二股川を渡らんころ　朝「ホヽウ、何から何までさすがは入道。それがしは遠州公に

ト兩人立ちあがる、トタンに奥の方にて女共「アレ、誰れぞ來て下さりませ。アレ、御ン方が御ン方さまが――アレ、誰れぞ來て下さりませいのう。

ト物言騷がしく、女中大勢の聲聞こえる。

稲「ヤヽ、あの聲は――まさしく奥の間。朝「ムヽ、さてこそは案にたがはず――奥の事は御懸念あるな、貴所はすぐさま遠州公へ　稲「心得申した。

ト平賀は上手へ、稲毛は下手へ、大急ぎにてはいる。

（其二）　嗔恚の狂亂

すべて鎌倉時代武家寢殿の造作、修飾等よろしく、こゝに時政の室牧の方、寢衣のまゝ、黑髮みだりがはしく、手に懷刀をぬきもちて、髮を斷たんと爭ふを、前の場の女房、甲、乙、丙、其の他、女童數人、取りすがり、もみあひ、立ち惑ひ、うろたへゐる。牧の方の枕元には、故左馬ノ介の狩衣、立烏帽子など取りちらしあること。

女甲「アレ、おあぶなう厶りまする。女乙「マ、、おはなしなされませい。女丙「アレ、誰ぞ早う來て下さりませ。皆々「誰れぞ來て下さりませいなア。

ト女どもよろしく棄せりふせにてとめてゐる。前の場の朝雅、下手より走り入りて、すぐ泣き狂ふ牧の方を抑へ、皆々に目ませにて退れ〳〵と命ずる。皆〳〵心得て下手へはいる。

朝「マ、、みこゝろをお鎭めあれ、コリャ何となされました。

ト難なく懷刀をもぎとる。牧の方我れに返り、朝雅の貌を見てむしやぶりつく。

牧「オ、、右衞門ノ佐どの〳〵。聞こえぬ〳〵、聞こえぬわいの。なせ、せめて死骸なりと、一目見せては下さらぬ、事切れてから知らするとは、言はうやうなき情知らず——イヽヤきかぬ、きゝませぬ——親の心の淺さ深さは、子をもたいでは知られぬか、見る悲しみは百倍でも、たッた一聲聞くならば、諦らめもつかうもの。怨めしい右衞門ノ佐どの、花のやうなる政範を、ようむごたらしう灰にして、送るとは何事ぞいのう。たとへ腐らうが、爛れうが、氷のやうに冷きッて、穢い蛆がわかうとまゝ、熱湯のやうな此の母の涙で溫め、頰と頰、たッた一目最期の肌膚に——あひたかッたをむごたらしう——たとへ冥土に行かうとも、親子の緣は一世を限り。情なや月日にも、天にも、地にも、かへがたない、あの政範が死にやらうとは——一日一夜を泣き明かしても、まだ信とは思はれぬ——コレ、右衞門ノ佐どの——政範は死にやッたかいの、死にましたかいのう。朝「其のお歎きはお道理とも、ことわりとも、申し慰めん言葉も無けれど——マ、、ちばらく御心を——さやうに悶へさせたまふと

きは、又もや例の御癪氣が　牧「ナニ、癪が募らうとや。募らせたい〳〵。いッそ此のまゝ取りつめて、一思ひに息絶えたら、此の苦しみは忘れうもの。とはいふものゝ親と子は、たんだ一世と聞くからは、何を頼みにあの世の旅。死んで甲斐なく存へても、けふより後は何樂しみ——憂世に未練は殘らねども、死ぬるも益ない此の身ゆゑ、せめて和子の菩提の爲——エゝ迷ふまい——さうぢや。

ト又だしぬけに懷刀に手をかけるを、朝雅すかさず取り抑へて

朝「又してもこは何事。さては餘ンの御なげきに、こりや御心が狂ひましたな。牧ナニ、心が狂うたとや。何の狂はう、狂はうぞいの——狂はねばこそ忘られぬ——此の世あの世の哀別離苦。此の狩衣も立烏帽子も、離れぬ夫婦親と子が、鼎の脚と榮えなん、末の榮華をあて祝ひに、染めいだしたる三ッ鱗模樣こそはちがへども、千幡ぐのゝ召料と、地柄も仕立もちがはぬ晴衣。和子が出世をけふあすと、偃指へまちし甲斐もなく——空となッたる形見の衣。なつかしい幻影の若しか宿ること もやと、柱に掛けて起ちつ居つ、泣きはらいたる双の目の、めくるめくまでながめて

も、心狂はぬ證據には、これは狩衣立烏帽子——たんだ一度び通せし袖に、移り香さへもムらぬわいのう。

トよろしく狩衣へこなしあッて泣く。朝雅思入あッて

朝「イカニ牧の御ン方、御ンなげきはさることながら、免れがたき定業と、觀念あッても其のお怨み——さほど御不便におぼしめす、御ン愛兒の政範ぬしが、まことは不思議の仔細あッて、非業の最後を遂げられたりと　牧「ヤゝ、何と　朝「サゝ、万一にも其のやうに、申し聞こゆる者あらば、如何ばかりの御ン愁傷、思ひやるまゐらすさへ、此の腸はちぎるゝばかり。牧「それこそは人の親の、心を知らぬ推量ぞや。苔の花の年齡を定業と思ふにこそ、せめても敵と目ざすべき、怨の的があるならば、此の悲しみの半分は、怨みにまぎれて忘れうもの、富の敵を求むれば、所詮は我が身我が心と、思ひ浮かぶる苦しさを、ナウ推量して下されいのう。朝「スリャ御ン方には和子が横死を、まだいさゝかもお察しなきよな。牧「エゝ、何とおいやる。

ト双方よろしく思入。

朝「一大事に候ふゆゑ、態と胸にをさめ今日まで、秘しかくして候へども、和子の最後は定業ならず――サヽ、御驚きは尤なれど――マヽ、一通りおきゝ下され。語るも無念至極なれど、往ぬる日腰越に宿りし最夜中、稲毛の女照子の前、兼ねて重保と私通の取沙汰、如何にしてか手に入れけん、一大事の密書を携へ、雷雨を犯して旅館にかけつけ、仔細あッて落命の、其の塲に手に入る一通を、恩義知らずの六郎重保、すぐさま證據に取ッてかへし、尼御臺に訴へんと、例の忠義を賣物三味　牧「おのれ、又しても〳〵　朝「かくと聞くよりけなげにも、さへぎりとゞむる和子政範、此の事露顯となる時は、母上さまの御身の上　牧「オヽ　朝「何卒此の身を人質とし、せめて首尾よく下向なすまで　牧「オヽ　朝「内濟頼む穩便にと、土に手をつき、涙を流し　牧「スリヤ六郎めに手をついて　朝「乞ひ願はるれど傍若無人、情用捨も知らざる六郎、共にとゞむるそれがしを、逆臣なりと雜言なし、はや理不盡に大音あげ、多勢を呼ばんと致せしゆゑ、無慚や、和子の分別無く、癪しもッたる毒藥を、とゞむる間も無く、頓服なし　牧「エヽ、情ないとしてたもッた――エヽ、何とせう、如何せうぞいのう。朝「

母に代る此の身の最期、内濟頼む六郎殿と、毒の効に惱亂の、口より溢るゝ血は瀧津瀨。牧「オヽ〳〵〳〵　朝「鬼神も感ずる無類の孝心　牧「オヽ〳〵　朝「かりにも人情あらん者は、鐵石の心も溶解る筈を、苦しむ和子を突きのけて、馳け出んとする六郎重保。牧「おのれ〳〵、人非人――朝雅ぞの、なせ、其の時六郎めを、八裂にはしやらぬぞ。朝「サヽヽ、六郎一人討ッて棄つるは、容易き程の事なれども、一大事を氣取りしからは、毛を吹き疵を求むる恐れ、ぞッた其の折入道より、送り越したる密書により、忠義面する重忠親子に、不思議の陰謀これある由　牧「イヤ〳〵きかぬ、いひわけきかぬ。たとへ和子が命の綱、取りとめること叶はずとも、其の塲で敵はなせ討たいで、ぞの面さげて、ようのめ〳〵――卑怯な〳〵、見さげ果てた。卑怯者、薄情者――薄情でムるわいのう。朝「サヽヽ、お怒りはお道理ながら、只今も申す如く、これには深き仔細あること――六郎をなだめすかし、其の塲を穩便につくろひおきしは　牧「エヽ、きかぬ〳〵――頼みに思ひし現在の、實の女が聟でさへ――尼義時が不孝は其の筈。おのれやれ、此の上は――一念力には鬼女ともなる、生きながら夜叉とな

ッて、誰れ彼れのようしやがあらうか。

ト髪ふりみだし、すさまじき形相、よろしくこなし。

朝「サヽ、一大事を御存じなきゆゑ、そのやうに思し召すも――コリヤどこへ、まヽ去ばらく

ト牧の方立ちあがり奥へゆかんとする、朝雅とめる。

牧「エヽ、邪魔なのきませう。朝「マヽヽ　牧「のきませ。平「マヽ、去ばらく――ハラマア仔細を、おきヽなされ。

ト朝雅の牧の方をおしすゑる。

時「オヽ、其の仔細、きいた〳〵。

ト奥より時政、あわたゞしくいづる。

朝「ヤヽ、老公にはいつの間に　時「仔細は最前稲毛の法師に。ヤア、誰れかある〳〵。

ト下手にて應答する。時政、牧の方のそばにすまひ、よろしくいたはること。

時「奥、無念であろ〳〵。尤ぢや〳〵、尤ぢやはやい。牧「そんなら和子が横死の仔細

は　時「オヽ、聞いた。尤ぢや〳〵、尤ぢやはやい。牧「コレ時政どの敵を取ッて下されいのう。時「オヽ、尤ぢや〳〵。ヤア誰れかある、はや參れ。

ト侍士一人あわたゞしく入り來たる。

時「委細は法師にいひつけおいた。相州を呼べ、相州を――法師もろとも――疾く急いで、まゐれと申せ。侍「ハヽ。

ト侍士急いではいる。

牧「八裂にしてもあきたらぬ六郎め。時「オヽ、尤ぢや〳〵。牧「怨めしいは右衞門ノ佐――現在和子の敵と知ッて　時「マヽ、おちついた〳〵。腹の立つは尤なれど、其のやうに氣をあせらば　牧「オヽ、苦しや、胸が裂ける――五臟六腑が惱亂して――此の黑髪の毛先から――オヽ、苦しや、一節づゝ、血が出るやうに思はるゝわいのう。時「サヽヽヽ、道理ぢや――さうあらう〳〵。サヽ、尤ぢや〳〵――尤なれど――右衞門ノ佐には越度はない其仔細は稲毛の法師が――ヤア義時はまだ來ぬか――義時、々〳〵々。こりや、事ぢや。朝雅〳〵々、介抱賴む〳〵。

ト牧の方癪に苦しむ。時政うろたへる。朝雅よろしく介抱する。此のうち下手扉をあけ、相摸守義時、其のあとより稲毛入道、入り來たる。時政目早く見て

時「オヽ義時待ちかねた。仔細はきいたか――憎きは重忠親子、疾く討手の準備いたせ。義「ハヽ、さて〳〵存じがけぬ不思議の御嫌疑、畠山重忠親子が、故禪室の奉爲に、謀叛を企て候はんとは、我れ人ともに夢いさゝか、曾て存じ寄らざる所。夫れ重忠とは、治承四年始めて故幕下に仕へしより、忠義專らに、聊か私無し。去々年二品御謀叛の其の砌も、彼れ彼方に候ずる身ながら味方に參ッて忠を盡せり、是れ天下の大義を存じ、まッた二つには聟舅の因を重んじ候ふゆゑ也。然るに今更何の爲に、謀叛企て候はんや。正直の鏡といはるゝ重忠親子、よも亂心は致すまじ、參着の後糺明あッて、罪明白ならば、其の時御誅戮あるも遲かるまじ、眞僞を分かたず、御討手を向けられんこと、近ごろ御粗忽かとぞんじまする。稻「こは相州のお言葉ながら、いさゝか聞棄に致しがたし。眞僞不明と仰せらるれど、たしかな證據は此の入

道、親族と心をゆるし、ひそかに送りし彼の一通に、逆意正に歴然たるゆゑ、忠義には親を滅す御訴訟。義「それぞ不審の隨一條。故禪室の御謀叛を、密告ありしも和殿なれば、日ごろ重忠と中惡しゝと、噂高きも和殿にあらずや。稻「ヤ。義「サヽ、其の中惡しき和殿の許へ、故禪室のおん爲には、仇にひとしき和殿の許へ、亂心あさばいざ知らず、かゝる密書を送りしこと、何共以て心得がたし。稻「スリヤ、相州には、拙者が訴訟を、讒言なりと疑ひめさるか。義「イヤさやうではムらねども　牧「ヤア、其の問答無益でムるぞ。重忠謀叛の企ありとは、今はじめて聞いたれども、思ひあたる日ごろの振舞、必定逆心に疑ひ無し――よし疑ひがあらうとまゝ、和子の爲には不俱戴天――義時はまだ知りやるまいが、政範が最期は横死ぢやといの。人で無しの六郎めが、みづからに寃を被せ、其れゆゑ和子が無慚の最期――そなたの爲にも弟の敵猶豫する所ゝない、畠山が一門一族、八裂にしてもあきたらぬ――コレ、義時、時政の嚴命ぢや躊躇するは不孝でムるぞ。義「お言葉返すは恐れあれど――まッた政範が最後の始終は、今はじめて承り、驚き入ッては候へども――さりとてそれは

一家の私事。牧「スリヤ私事ゆゑ、和子が横死は、敵を取るにも及ばぬとや。義「イヤさやうではムりませぬ。牧「イヤさうぢや〳〵――さうである。後妻の生んだ子は、古沓も同然ゆゑ、表だッて敵を取る法無いゆゑ、謀叛人と讒言して、敵を取らうと思ふのぢやと――イエ〳〵、さう思うてゐやるゆゑ、繼しき中ゆゑみづからをば、讒者におとして世の人に、疎ませう了簡ぢや。イヽヤ、聞かぬ〳〵、きかぬ〳〵。さはまでに疎ましくば、今直に此の母の命をたッて謀叛人の重忠親子を庇ひをれ、イヽエイナア、いつでも殺されませうわいのう。

ト始終義時に身をつきかけ、よろしくこなしあッて泣く。皆々よろしく思入。

平賀朝雅思入あッて義時に向ひ

朝「イカニ義時ぬし、貴殿の御諫言もさることなれど、重忠逆意の一條は、他にも確實なる證據あッて、もはや疑念を殘しがたし、まッた遮ッて御諫爭あらば、御愛兒に別れさせられ、御哀傷の其の折柄、如何なる大變出來せんか、これもまた闘るべからず。孝道のおん爲に、曲げて奉命これあるやう

トいひかける、このうち牧の方聲たてゝ泣く、時政こらへかねし思入。

時「ヤア異論あらば勝手にいたせ。執權遠江守時政が申しつける、入道直さま手勢を引具し、六郎めを討ちとり參れ。重忠追討の御敎書は、我れこれより參入なし、千葉三浦を討手の先鋒――それ。

トたゝんとする、義時是非なき思入。

義「マヽ、ゑばらく――ハテ是非に及び申さぬ。父上の嚴命、母上の御腹立、御嫌疑かゝりし重忠一門何とて父母に見替申さん。時「スリヤ御敎書を申し乞うて　稙「今よりすぐさま　朝「出陣あるか。義「いかにも命に從ひませう。時「オヽ、滿足。ゑばらば義時は我れもろとも――入道には討手の準備。義、稙「ハヽッ。時「右衞門ノ佐は奥の介抱。朝「ハヽ。

ト義時、稻毛おの〳〵思入あッて、會釋し、同時に座を起ちて下手へはいる。時政は奥へはいる。其のあと泣き伏しゐたる牧の方、むッくと起き向ふを見込み、よろしく思入。

牧「チエヽ、心地よや、嬉しやなア。日ごろより憎しと思ひし重忠親子、我が子の敵六郎めを――オヽ忘れたり、むざ〳〵と、一思ひに殺しては――あきたらぬ腹が癒ぬ――八裂にせにやならぬ我が子の仇――コレ生捕ッて具して來いと、入道のあとおッかけ、疾く吩咐けて下さりませ。朝「こは何事ぞ、御怒りに、前後をお忘れあそばしましたか。重保は彼の大事を、知ッたるからは有無をいはせず、討ッて取るが上分別――モシ、御用心はそれのみならず――御免。

ト牧のかたの耳に口寄せ、さヽやくこなし。牧のかた驚き怒り、貌色次第にかはる。

牧「スリヤ、政範が飲んだる毒は　朝「かねて因果をいひふくめし、其の源は尼御臺か相州たること疑ひなし。牧「チエヽ、せんすべもあらうものを、スリヤむごたらしう分別なき、あの政範をだましすかし、諫むる法にも事をかき、たッた一人の愛兒をば――ナニ根を絶たば幹枯りよとや――何の枯れう、朽ち果うぞ。おのれやれ、此の上は、其の計畧の裏を掻き、怨かさなる尼義時――子を殺さるゝ苦しみを、おのれ、今

に

トよろ〳〵とたちあがり、足元にころがる立烏帽子に目をつけ

牧「この烏帽子は左馬ノ介が將軍となる其の時を、心で祝うて千幡若と、同じ仕立に製らせし、大臣のかぶりもの、今更見るも、怨めしい。我が子の影は浮かばねども、此の烏帽子を見るにつけ、玄たり貌なる尼が面、千幡若の玄やッ面が

ト烏帽子を掻摑みて悔やしき思入。

牧「おのれ、此の怨み

ト烏帽子をメリ〳〵とひきさく。

朝「アヽモシ。牧「晴らさでおかうか。

ト烏帽子をなげいだし、よろしく泣きおとす。

第五段

（其一）杜かげの伏兵

由比が濱邊に近き杜かげの晩景。こゝへ下手より稻毛の次郎重政、烏帽子腹卷にて、物の具せる郎黨、大勢從へて出で來たり、よき所にとまり

政「イカニ者共承れ。今般畠山重忠竊に逆意を企つるの由、訴人あッて露顯に及び已に御ン討手をさし向けらる。然る處、同苗重保、當鎌倉に在るこそ幸ひ、まづ彼奴より討ッて取れと、執權職の嚴命蒙り、最前已に奇計を運らし、釣りいだし置いたれば程なく此の處へ參るは必定。さきだッて埋伏なし、不意に起こッておッとりまきあ有無を言はせず討ッて取らん。一同此のむね、心得候へ。皆々「かしこまッてムりまする。政「ムゝ、はるかに聞こゆる蹄の音――ソレ、汝のべ〳〵。皆々「心得ました。

と重政さきに、一同上手へはいる。初夜の鐘。向ふより畠山六郎重保、烏帽子腹卷、騎馬にて長刀を携へ、郎黨數人つきそうていで來たる。此方へ來ると、寢烏驅立つことあり。重保が馬驚きはねあがる、トゞよろしく乘りしづめる。

保「ハテけぶな――こよひに限ッて栗毛めが、汝ば〳〵物に驚きをるわえ。さるにても心得がたきは、逆臣寄すると道路の風說、信ぜからず存せしに、已に御ン討手を差

向けらる、加之又候ふ、一手の賊軍寄せたるゆゑ、疾く斥候せよと嚴命受け、取るものもり取りあへず立ちいでしが――雲漏れいづる片われ月、行く手は隈無き由比が濱、敵あるべしとも思はれず――合點ゆかざることゝもぢやなア。

ト不審の思入。このトタン左右にどッと鬨の聲して、以前の稻毛主從めいめい得物をひらめかし、無二無三に競ひかゝる。問答のひまなく、重保主從よろしく防ぎ、トゞ稻毛勢叶はず、左右へひく。

保「ヤア、何奴なれば理不盡に名宣りもかけず、無法の振舞。

ト稻毛の重政木薩よりたちいで

政「何奴とは無禮至極。逆臣畠山重忠父子を、誅戮せよとの嚴命によッて、汝をこゝに俟つこと久し。姓名は名宣るに及ばず、鎌倉殿の嚴命也、速に伏罪せよ。保「ヤア舌長し、汝等こそ嚴命あッたる逆臣ならん。姓名名宣ッて伏罪せよ。政「問答無益――ソレ、討ッて取れ。保「何を。

トこれにて又亂戰となり、重保馬上長刀を揮ひ、多勢を追うて上手へはいる。

あとに重保が郎黨殘る稻毛勢を敵手によろしくたちまはり、トゞ下手へおうてはいる。

（其二）　由比が濱の血の雨

上手に、畫心に岡の裾を見せ、磯馴れ松などよろしく、下手奥のかたへ深く、沖を見せたる濱邊の夜景。片われ月やう〳〵空高く昇りたる躰。こゝに重保が家來瀨平、旅裝にて、多勢の敵兵に圍まれ、數ヶ所に手疵を負ひ、苦戰してゐる。

瀨「大殿さまの御大事を、片時も早く六郎さまにお知らせ申さん其の爲に、かけつけたる甲斐も無く、此の場にむざ〳〵討死なすか。チエゝ殘念やなア。歎こまごとぬかさず　皆々「くたばッてえまへ。瀨何を。

ト又たちまはり、トゞ瀨平危くなる。上手よりばた〳〵にて前の場の重保、大わらは、徒歩血刀を提げ、處々に矢を折りかけ、手疵多く負ひたる躰にてかけつけ

保「思ひがけなき汝は瀨平。瀨「ヤゝ、若殿でムりまするか。

ト此のうち重保敵中にわッて入り、瀨平を救ひ、はげしく働き、トゞ殘らず去とめる。其のうち瀨平疲れはてゝ倒れる。重保たちより宜しく介抱すること

保「ヤイ瀨平、汝は往日密事を吩附け、本國菅谷へ遣し置きしに、思ふにたがひし此の對面如何なる珍事の起ッたりしぞ。コリヤヤイ瀨平、重保なるぞ。手は淺い心をたしかに　瀨「オゝ、若殿さま、六郎さま――無念至極でムりまするわい。保「オゝ、何よりも心懸りは、父上の御身の上――本國の樣子は何と。

ト これにて瀨平痛手を忍び起直る。

瀨「いぬる日御内意承り、平賀どのゝ一條を、片時も早く大殿さまへ、言上なさんとお國表へ、夜を日に急ぐ其の途々、逆臣寄するの雜說は、疑ひもなく平賀の徒黨と、一圖に下司のえせ推量、かやう〳〵云々と、尾鰭を添へたる言上の、折も折とて俄の御上使、鎌倉表に逆臣あり、追討の爲今即刻、一族こぞッて驅り催し、兵器を整へ發向せよと、北條さまより嚴しき内命。保「ナニ、執權より密使を以て――シテ〳〵、父上には

進發ありしか。瀨「さん候ふ、遠州さまの御親筆、疑ふべくも候はねば、すぐさま一同御用意あッて、今朝已に武藏國、二股川まで御着ありしが　保「ムヽ。瀨「流石は大殿御賢慮深く、此たびの御内命は、何共以て心得がたし、其の方急ぎ鎌倉なる、重保が許へ馳參り、委細の樣子を、心得ました、と韋駄天走り、途中に行きあふ討手の大軍――合點ゆかずと手だてを運らし、仔細を聞くより、びッくり仰天――大殿さまには謀叛の御嫌疑――こはいかに、伴の討手が、指して行くゑは二股川。　保「ヤヽヽヽ。瀨「此の事さッそくあなたさまに、お知らせ申して御分別と、思ふにたがひし此の塲の有樣。あなた樣にも數ケ所のお手疵。瀨「さては讒者の舌刀にて、我ればかりかは父上まで――チエヽ、くちをしや、無念やなア。

ト向ふを睨み、よろしく思入。此のトタン又俄に鬨の聲して、ドンチャンはげしく打込む。

瀨「この上は、やつがれ此處に踏みとゞまり、敵を防ぎ候ふべし。若殿には、いざ疾く此の塲を　保「おろかや、瀨平。命を惜むも君父の爲、君には已に棄てられまつり、父

上にも重圍のうち――數ケ所の深手を負うたるからは、生きて逢はん望なし――いで、もろともに、此の塲に於て、花々しく討死なさん。

ト此のうち下手より稻毛の重成入道、物の具に身を堅め、長刀を携へ、あまたの軍勢を去たがへ、出で來たり

稻「死にぞこなひの六郎重保、速かにすかうべ渡せ。緣者のよしみ、此の入道が、最期の引導渡しくれん。　保「ヤア、よいところへ奸邪の小人。汝を殺すは最期の忠勤、共に冥土へ行く父に、語る此の世の土産となさん。　稻「何をこしやくな。者共、ソレ。

ト又亂戰となり、主從手痛く働く。重保は入道を討ち取らんと荒れ廻り、入道危なる。此の時上手に鬨の聲して、前の塲の次郎重政、再び手勢をひきゐていで來たり、父に應援して主從にかゝる。これにて兩勢上下に入りかはり、重成入道の一群は、瀨平を追うて上手へはいる。あと重保一人となり、大勢を敵手にはげしく立ちまはり、トゞ下手へ逐ひ崩す。重政一人殘り、一騎打となり、トゞ重政危くなる。此の時上手より重成入道かけ來たり、此の躰を見て驚き、長

刀をひきそばめ、ひそかに重保の背へまはり、油斷を見て重保の脚を薙ぐ。重保ぞうとおる。

保「武士に似わはぬ卑怯者めが。

ト重政すぐに斬殺さんとするを、入道とめて

稻「ヤレ待て、重政、急くに及ばず。日ごろより、馬鹿正直の父を見眞似に、小賢しき堅子めが賢人面、長幼の禮を存せず、よう幾度も此の入道に、赤い顏をさせをッたな。中にも諸人の面前にて、飾を落し入道せしは、妻の菩提を吊ふ爲、佛の道に入るとは僞り、實は北條殿の〻息女たッし、妻を病に失ひたれば、婿舅の緣切れんかと懸念なし、執權の最員をつながんため、えせ入道の阿諛追從、僧衣の袖の墨染より、腹の底こそ黑けれと、うぬ、よういうたな、さみしをッたな。胸に徹して忘られぬ、其の返禮に最期の引導――ヤイ、よく聞けよ、うぬ等親子は此の入道が、舌三寸のいひまはしでまんまと首尾よく謀叛の惡名――何と骨身に徹へたか。

ト よろしく思入あッていふ。

保「ヤ〻、すりや父上の御最後も――さては汝が讒言なりしか。稻「知れたことだワ。

保「チエ〻、いはうやうなき、人非人めが。

ト よろしく無念のこなし。

稻「やかましいわえ。引導濟んだ上からは――ソレ、重政。

ト よろしくこなし。重政心得て斬らんとする、重保痛手ながら奮戰する。入道こらへかね、長刀を揮つて只一薙に、あはや薙倒さんとする其のトタン、向ふにて、エイと箭聲して、箭一つ飛び來たり、入道の肩頭を射貫く。入道尻居にどうとなる。又一箭とび來たるを、重政さそくに切ッておとし、驚きながら向ふを見込み

政「鎌倉殿の嚴命受け、討手に向ひし我々親子に、名宣りもかけず無禮の手向ひ。何奴なるぞ。

ト 此の時向ふにて

義「ヤア、何奴とはたけ〻し。賊臣稻毛重成親子、鎌倉殿の嚴命受け、相摸守北條義

時、只今討手に向うたり。尋常に誅に伏せ。

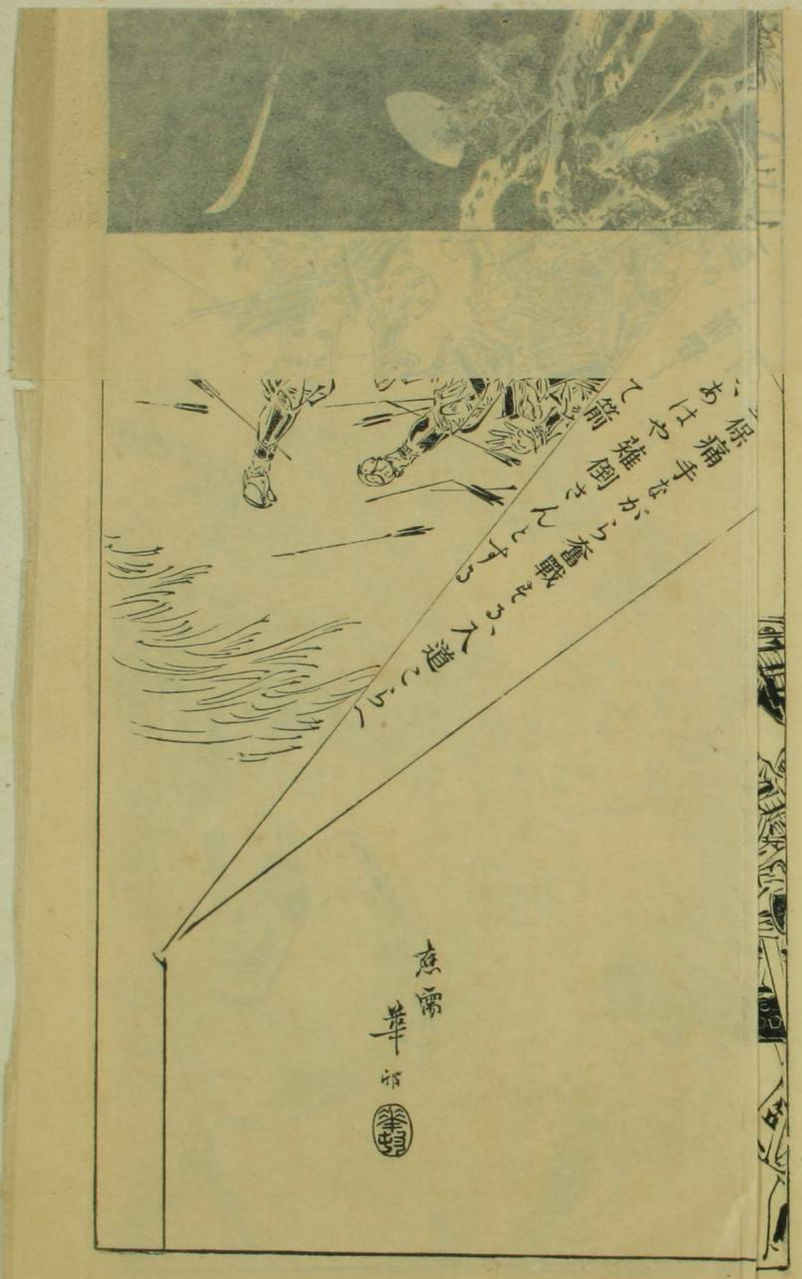
ト此のうち重保またぞうとなる。重成入道辛うじて箭をぬき、長刀を杖に起きあがり

稲「何な　稲、政「なんと。

ト向ふより北條義時、烏帽子腹卷、左手に弓を持ち、馬上、馬側に義時の腹心、深見三郎二郎致興、軍兵大勢ついて來たり、よき處にとまり

義「忠臣畠山重忠父子を、讒言を以て陷れし、罪跡已に顯然たり、陳ずとも及ぶべからず。深「なッた、二股川の戰場へも、結城七郎朝光ぞの、只今汗馬を走らせたまふ。義「只憾むらくは時刻おくれ、恐らく寃死を拯ふに由無し。國家の蠹賊　深「義士の怨敵　義「せめても潔く誅に伏せよ。稲「こは、存じよらぬ無實の御嫌疑。政「讒言なぞとは、我々親子　稲「かつふつ以て　稲、政「何を證據に　義「ヤア、卑怯なり、稲毛親子。證據は汝等が心にあらん。此の上は問答無益。ソレ、致興。深「ハッ。

ト從兵へこなし、稲毛親子うろたへて逃げんとする、義時が從兵一齊に競ひか



記録は汝等が心にあらん。此の上は問答無益。ソレ、致興。深「ハッ。

従兵へこなし、稲毛親子うろたへて逃げんとする、義時が従兵一齊に競ひか

丶る。親子一寸たちまはッてすぐ逃げいだすを、皆々追うて上手へはいる。

あと義時殘り、思入、馬より下り、重保のそばに立ち寄り、死骸を引起すことあり。

義「ムヽ、さては全くこときれしか。良材ともなるべかッし、樸の儘の此の若者――惜むべし〳〵。まことや、竪子事を誤る――彼の人世に在さん間は――聊かも心をゆるしがたし。如何なれば小人の、蛾の燭火に赴く如く、只眼前の利祿に急ぎ、却つて自滅を求むるおろかさ

此の時奥にてエイ〳〵オーと勝鬨の聲きこえる。義時うなづき

義「とはいひながら一擧兩得――朽木の稻毛親子、直に過ぎたる二郎重忠――まことに造化の妙配劑

トにッたり思入。此のトタン重保の死骸バタリと倒れる、義時ギックリ、すぐに氣をかへ

義「ウフハヽヽヽヽ。

ト冷に笑ふ。

第六段

（其一）浴室の逆謀

浴槽口を正面に見せたる浴室、上手下手、ともに扉あり。上手の板の間には衣桁、其の他、浴室の飾り付よろしく、こゝに牧の方が腹心の女ばら、魚米、升、魚は板の間を拭ひ、米は衣桁の位置を直し、升は今湯加減を見果てたるさまにて、高くまくりあげし袖を、褌と共にゆるめながら

升「ヤレ〳〵くたびれた。ナウ皆さんも休ましやりませ。かうしておけばいつ何時、將軍さまがお渡りあッても、まづ、大事ないといふもの。魚「さればいな、これでこちは大事なけれど、ナントマア陰陽師とやらも、頼まれぬものではないか。身の上知らずと世話にもいへど、恰ど今月十六夜は、天一神さまに向うたから、御ン方達と將軍家に、お勸め申した其お成りが　米「取りも直さず冥土へ出發。御ン方さまが兼ての御差配、わたしら三人御内意うけ、此のお浴室でたッた一突。升「よう智恵のまはる尼公さまも、政範さまの御菩提を、とむらふ爲の發心と　魚「殊勝らしう珠數つまぐり　米「人前ばかりの御經讀誦　升「其のまッかいな御ン方さまの、深いたくみに、まんまとはまり　魚「塲處もあらうにうッかりと、此のお邸へお方違へ。米「折から恰ど義時公も、急の御用で俄に御他行。升「君傍さらずの鵜の目鷹の目、こちとの手には阿波の局も、けふは持病のいたつきにて、つい御ン侶に洩れたとやら。米「一から十までトン〳〵拍子。魚「御願成就はこちとの立身。升「ほんに浴室は源氏に祟る　米「禪室さまも伊豆の修善寺　魚「義朝さまも尾張の内海　升「ほんに手はれぬ　三人「ものぢやなア。

ト此の時、下手の扉をあけ、牧ノ左源太輝英、今旅先より歸ッたといふ服裝にて浴室をのぞき

左「御ン方はこゝに御座あらぬか。魚「オヽどなたかと存じましたら　米「御ン方さまの御内意うけ　升「御旅行ありし　三人「左源太さま。左「コレ。他處にては人目の憚り、輝英只今立歸ッたと、ひそかに御ン方へ傳へておくりやれ。三人「かしこまりまし

てムりまする。魚「ドレそんならば、わたくしが
ト魚たたんとする。上手の扉のうちにて
牧「まゐるには及びませぬ。今そこへゆきますわいの。
ト扉をあけ、牧の方、下髪質撲なる服装、すべて有髪の尼といふこしらへ。手に
珠數をたづさへ、五六歳の女童に秋艸を折り入れたる水桶を携へさせ、玄づ玄
づと入り來たり
牧「オヽ輝英。思うたより早い歸着、御太儀でムりましたの。左「ハヽ。お悦びあら
せられい、まづ以て万端上首尾。牧「ホヽ以來しました〳〵。シテまた花洛の平賀
朝雅どのへ、機密を傳ふる早飛脚も　左「ハヽ、其の儀も昨夜亥の刻ごろ
牧「アヽコレ。誰れやら足音。
ト上手へこなし。程なく上手の扉をあけ、下髪盛服の侍女一人、いそがはしく
いで來たり
侍「ハヽ、御ン方さまへ申しあげまする。只今御ン先觸として、相州さまの夫人呉羽の前

さま、はや御ン入りにムりまする。まッた程無く將軍家にも、結城ノ七郎さま、伊豫のお
局、笹尾のお局をはじめ、御ン方々御ン侶にて御入御げにムりまする。牧「オヽ、心得た。
ト魚米丼に向ひ
牧「さあらば、うちたちも衣服をあらため、御ンでむかへの準備万端。　三人「かしこまり
ましてムりまする。
ト牧の方女童に向ひ
牧「そもじも共に。オヽ、その花はいつもの持佛へ。侍「かしこまりました。
トこれにて魚米丼、女童、侍女皆々牧の方に會釈して上手へはいる。あと牧の
方、左源太のこる。牧の方思入あッて
牧「ムヽ、首尾は上々。今一時が成否のわかれ目。女どもにいひつけし、其の手配も
とヽのうたれば、万に一つも仕損ずまい。よしまた浴室で玄そんずとも　左「御ン渡
殿の左右には　牧「兼ねて伏せおく、あまたの力士。左「有無を言はせずひッぷせて
牧「玄るしをあぐるが——合圖の狼煙。　左「いざ御ン大事と見るや否、まづ第一に參

着すべきは、無念に亡びし稲毛が殘黨　左「其の外譜代恩顧の面々、機密を知れるも知らざるも、狼煙を見たらば馳せ參れ時政公の内名と、一々御内意含ませたれば、

牧「在鎌倉はいふに及ばず　左「十里以内の御味方は　牧「狼煙の煙の消えぬ間に

左「馳せ集らんは案のうち。牧「俄に他行し義時の、こゝにあらぬは究竟一。目指す敵は東御所と、年老いたまへゞ遠州ゞの　左「其の御出馬のまッさきがけは、此の輝英が出世の發程。　牧「無二無三にひんがし御所。左「手むかふ奴輩、斬りたて、燒きたて

牧「尼前はすぐにおしこめ同前　左「つゝいて目指すは和田の一黨。　牧「大江ノ廣元は不覺人——外には手にたつ者もなし。左「御事成らんはまたゝくうち　牧「アゝラ心地よやなア。

ト兩人よろしく思入。

牧「オゝそれよ、念にも念を入れよのことわざ——おことは股肱の力士等に、尙あらためて機密をふくませ　左「去からばこれより

ト左源太急ぎ起ちあがり、かけいでんとする。

牧「待ちや〳〵。左「ハヽ。牧「必ずせくまい、去そんずまいぞや。左「心得ました。牧「ゆきや〳〵。左「ハヽッ。

ト左源太下手へはいる。牧の方ひとり殘り、よろしく思入、トゞにッたりと打笑むトタン、上手の扉をあわたゞしくあけ、北條時政、立烏帽子水干、安からぬ顏持にて進み入り

時「オゝ、おことの居ぞこを、こゝかしこ尋ねてをッた。ナウ、さしかゝッて談合すべき、一大事が出來いたした。牧「エヽ。一大事とは心がゝり。穩かならぬ御ン面持——シテ〳〵、仔細は　時「マヽ下に。あたりに他聞の虞はなきや——マヽ下におはせ。

ト時政あたりへこなしあッて上手に、牧の方は下手に、そばちかくすまふ。

牧「もしや大事が露顯なせしか——シテ「何者が　時「アイヤ〳〵、さにあらず〳〵。其の儀はかつふつ氣づかひなけれゞ　牧「スリヤ一大事とおほせあるは　時「サ、其の一大事の仔細といふは——コリヤ、奥よ、氣を去づめて、よう一通りきいてたもれ

よ。御方達の御事、昨朝はじめて仰せいだされ、おことに其の事語りしまでは――もとより尼御前の振舞は、御身が日ごろの異見により、不快らずは存じをりしがーさりとて、未だ予に於ては何等の別心もなかッしところ――已に左源太輝英もて箇様〳〵の手配なし、まッた云々の仔細によッて、幼弱なる當將軍が、虚位を擁して在さんには、所詮諸人の怨を招き、當家も共つぶれ、天下大亂の兆、其のことわりかやう〳〵と、理を盡したるおことが辨論――まッた世になき政範が横死の仔細をはじめて知り　牧「コレ〳〵〳〵――一大事とおぼせあるゆゑ、如何なる大事かと思うたれば　時「マヽ、聞いてたも、聞いてたもれ――其故予れも、心動き、そなたの意見に合體なし、ふと一大事は思ひたちしが　牧「ナニ、ふと一大事と　時「マヽ、其の出來ごゝろも、つい今がた　牧「ナニ、出來心　時「何心もなう入御なッたる、實朝公の其の面影――見れば見る程いたいけらしい――血すぢの緣の孫とはいへ、心の迷ひか、政範めに　牧「フム、すりや將軍家の面ばせが、アノ政範に似たるゆゑ、それで心が變りましたか、イヽエイナ、千幡若と政範とが、よう似た〳〵とは十年以來耳胼胝の

出來るほど、イヤサ、穿入るほどきゝふるいた。それに何の不思議がある。酷う肖たればとて藥は藥、毒は毒、誰が斑猫を玉蟲に、代へて鏡の匣に收れ、猫によう似た虎の兒を、生長うなるまでそだつるぞや。肖たのが何の珍らしい。それを今さら新らしさうに――アヽ、きこえた――スリヤあれほどにわッつくどいつ、昨夜よもすがらいうたることを　時「サヽ　牧「やッぱり成さぬ繼母根性、讒誣、ひがみと思うてかいの、イヽエイナ、二世とちぎりし夫にすら――二十餘年が其の間、心知られし夫にすら　時「マヽヽ　牧「イエ〳〵、さうぢやざうでムる。成さぬ中の尼御臺や、義時夫婦が目の敵に、わらはの過失をあなぐり求め、額に波うつ今となつて、和子政範が逝りしを、よい潮時と此の母を、西の海へも掻い流さん、不孝非道の振舞も――先妻の子となれば――それほどまでにも可愛いか。賴朝どのゝ後見して、日本國六十餘州に、武名威名を轟かせし、遠江守時政どのも、老いては小荷駄に息はづむ、牡馬にも劣るかいの。一旦かうと誓うたことを、何ぢや出來こゝろぢや、偶然思うた　時「そヽそれ　時「エヽ、それもこれも畢竟は――子故の暗の袖の雨に、色香あせゆく姥

櫻、妾に愛相が盡きたゆゑ、とく散れがしの　時「かゝゝ、かつふつさういふ譯ではなけれど、まだ其の他にも　牧「エゝ、きかぬ〳〵。　時「仔細といふは　牧「きかぬ〳〵。　時「こよひの手筈は浴室に於て、左右なく討取らんず結構なりしが、最前局等の問はず語り、いぬる日の御神灸、如何にせしか、其の跡いさゝか咎をなし、腫物の如く膿もッたり、さるによッて兩三日は、入湯遠慮せらるゝ由、きいたる時は疵もつ脛、さてはと胸を躍らせしが、呉羽の前の話といひ、童小姓の言葉といひ、疑ひ危む仔細も無けれど、まづ此の一事に膽を落し、手筈は書餅と思ふと共、只今語りし一伍一什、未錬といへば未錬なれど、如何に天下の爲なりとて、血で血を洗ふくわだては　牧「ハテ、大の蟲をたすけうには、小の蟲の二百三百――よい手本は頼朝ぞの、血で血を洗うて研ぎあげし、鎌倉山の星月夜、其の血の雨の洗濯を、現在幾度も手つだうた、覺えある身が今となッて――エゝ、もうきかぬ、きゝませぬ。　問答無益、怨むも恐痴――さうぢや。

ト牧の方懐より手早く懐刀をぬきいだし、あはや自害せうとする、時政あわて

時「こりや何と――まア〳〵まッた。　牧「はなして〳〵――はなして下され。　頼むは夫は心がはり、思ひ子には先だゝれ、なに憎まれに生きながらへう――そこ離して下さりませ。　時「堪忍しやれ〳〵。　誤まッたり〳〵。　此の上は初志の如く、今より更に手だてをめぐらし、有無をいはせず討ッてとらん。　牧「エゝ、その氣休め聞きたうない。やッぱりわらはい　時「ヤア、きゝ分けなし、大事の瀬戸際、時おくれなば事の破れ。　牧「スリヤ、其の言葉に相違ないか。　時「念にや及ぶ、論より證據。

トついと起ちて浴室の一隅に裝置したる呼鈴を引き鳴らす、トすぐにばた〳〵にて、牧ノ左源太下手より出で來たる。

左「お召しわりしは　時「オゝ、近から〳〵。　左「ハッ

ト左源太進み寄る。

時「手筈いさゝか間ちがうたり、此の上は是非に及ばず、汝はすぐさま力士をひきつれ、奥の一間へ亂入なし、有無を言はせず去るしをあげよ。

牧「アゝモシ。

ト牧のかた制めて左源太にさゝやく。

左「スリヤアノやッぱり、其の折までは　牧「あらだてゝは何かと爲損じ。

ト時政の耳に口。

時「フム、すりやアノ池の中島に　左「力士を伏せ置き將軍家を　牧「幸ひこよひは十六夜の月見にことよせ　時「左「釣殿にて　牧「ア、コレ。

ト三人よろしくこなし。牧の方又二人にさゝやくこと。

（其二）　築山邊の小逍遙

上手、繁りたる植込、築山、下手及び向ふへだら〳〵下り、かなたに池の中島の水亭、及び橋殿の遠見。下手、うしろへだら〳〵下り、池水に臨めるこゝろ、こゝに枝ぶり面白き磯馴れ松。すべて北條邸内の泉水築山、月は今やうやう昇りたれど、薄雲かゝりて朧なる躰。こゝへ下手奥より、北條義時の腹心深見三郎次郎致興、黑衣、覆面の去のび姿、小舟に棹さし、松かげに着き、舟より島に上り、徐かに四下を見まはし、思入ありて上手植込かげへはいる。トすぐに下手陸つゝきより、前の塲の牧ノ左源太、甲斐々々しくいでだち、力士、甲、乙、丙を具し、うかゝひいで、あたりへこなし。

左「只今も申せし通り、初手の合圖は、御ン方のエヘン〳〵、第二の合圖は、此の蟲笛、心得たか。　皆「心得ました。　左「万一こゝにて去そんずとも、あの釣殿では袋の鼠、必ず共に早まるまいぞ。　皆「心得ました。

ト此のトタン、上手奥にて

奥「さやうならばみづからも——サ、皆も一所に、來やいのう。　女皆「かしこまりました。

ト左源太これをきゝ

左「ムゝ、あの聲は吳羽の前——ソレ、去のべ〳〵。

ト皆々下手へはいる。左源太殘り、あたりを見廻し、ふと舟に目をつけ、うなづ

き、そこへ忍ぶこと。やがて上手より牧の方さきに、つゞいて呉羽の前、女ども大勢ついていで來たる。此のうち明月となること。

牧「イヤナウ呉羽の前、今噂ありし平家を語る琵琶法師とやら、其の名を聞くもはじめなれど、折から月も薄ぎぬ脱ぎ、千艸の蟲もとりどりに、音色あはする秋の樂、平家亡びし物語も、時にとッての御ンなぐさみ、君にも嘲めでたまはん、とく其の法師をお招きあれ。　呉「ハヽ、お許しとあるからは、急ぎ召寄するでムりませう。誰そある、中門際にひかへさせし、最前の琵琶法師を、釣殿へ案内しや。　女「かしこまりました。

ト女一人上手へはいる。此のうち女共一同むかうを見て

女甲「アレ〳〵、御所さまが、はや御出御にムりまする。　女乙「オヽほんに將軍家が、御童衆をお敵手に　女丙「鬼ごとの御ンたはむれ　女丁「まッさきなは荏柄の御秘藏、小平太さま。　女戊「ほんに鬼ごとヽ　皆々「見えますわいなア。　呉「日ごろに似ぬ好い御機嫌――アレ〳〵あぶない――岩かど、松が根。　モシ母上、おでむかひいたしませうか。　モシ母上、

ト此の間牧の方向を見つめてゐる。

呉「モシ　牧「エヽ。

ト牧の方びッくり氣をかへ

牧「サヽ、おでむかひ、しやらぬかいのう。

ト此のトタン、ばた〳〵にて、向うより和田胤長の末男、小平太、七八歳の童姿、一さんに走ッてでる、つゞいて將軍實朝卿、十二歳、狩衣竪烏帽子、小平太を追うて出る。すぐ其のあとより北條次郎朝時、十三四歳の童形、御ンたちをさヽげもち少しおくれて伊豫の局、笹尾の局、結城七郎朝光、五十恰好、其の他近侍、女房大勢つゞいて出る。

伊「モシ、おあぶない〳〵。　笹「お怪我ばし遊ばしまするな。

ト此のうち牧の方、呉羽の前一同でむかふ。トタンに小平太かけて來て、呉羽の前の袖の下をくゞる、追ひすがりて實朝卿なろびかけるを

牧「ア、あぶない。

ト牧の方おぼえずだきとめる、實朝其の手にすがりて

冥「ア、術なかッた〳〵――ヤ、そなたは祖母前

ト牧の方の手にすがりながら見あげる、牧の方ゾッとしたる思入、トゞ氣をかへ

牧「オヽ、御前さま、お慮外おゆるし下さりませ。マ、みづからとしたことが、おゑしやくもおそなはり――ホヽヽヽ、失禮御免下さりませい。

ト作り笑ひして上手へ請ずる。このうち皆々集ひ

葛「どこもお怪我はムりませぬか。ヤイ〳〵小平太、氣をつけませうぞ。冥「何ともないく。サア釣殿へ、ゆかう〳〵。吳「ほんにマアいつもに似ぬ――うるはしい御前の御機嫌――さやうならば御案内――サヽ、いづれも　葛「いざ、御案内　皆々「下さりませう。

ト吳羽の前さきにたち、一同實朝卿を圍繞し、上手へはいる。此の間、牧の方は始終實朝に目をつけ、恍然と下手に立ッてゐる、皆々心づかずはいッて去もふ。

牧の方、我れ知らず二足三足上手へ往き、尙見送ッてゐる。此の以前、左源太舟より半身をあらはし、たび〳〵こなたを窺ふことあり、此の時不審の思入にて島に上り、あたりへこなしあッて、牧の方の傍へ來たり、小聲にて、モシ〳〵と呼ぶ。牧の方聞えぬ思入。

牧「かはゞまでにも肖たりとは――烏帽子姿も――狩衣なでも　左「モシ、御ン方　牧和子が料に、そッくりそのまゝ　左「コレサモシ、御ン方さま。

ト左源太牧の方の袂を引き、大きく呼ぶ。これにて牧の方びッくり思入。

牧「ヤ、そなたは左源太　左「手筈も首尾も、十二分と存じましたに、何故お見のがし、あうばしましたか。牧「オヽ。

ト牧の方夢のさめたるやうの思入。

牧「ムヽ。此の上はかねての手筈――万一にも去そんじなば、合圖は柱に去かけし狼煙――左源太「ぬかるな。左「心得ました。牧「ソレ。

ト牧の方きッと思入、懷中の短刀に手をかけながら、急ぎ足に上手へはいる。

あとに左源太呆れし思入。此のうち月又昏くなる。

左「さッぱり譯がわからぬわえ。何は云かれ、一まづ彼奴等を

ト懐中より合圖の蟲笛を取りいだし、吹かうとする。此のトタン、上手奥の植込より、以前の深見三郎次郎、以前のまゝの服裝にて、づゝといで、無言にて立ちより、炙所をあてる。左源太ウッといつたまゝ倒れる。深見懐中より捕縄をとりいだし、難なく縛り、蟲笛を奪ひて、月影に透し見ること。

第七段

（其一）月前の平家琵琶

上手に寄せて釣殿やうの建物、正面の外は小簾を下し、欄干附廻り椽、下手奥へやゝ斜に、池水に臨みたるこゝろ。左側の椽側より、同じく下手奥へ、又斜に橋形の渡殿、其の止り、四面に小簾を垂れたる離れ小島の水亭、これも四方椽欄干附。すべて北條邸の奥庭、泉水築山の遠見よろしく、渡殿のかなた、八月十六夜

の明月空高くさしのぼりたる體。釣殿のまん中よき處に、實朝卿、其のうしろに和田ノ小平太御ン太刀をさゝげてゐる。上手やゝ前のかたに結城七郎朝光北條相模ノ次郎（朝時）、其の次に吳羽の前、下手やゝ前の方に、伊豫の局、篭尾の局其の外女房、侍女、おの〳〵よき處にすまひ、さて椽側に近くやゝ下手に、盲目の琵琶法師、恰も一曲語り了りたる體、琵琶をいだき、頭をさげてゐる。皆々感に入り、中にも伊豫の局、笹尾の局、結城朝光などは、涙を催せしてなし。

葛「信濃ノ前司行長ぬし、近きころ入道あり、公用の暇々に、平家と名づくる物語を、物せられ候ふ由、兼ねて承り及びつれど、かくまでいみじき作ぞとは、存じもかけず候ひしに　伊「折も折とて、仲秋の、御ン釣殿の月の底に　葛「只讀みてだにと思はれまする、哀れも深き御ン物語を　伊「妙なる琵琶のいとゝなほ　葛「諸行無常の世の姿を、さながらに見る心地して　葛「そゞろ涙の催され　女甲「何わきまへぬわたくしをもまで　女乙「面白いことで　皆「ムりました。

ト皆々感心の思入よろしくある。

冥御意に叶ふか、どうあらうと、御聞には供へながら、胸安からずぞんじましたに、冥加に餘る御感のお言葉――法師にもさぞ面目。琵琶のほまれと申さうか、筆のほまれと申さうか、取りも直さず當家の面目――かくと傳へはんべらば、御もてなしに奔走の、あるじ夫婦も嘸よろこび――かたじけなう、ぞんじあげまする。冥「イヤナウ御方、只一曲ではあまりに本意無し、何をがな今一節。冥「ほんに結城さまの御意の通り、こたびは何がな、をさないしほに、我が君はじめ、童御たちの御所望下されたし。

ト呉羽の前へむかひ、三人よろしくある。

冥心得ましてムりまする。イヤナウ法師、方々の御褒美は、世にありがたい其方の面目。あのやうに仰せらるゝ、何をがな今一曲。迭「ハヽ、冥加至極に存じまする。さやうならば、恐れ多くはムりますれど、幼君に因みまして、先帝御入水の一條を冥オヽ、その一段は、さぞかし〳〵。冥「ナニ、御入水の一段とや。承らぬ其のうちか

ら、ひにし昔しの偲ばれまして、そゞろ哀れを、おぼえまするわいのう。

ト伊豫の局目を拭ふこと、此のうち琵琶法師撥を取りて、調を整へ、平家先帝入水の條を語りいづる。

平家「其の後は、四國鎮西のつはものども、皆平家を背いて源氏に附く、今まで隨ひ附き奉ッたりしかども、君に向ッて弓を引く、主に對して太刀をぬく、されば彼の岸に着かんとすれば、浪高くして叶ひがたし、此の汀によらんとすれば、敵矢先を揃へて待ちかけたり、源氏の國あらうひ今日を限りとぞ見えし、さる程に源氏の兵ども、平家の船に乘り移り乘りうつる、水主楫取ども、或は射殺され、或は切り殺されて、船を なはずに及ばず、船底に皆倒れ伏しにけり「新中納言知盛の卿、急ぎ御所の御船へまゐらッさせたまひて、此の世の中の有樣、さりともとこそ存じゝが、今はかうにこそ候ふらめ、見苦しき物どもをば海へ入れて、船の掃除めされ候へとて、掃き拭ひ塵ひろひ、どもへに走り廻ッて、手づから掃除し給ひけり

ト此のうち皆々感に入り、伊豫の局涙を催せし體にて、鼻汁をかむことなど。

和田ノ小平太、やう〳〵退屈したる思入、トゞ實朝のうしろにて吹呰する、實朝卿うしろを見かへり睨む眞似、小平太戯れてわびる眞似。

平家「女房たちはさしつぎひて、いかにや新中納言どの軍のやうは如何にや、如何にと問ひたまへば、只今に珍しき吾妻男をこそ御覽せられ候はんずらめ、どて、からからと笑はれければ女房たち、何條只今の戯れぞやとて、聲々にをめき叫びたまひけり。

ト此のうち女房たち、いよ〳〵感に入り、落涙の體。次郎も默然としてうつむき、結城朝光も頭をうなだれ、悵然として聽きほれてゐる。小平太、實朝の耳に口よせ、何事かさゝやく實朝うなづく。

平家「二位どのは、日ごろより思ひ設けたまへることなれば

ト此の時橋殿のかなたなる水亭の小簾かげより、牧の方半身をあらはし、こなたへ思入。

平家「鈍色の二ッぎぬ打かつぎ、ねり袴のそば高くとッて、神璽を脇にはさみ、寶劍の

腰にさいて

ト此のうち牧のかた懷刀を取りいだし、目くぎをさめすこと。

平家「我れ、は女なり、とも敵の手には、かゝるまじ

ト牧の方きッと思入あッて橋殿へかゝる。

平家「主上の御侶にまゐるなり、君に御志思ひまゐらせん人々は急ぎつゞきたまへやとて、去づ〳〵と舷へぞ歩みいでられける

ト此のうち牧の方ひそかに橋殿を渡りはてゝ、こなたへ近づかんとする、同時に實朝卿小平太、うなづきあうて、そッと座をたち、左側の縁へぬけいづる。牧の方目ばやく見てきッと思入、足早に橋殿を逆戻りして、再び小簾かげへかくれる。皆々心づかぬ體。

平家「主上今年は、八歳にぞ、ならせおはします、御年の程より遥かにねびさせたまひて御かたちつくしう、傍も照り輝くばかんなり

ト此のうち實朝卿、小平太、互ひに含笑みながらさゝやきあひ、ぬき足して橋殿

へかゝる。

（其二）　橋殿の一刹那

ト牧の方再び小簾かげより半身をあらはす、實朝之れを知らず、何事か小平太にさゝやく、小平太うなづき、橋殿を走りもぎり、前の釣殿の背面へはいる。（隱れ遊びのこゝろなり）。牧の方また身をかくす。實朝、小平太の合圖を待つ思入にて、水亭の前のかたへ、釣殿へ思入あッて徐かに歩みゆく。やりすごして牧の方ひそかにうしろより忍びよる。

平家「御ンぐし、黑うゆら〳〵と御背中すぎさせおはします

ト牧の方懷刀をぬき、逆手に取り、只一突とうかゞひ寄りながら、横貌が我が子に似たりといふ思入あッて、突かん〳〵として突きかねるこなし。

平家「主上あきれたる御ンありさまにて

ト實朝何氣なく、ふと見かへる、牧の方はッとこなし、懷刀をうしろへかくす。

（ト此の次の「平家」の詞及び地を消し、琵琶の撥音のみをあしらふ。

實「オヽ、祖母前か。なろはびッくり、玄たわいのう。

ト牧の方思入よろしく、トゞやう〳〵にそら笑をよそはひ

牧「ホヽヽヽヽ、お盧外おゆるし遊ばしませ。ッイアノ物で――オヽ、それ〳〵――アレ、御覽じませ、それ〳〵、あれなる水の面に　實「エ、何が　牧「それ〳〵、月影　實「ヤ魚がとんだ。アレ〳〵月が――碎ける〳〵。

平家「まづ東に向はせたまひて、伊勢大神宮にお暇申させおはしまし、其後西に向はせたまひて、西方淨土の來迎に預らんと、誓はせおはしまして、御念佛候ふべし

ト此のうち牧の方、躊躇の思入、こなし、よろしく、トゞ思ひ切ッて懷刀をふりあぐる、トタンに釣殿の方にて小平太合圖の口笛を吹く。

實「ヤ。

ト實朝ふりかへる、牧の方覺えずあとずさる、實朝心づかず、つか〳〵と橋殿の方へ走りゆく、トタンに釣殿にて

皆「我が君さま〳〵。

トあわてたる聲々、同時に撥音パタリと止む、牧の方はッとこなし、きッとなりすぐ實朝に追ひすがる。此の間一刹那。實朝釣殿の背面へかけ入る、牧の方つゞいてかけ入る、トタンに小平太

小「アレ御ン方が――アレイノウ。

ト同時に釣殿の中どよめきわたり、人聲、物音、はげしく聞える、すぐ牧の方、懷刀をもッたるまゝかけ戻り、橋殿の柱を一刀切る、すぐにすさじき物音して狼煙上りしこころ。牧の方すぐに釣殿へかけ入らうとする、トタンに釣殿より吳羽の前、懷刀の柄に手をかけ、さきにたち、侍女大勢甲斐々々しきいでたちにてたちいで、吳羽前よろしく牧の方をとめて

吳「驚き入ッたる御ン振舞、母上、御亂心あそばしましたか。慮外ながら君の奉爲、そこ一寸もお進みあるな。

ト此の間遠寄せになり、ドンチャン次第にはげしく聞える。牧の方思入あッて

牧「ヤア、こざかしき其のとめだて――そちたちに問答無用。ヤア〳〵左源太、はやまゐれ。

トすぐに上手へ行かうとする、吳羽の前とめる。一寸あッて上下に入りかはりトゞ牧の方懷刀をふるひ切りぬけうとする。立まはりあッて、女ばら皆々下手へ、牧の方上手へ。

（其三）　釣殿の大團圓

牧の方、釣殿の正面へ來る、吳羽の前さきに、女ばらづゝいて追ひ來たる。此の時、釣殿の上手より深見三郎二郎、烏帽子直垂の下に腹卷して、兵を玄たがへ立ちいで、よろしく牧の方を遮る、牧の方ギョッとして立ちどまる。

深「ヤア、御不覺なり、牧の御ン方、御謀反たちまち露見に及び、將軍家には恙なく、はや御還御と相成ッたり。牧「ヤヽ、ずりや空しく　深「かくなる上は、御懺悔〳〵。牧「たと

へ釣殿は逃るゝとも、四方を取りまく一味の軍勢　澤「ヤア、おろかなる其のお言葉只今恰も義時公、中をとばして御歸館あり、群る中へかけいらせ、獅子の一聲おのゝく百獸、怨敵たちまち慴服なしたり。　吳「すりや我夫には、御歸館ありしか。　澤「聞ゆる太鼓貝がぬが、目ざす敵は御ン方御夫婦。　牧「ヤヽヽヽ。　澤「いでこの上は尋常に吳「御ン惡心を御懺悔あつて　澤「御所のお沙汰を御ンまちあるべし。　吳「夫もろともみづからが、一命かけても御ンとりなし　牧「ヤア、なめすぎたり、取なしとは。　左源太はいづこにある――左源太〳〵。

ト此の時、正面奥の小簾のかげにて

義「アイヤ　母上、其の左源太輝英も、已に誅に伏して候ふ。　此の上は是非もなし、尋常の御懺悔〳〵。　吳「ヤヽ、あのお聲は　皆々「相摸守さま。

ト此のトタン遣寄ばたりと止み、正面奥及び左側は、小簾悉く落ちて、釣殿見透しになる。　正面燦側より北條相摸守義時、烏帽子水干、侍士若干ひきゑたがへ右手に三方をさゝげ侍士一人に左源太が首級を提げさせ、進みいづる。　吳羽

の前、深見等、左右に退き、おの〳〵よろしくすまふ。　ト義時うや〳〵しく牧の方が立ッたる下手よき處にすまひ

義「左源太づれは申すに及ばず、上洛中の朝雅をも、即刻誅伐の御ン沙汰あり、已に御敕書を下され了んぬ、滅亡三日を越ゆべからず、まッた父上時政どのにも、一念已に御發起あッて、まッこの通り御ン落飾。

ト三方に載せたる白髮のもとどりを示す。　牧の方無言にて、よろしく思入。

義「此の上は母上にも、只いさぎよき御ン改悛――申すに忍ひず候へども、罪業消除の御ン落飾――ひとへに願はしう、ぞんじたてまつりまする。

トよろしく愁の思入あッていふ。　吳羽の前、深見はじめ、一同愁然としてさしうつむく。　牧の方は此の間ゑよんぼりとして立つたるまゝ、うつむいてゐる。

義時も言ひ終はりて落涙の體、皆々しばらく無言。　此のうち牧の方ゑづかに懐刀を取りなはし、突然乳の下を貫き、アッと叫びて倒れる。

澤「ヤヽ、御ン方には　吳「こは何故の　二人「御生害。

ト吳羽の前深見左右よりかけ寄り介抱する。牧の方苦しみながらよろしく二人をとゞめ

牧「何故の生害とや。子故の闇の雲破れ、時しもこよひ十六夜の月に眞如の影拜み和子の蹤追ふ、死出の旅。今更いふべき言葉もなし、親子の因縁、義時どの疾く介錯頼みまする。

トよろしくこなし。一座ながめかへる。義時よろしく愁の思入ありて

義「男まさりの母上ゆゑ、かゝる御覺悟もあるべき筈を――アさなしたり、おろかにも心づかず――

ト牧の方のそばにさし寄り

義「ナウ母上、たとへ朝雅亡ぶるとも、今懷胎と傳へ聞く、妹萩の前は手許に引きとり、よしや男兒生まれんとも、一命にかへて申し乞ひ、此の義時が猶子となし、行末長く後見せん。せめてもそれを、冥土の御ッつと。

ト此のうち牧の方次第〳〵に弱り、義時の語を聞き、微に打笑ひやうなるうち

衰へて、がッくりと落ち入る。吳羽の前深見驚きさし寄り

深「モシ〳〵。吳「母上さま、母上――

ト大きく呼ばうとするを、義時

義「アゝコリヤ。

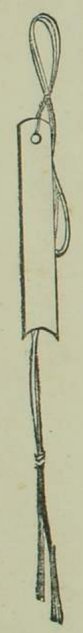
トとゞめ

義「アさすがは母上。

ト觀念の思入あッて

義「南無阿彌陀佛〳〵。吳、深「南無阿彌陀佛〳〵。

ト女ども侍士等一同皆々手をあはせ、小聲にて念佛する思入。夜半の鐘。



牧の方

大尾

春のや主人白す、拙作『牧の方』はこゝに一段落を成したれども、本篇の趣意はいまだ盡きたるにあらず、此の篇中に只頭首のみをあらはしたる北條義時、深見致興、實朝卿の三人物は、別に『源實朝』と題したる續稿に於て、其の胴と尾とを描きいださんとす、其のうち義時だけは『源實朝』にて胴をあらはし、其の續篇『左京兆』に於て其の全身をあらはすべきものとす。

早稲田大学図書館
早稲田文学ライブラリー
2466

明治三十年五月一日印刷
同　年五月四日發行

牧の方奥附
實價金四拾錢

著者　坪内雄藏　東京市日本橋區通四丁目五番地
發行者　和田篤太郎　東京市京橋區築地三丁目十五番地
印刷者　野村宗十郎　東京市日本橋區通四丁目角
發行所　春陽堂　電話本局五十一番
印刷所　株式會社東京築地活版製造所　東京市京橋區築地二丁目十七番地

版權所有

内に發行者の印章無き品は偽物と心得べし

牧之方正誤

段	頁	行	誤	正
第一段	四	五	二人「さらばムんす……	二人「さらばでムんす
同	一六	二	照英	輝英
同		三	照英	輝英
第二段	四三	一二	政「ヤイ宗近、云々……	鈴「ヤイ宗近
同	六一	一〇	「表は吉兆、云々……	表は吉兆
第三段	七〇	八	一大事になれました……	一大事になりました
同	七一	五	左右に波うつ五色の絲、も	左右に波うつ五色の絲の、
同	八四	一一	つれ亂るゝ云々……	もつれ亂るゝ云々
第四段	一〇四	七	棄せりふせにて……	棄せりふにて
同	一一四	一	一家の私事……	一家の私事
第五段	一一九	八	木薩より……	木蔭より

牧之方正誤

同	一二七	一〇	化のトタン……	此のトタン
第六段	一三二	一	着すべきは、無念に亡びし 稲毛が殘黨	着すべきは　牧無念に亡び し云々
同	一四三	三	島に上り……	陸に上り
第七段	一五二	七	すさじき音して……	すさまじき音して
	一五八		左京兆	右京兆

右の外にふりがなの假名ちがひ、及び衍字、誤植等若干あれども、それらは意味を讀み誤るほどならねば、今一々に之れを正さず

序にいふ、本篇の挿繪は、作者の本意と相叶はざるもの多し、服裝も、容貌も態度も、周圍の景物も、作者の下繪に背きて畫工のほしいまゝに畫けるなれば、本文と相叶はざる所處々あり、覽ん人之れを諒したまへ。

特別割引券

眞告

一江湖御花主樓方の御取立により日に倍し盛大に相成奉深謝候偖世運風潮に先だち文學社會に鋒々たる大家方の手に成る新規新案の原稿相選び挿畫製本に注意し逐次出版致候間愛顧諸君方倍御愛覽の榮を給はらん事を希望仕候

一此實價書目の外百餘の書籍は御命令に隨ひ御取次仕候間書名著者出版人等御記載御注文願上候尤も直段は最油斷他店より一層廉價に相働き候間自然高價にも差上候時は御申越次第直引可申候

一送金方は內國巡遞便早逓又は銀行或は江戸橋郵便本局宛等のかはせにて何れも前金に御願申上候

一物注文書着三日以內に必ず出荷可仕候

一此切取紙へ品物御書入御注文の御方へは該實價書目の內特別一割引にて御送り申上候

一郵券代用は一割增にて願上候

一書房姓名は可成御明瞭に楷書文字にて判然御認願上候

一御親友御同僚中小說雜書御愛讀の御方の宿所御姓名御通知願上度揃店より早速書目御送り可申候

一前件申述候通り下段及裏面に書入場所有之候間御注意願上候

東京日本橋通四丁目角　春陽堂　和田篤太郎　電話五十一番

切取線

御注文主住所氏名	書籍類を購求せらゝる諸君の住所氏名

注文簽	文書摘要
金　金　金　金　金　金	小計　ノ金
金　金　金　金　金　金	郵税　運賃

書目冊數

書日冊數

切取線

◉紅葉山人著述目録

伽羅枕　武内桂舟畫　實價卅五錢　郵税六錢

紅葉子數年の著作六十餘種に及ぶと雖も、長篇本書の如きは未有らず、蓋し金剛石の徑一寸なるもの乎。

戀之病　無名氏畫　實價十錢　郵税四錢

夫婦喧嘩より一轉して戀病者を治する醫者出でぬ行文已に滑脱趣考甚だ奇警一讀笑ひ死せざるものなし。

冷熱　富岡永洗畫　實價三十錢　郵税六錢

寒夜痴男を氷雪の中に苦めし美人は、夏日痴男の爲に炎熱の中に煩悶せしめらるゝの奇談にして活殺自在底筆鋒は讀者をして生死の岐に彷徨せしむ。

青葡萄　渡邊省亭畫　實價三十錢　郵税六錢

著者身上の厄難を一種獨創の記錄躰に綴れるものなり人其妙を稱すれば恍として身其壥を踐むが如し。

紅鹿子　武内桂舟畫　實價十二錢　郵税四錢

此書夏痩關東五郎の二篇より成る横開枕本にして手枕の友としてよし。

俳諧名家選　四六版美本　實價廿五錢　郵税四錢

今や俳諧復興して氣運天を衝くの時本書出づ實に斯道の指南車として先進後進の欠く可らざる良書なり。

なにがし　鈴木華邨畫　實價三十錢　郵税六錢

本書は豫備兵義血俠血の二篇を收めたり、若夫卷を繙けば想に鬼氣ありて毛髮に逼り、文に異彩を放ちて顔色を照らさん。

心之闇　富岡永洗畫　實價二十錢　郵税四錢

本篇は紅葉山人が其平生草を打ち蛇を驚かすの棒を投じ、利刃一揮直に深潭に投じ去りて、須臾波上に凝紅を浮ぶ底觀あり、附錄逝水又頗る情致あり。

笛吹川　三島蕉窓畫　實價三十錢　郵税六錢

一偉男兒の性行と幼女の衷情を說くの間頑牢石の如き沒情漢を點綴したり筆端輕々描きさり描き來りて圓轉たるもの題して笛吹川といふ。

隣之女　武内桂舟畫　實價三十錢　郵税六錢

隣の女は實に隣の女を解剖したるなり口書の美人は篇中の文字と相映じて綺麗樓館卷首に寧齋氏の題詠三首を載せたれば一層の彩を添えたり。

浮木丸

武内桂舟畫　實價三十錢　郵稅六錢

本篇の骨子は賤民の一子九死の命を全うしてゆくりなくも一城の主となるの經歷なり其妙は更にいはず。

夏小袖

無名氏畫　實價廿五錢　郵稅四錢

覆面の武士あり辻斬を試む、刀利魔の如く手練殆ど神なり、殺るゝ者夜々幾百人、而して隻影の捉ふ可き無く、天下爲に嘸然たりし匿名出版の奇書即是なり。

紫琴

水野年方畫　實價三十錢　郵稅六錢

「紫」は心配性なる醫學生が數度失敗の上漸く及第する件にして頗る人情の美を發揮したる紅葉山人の筆、「琴」は江見水蔭子の附錄短篇なり。

不言不語

鈴木華邨畫　實價三十錢　郵稅六錢

環とよべる一美人が一種不可思議の情實を秘める笠原家に仕へて其不言不語の情實の爲に又自ら不言不語の理に心を馳せ其秘密を探らんとする奇談なり。

片ゑくぼ

省亭年方合畫　實價三十錢　郵稅六錢

片靨は、何者とも知らず、何處より來たれりとも分かず、忽然として深夜に門を叩きし一女子が好顏の特點なり。

三人妻

武内桂舟畫　定價五十錢　郵稅八錢

本篇は驛路の美人の如く紅梅は北齋の妖婦の如くお才は閨國が筆の餘あり、妬むもの誘るもの謹むもの、夫れ〳〵の特性を寫して一帖の活繪巻を展ぶるに似たり

一人女

武内桂舟畫　實價廿五錢　郵稅四錢

書心描思の筆、鉛魂斷腸の記、紅葉山人獨擅の技此編に於て盡せりと謂ふべし。

紙きぬた

武内桂舟畫　實價廿五錢　郵稅四錢

寸珍の册子四種の好文章を萃めて家々案上の清玩に足る、製本は袖珍の美本、外出車上の往來に携帶頗る便なり。

多情多恨

クロース製　實價廿五錢　郵稅四錢

本書は紅葉山人近來の大作なり、多情の男兒多恨の女、豪油の如き情海に浮沈するものを說く筆々輕妙讀來て卷を掩ふに忍びず。

男心

男心は東家西家の一小茶話に過ぎずと雖も披讀一遍せば、筆々傷まざるなく、悲まざる無く、言々愁へざるはなし。蓋情の最も切にして、女の最も至れるもの乎。

浪六漫筆

武内桂舟畫　實價三十錢　郵稅六錢

小說あり實事譚あり雪月花以下蒐むる所數十種遊女乞食淸日與一石川五右衞門音曲天女等尤も面白し。

安田作兵衞

渡邊省亭畫　實價三十錢　郵稅四錢

明智が三羽烏の一人右大臣に鎗をつけたる勇士死して亂臣賊士と唄はれしが今や一管の毒筆に吊はれて可憐の老武者とはなりぬ。

たそや行燈

渡邊省亭畫　實價三十錢　郵稅六錢

たそや行燈の影暗き處、鬼が出るか佛が出るか、浮世の外の色深き處、俠骨稜々たる快男子あり。義氣凜烈たる俠美人出づ、快活軟語人をして夢中に彷徨せしむ

後の三日月

水野年方畫　實價二十錢　郵稅四錢

涙六子の傑作三日月の後篇なり篇中の人物凡て前篇より來りたり、前篇の美人已に老ひて新來の主公意氣豪なり、併せ讀めば其快限りなし。

千の利休

學園花壇の内　實價廿五錢　郵稅六錢

狂暴虎の如く、怒つて我佛を碎く豪放の興四郎、生家を放たれて江湖を流涙するの間錄を揮つて武人を殺す、父其暴を憂ひ身を殺して子を諫む此怪兒乃ち千利休、

◉塚原蓼洲著述目錄

おあき

水野年方畫　實價三十錢　郵稅六錢

日出國の旗幟天に冲するの處一美人一兵士あり情緒纏綿、時に狼戾の老婆を現はして其間を點綴す妙趣無限

最上川

水野年方畫　實價三十錢　郵稅六錢

兄妹仇敵を求むるの間惡徒の毒言語に絕す偶ま飛箭聲あり仇氏を仆す天道は情なきに似て然も有情。

山中源左衞門

武内桂舟畫　實價卅五錢　郵稅八錢

滿身是れ膽の美少年は豪氣不屈或は速水の志に泣き或は友の切情に迫られど妻の緣さへ振切りて關東方に赤心を示したる彼の一代描き出して筆々眞にせまる。

淨瑠璃阪

小林永興畫　實價三十錢　郵稅六錢

義人烈士孝子忠臣悉にして劍聲怒にして軟語淨瑠璃阪の復讐は當年江都を驚かせし大快話なり。

北條早雲

武内桂舟畫　實價四十八錢　郵稅十錢

當年の新九郎長氏、關八州の草木を風靡して、北條九代の礎を開く、英雄躍々として紙上に聲あり。

◉坪内逍遙著述目錄

桐一葉
鈴木華邨畫
實價卅八錢
郵税六錢

英雄の末路眞に哀れむべきかな豐公死して天下亂麻の如し市の正旦元孤忠幼主を補佐すと雖も赤誠容れられずして空しく英魂を茨木の里に埋む好悲劇これなり。

文學其折々
紙數千餘頁
實價金壹圓
遞送料二十錢

氏が近來の作にかゝる論文批評諷刺滑稽等各部類を分つて集輯せるもの其東西の作家を評するに至りては實に以て明治思潮の干滿を測度するに足らん。

春の舍漫筆
實價三十錢
郵税六錢

逍遙氏著はす處の三種を載す第一は諷刺的物語にして第二は文學評論第三は西洋の逸話なり

梨園之落葉
小林清親畫
實價五十錢
郵税十錢

逍遙子が梨園の子弟に望むところの意見之を論じ之を敎へ誘導開發深く斯道の爲に盡したる者本書是なり。

牧之方
渡邊省亭畫
近刊

北條時政の室、此人をかりて當代の隱微を敘せるもの

◉鷗外漁史著述目錄

水沫集
實價六十錢
郵税十六錢

理木の哀れなる水泡記の奇なる盜俠行の勇ましきおもかげの優美なる舞姫の面白き、鷗外漁史純潔の詩想は殆んど溢出して本書に充てり。

つき草
紙數六百頁
實價壹圓廿錢
郵税二十錢

本書收むる所のもの其識や邃其文や雄一の輕薄文字あるなし誰かうつろひ易き花の色なりといふ者ぞ。

◉忍月居士著述目錄

蓮之露
武内桂舟畫
實價三十錢
郵税六錢

口繪に寫せし半裸躰の美人は市川如喬といへる當世に有りては只理想にのみ有り得べき女優にして蓮の露の主人公なり明錄蝙蝠俄分限の二編を載す。

惟任日向守
三島蕉窓畫
實價二十錢
郵税四錢

本能寺薄暮幾尺、まだ東雲の曙破りて、颯と棚曳く一旅の旗は桔梗の紋所、偖は日向めといふ間も遲し、萬籟俄かに起りて鬼神を倒す、英雄の胸中人知らず、爰に忍月居士有り、筆を揮つて爲に寃を雪くもの是本書

夏祓
鈴木華邨畫
定價卅錢
郵税六錢

若殿樣の可笑しき、戰話斷片の勇ましき、訥軍曹の哀れに面白き、筆端走る所電霆これに乘ず。

黃金村
聚芳十種の内
定價十二錢
郵税四錢

黃金村は聚芳十種の内傑作を以て世に聲きたるものなり、忍月居士の筆、奇矯艶麗、時に清風林間に起り、夜雨蕭々として杜鵑空を掠むるに似たり。

露子姫
渡邊省亭畫
實價廿錢
郵税四錢

忍月居士が處女作として文壇に雄飛したるの始めなり所謂戀愛小說の神聖なるもの本書山て世に戀愛小說を作るの作家筭も又斗る能はざるに至りぬ。

辻占賣
文學世界之内
實價八錢
郵税貳錢

淡路島通ふ千鳥の戀の辻占と呼歩く可憐の小童は一夜權門多涙の夫人に逢ふ、小童知らずと雖も夫人は乃ち其母なり、一讀涙欄干。

◉遲塚麗水著述目錄

南蠻大王
百家選之内
實價十二錢
郵税四錢

これ百花選中の大王、麗水氏雄健の筆

陣中日記
米仙米齋畫
實價三十八錢
郵税六錢

著者筆を戴せて軍に牙山平壤に從ひ彈丸雨飛の間を奔走して得る處あり歸來戰況風俗を敘する者本書これ也

半月城
三島蕉窓畫
實價三十錢
郵税六錢

楠氏の餘黨父祖の遺訓を以て一點の忠魂死すとも渝らず一美人の身として回天の大義を企て功業未だ半途ならずして遂に仆る其間の消息頗る人をして感奮せしむ

大和武士
水野年方畫
實價三十錢
郵税六錢

臺灣三角湧陣沒の勇士櫻井特務曹長以下三十五士を經とし泣々愛兒を殺して國と共に亡びんとせし吳德福を緯として結構せるもの滿眸盡く裂くるるの思ひあり

さんざ時雨
富岡永洗畫
實價三十錢
郵税六錢

讒者の舌は劍の如くにして、爲に江湖に流涙する清川右内、優にやさしき娘の雪枝、老僕の忠に死せんとする、俠雄の義に戰ふ、一篇の波瀾入をして泣かしむ。

照日之松
水野年方畫
實價三十錢
郵税六錢

亭々たる孤松天際を凌ぐの處朔風屢ば侵せども節操尚凜たり以て士の行に比すべし藤中納言の忠、豐島泰秋の義大推和尙の勇等本書の勇壯快究りなし。

月夜鴉

富岡永洗畫
定價三十錢
郵稅六錢

麗水子か幾多の日子を費やして新作せるもの氏の錦腸を溢れたる詩片は暗香の浮搖するが如く紙上にみつ。

◎江見水蔭著述目錄

鎌わぬ坊

富岡永洗畫
實價三十錢
郵稅六錢

世をも人をも鎌はぬ坊、六尺有餘の骨格逞ましく、弱を扶け强きを挫く、其怒濤船を覆へさんとするの時、足を舷にかけて、一睨海若をひそましむ。

水之聲

年峰年方畫
實價三十錢
郵稅六錢

岩屋城の奇なる鏡の浦の面白き短篇數十種靈くこれ金玉の聲あり水の聲の潺々として妙味掬めどもつきず。

水車

武内桂舟畫
實價三十錢
郵稅六錢

兜の星彫燒山越旅書師等を始めとして水蔭子の著數種を收む紙數二百有餘貞口書は桂舟子の丹青になりぬ。

野試合

文學世界之内
實價八錢
郵稅二錢

野試合は勇氣勃々たる少年の異野試合に偉勳を立つる物語少年子弟の讀本として恰好なり。

◎三味道人著述目錄

塙團右衛門

省亭米僊合畫
實價三十錢
郵稅六錢

武士となり浪人となり乞食となり禪僧となり時に或は折花攀柳の狂漢たらんとし時に或は裁月縫雲の詩人を學ぶ其豪快俠烈の奇男子は躍如として紙上を横行す。

鬼一口

武内桂舟畫
實價廿五錢
郵稅四錢

關白秀次が淫縱の有樣を小說に敍したるものにして篇中祇園の俠妓龍が醉態を寫せる所最も巧妙。

鴉の浮巢

筒井年峰畫
實價二十錢
郵稅四錢

名妓鴉照の傳にして俠客信傳の俠義紙屑買の狂亂名妓の情夫何某の慘話等其間白き事實ふるにものなし。

目黑物語

渡邊省亭畫
實價三十錢
郵稅六錢

目黑の里の桑の井が娘と道心堅固なる一美僧との物語筆々輕妙にして句々玉の如し蓋し山人得意の傑作。

かつら姫

新作十二番之内
實價郵稅共
金三十三錢

妖艶なる桂姫、抑も誰家の女ぞ、中世亂麻の世に處して、半世の偉業を企つる女將軍。

かたゝ戀

二葉亭著
鈴木華邨畫
實價卅五錢
郵稅六錢

三年不蜚不鳴、深く世を嘲ましたりし二葉亭主人の新著なり、ツルゲチツフの面目眼底に泛ぶを覺ゆ。

小楠公

川尻寶岑
三島蕉窓畫
實價廿五錢
郵稅四錢

小楠公の美名千古に冠たり精忠淋漓鬼神を泣かしむ今其事蹟を輳合して隱本躰をなし娯樂の傍ら義勇奉公の正義を發揮せしむ。

學園花壇

諸大家作
三島蕉窓畫
實價廿五錢
郵稅六錢

露伴子の當世文反古は大に世情を穿ち麗水生の再生豫讓は凄婉を極め涙六の千利休も亦好文字なり迹の京女即以下思案乙羽花瘦諸氏の作頗る誦すべし。

まぼろし

湖處子作
久保田米仙畫
實價十八錢
郵稅四錢

盲愛の母は身を妾嫗に委して辭せず、性行高き青年は人生の潤涙に捲かれて溺れ、愛の犧牲となりたる少女は死に入りて復還らず、本書は湖處子が得意の佳什。

若葉

高瀨文淵
三島蕉窓畫
實價廿五錢
郵稅六錢

詩の旨趣を散文もて寫したるもの題して詩篇若葉といふ幼時の情より着筆して許嫁の妻の死目に逢はざりしを怨む迄の一篇着想斬新筆々生色あり。

亂れ咲

丁々子作
寺崎廣業畫
實價十五錢
郵稅四錢

本篇は前月之院議員田邊太一氏が其光風霽月を樂むの餘暇を以て寫意小說を綴したるもの其面白く珍らしきは氏の經歷を推しても知り得べし。

四之緒

四家合作
水野年方畫
實價二十錢
郵稅四錢

紅葉子の鷹料理眉山人の左褄柳涙子の白百合鏡花子の鐘聲夜半錄を收む恰も一朶の彩雲春花をとさすが如し

松菊餘影

名士遺蹟
實價廿五錢
郵稅六錢

或は古壯士たり或は維新の功臣たり時の内閣顧問として王政復興の偉業を完からしめたる木戸孝允侯の餘影を繇したるもの志士をして泣かしむるものあり。

會津戰爭夢日誌

川尻寶岑
小林永興畫
實價二十錢
郵稅四錢

若松城滅の日少年の決死隊あり白虎軍といふ刀折れ矢悉きて城頭白旗の飜へるを見慟然眸を擧げて曰く誓つて周の粟を食はずと相刺して死す義膽憐むべし

大海原

末廣鐵腸
久保田米仙畫
實價卅八錢
郵稅八錢

大海原は政治小說なり外人の跋扈官吏の專横志士貞婦の困難を始として迅雷大風惡魚大地雲濤車の衝突獨立の大戰爭等駭天驚地の大活劇を描き出したり。

本朝智惠袋

木版密書入
實價廿錢
郵稅四錢

本書は古今の滑稽談をあつめて春の夜のつれ〴〵夏の日のあき〳〵したる時の友として最も妙なり。

舶來智惠袋

木版密書入
實價廿錢
郵稅四錢

歐米各國先哲の滑稽奇談をあつめたるものにして其輕妙洒落なる本朝智惠袋とは更に其趣きを異にして妙なり篇中往々本邦人の夢想にだもなき快話あり。

中村花痩 **とぼれ萩**

武内桂舟畫
實價廿五錢
郵稅六錢

晒し井寒紅梅の二篇を載す前者は男女の艶物語後者は一種悲慘の小說にして仁勇智義轉た人を感憤せしむべきものあり令嬢方の友として好教訓たり。

肝付大佐 **世界將來の海王**

大山翠松畫
實價三十錢
郵稅六錢

露國海軍士官の原著にして英人クークの譯譯を以て長く歐洲に行はれたりしを今又重譯したるもの一篇の大意は英露の大海戰にして露が百年の長計をも竊めたり

六氏合作 **籠枕**

武内桂舟畫
實價三十錢
郵稅六錢

蓮山恩榮柳浪紫山紅葉風葉六氏の小說を錄したるもの篇々悉く金玉鳴つて鏘々の璧ありいづれ劣らぬ花菖蒲引きぞわづらふながめなり。

川崎紫山 **日清海戰史**

菊版美本
實價卅五錢
郵稅八錢

政治的歷史的眼光と精細なる調査よりして彼我海戰の狀況を敘したるもの眞にこれ龍嘯虎吼の概あり。

川崎紫山 **日清陸戰史**

紙數六百五十頁
實價七十五錢
郵稅十四錢

東洋の天雲凝り風怒り外交の局面大衝突を來すの源因より血雨洗ぎて平和殺れ牙山の一戰より平壤旅順威海衞牛莊營口田庄臺の戰となり平和談判に至て全篇完結

仰天子作 **蝦夷錦**

渡邊省亭畫
定價廿五錢
郵稅六錢

壯士情人の衣を抱いて血涙天際に訴ふ、北海濱高く烟霧絶域を閉して大志未だ成らずと雖も、晏天盡んぞ無情の久しからんや風雨晴るゝの時日月又光を弄ぶ。

青軒天彦 **花相撲**

武内桂舟畫
實價二十錢
郵稅四錢

「この眼」は青軒居士にして「錦の袈裟」は天彦子の作なり綺想妙案一諸卷を覽くに忍びず、彼は妍に是は艶に孰れに團扇の上るべきや行司は讀者の眼なり。

岡本昆石 **瓜太郎物語**

鮮齋永濯畫
實價四十錢
郵稅六錢

夢に鄂覃の駒に乘り飄々然として異國漫遊のオドケ旅行、瓜太郎の新夢想兵衞は野蠻文明半開の國々にいたり其奇に驚く諷刺小說。

文の庫

鈴木華邨畫
實價卅五錢
郵稅六錢

これ嵯峨の舍主人數年の著作を集めたるもの、小說雜錄韻文紀行等紙數殆んど三百頁になん〳〵とす。

懸賞小說 **瀧口入道**

水野年方畫
實價三十錢
郵稅六錢

時頼入道の半生を說きたるもの、これ當時世評嘖々たりし懸賞小說なり、匿名の著書は樗牛高山林次郎氏今文壇に雄飛する其人の處女作、

上野川鶴 **發明家**

自畫
實價二十錢
郵稅六錢

志操確乎たる青年は貧に依つて志を變ぜず遂に義人の助を得て一大兵器を發明す全篇窮理的の大文字少年子弟をして轉た義勇の魂を發揮せしむ。

廿三階堂 **好色二人息子**

藤島華仙畫
實價十五錢
郵稅四錢

己に好色の二字を冠す其妖艶珍奇なる知るべきのみ著者は松原二十三階堂中昧の趣向秘めて語るべからずと雖も痴男妖婦の爲に謬弄せらるるの處噴飯絶仆。

柵瀨君著 **朝鮮時事**

久保田米仙畫
實價廿五錢
郵稅六錢

朝鮮の現狀は敢て詳述するの要なしと雖も其政治、法律、社會、風俗、慣例等を知らんと欲する人は須らく本書を一讀するの必要ある可し。

南新二著 **文車**

三島蕉窓畫
實價三十錢
郵稅八錢

貧福二筋道、法の阿字、一夜漬人魚甘鹽、等最も面白し蓋し貧者紙　脫胎たらんか。

南翠外史 **荒海實一**

久保田米仙畫
實價三十錢
郵稅六錢

荒海實一と呼はるゝ奇少年、坎坷淪落貧困の中に人となると雖も毅魄英邁倘ま某美人の幇助を得て偉業を海外にたつるの大快話。

南翠外史 **朧月夜**

富岡永洗畫
實價卅五錢
郵稅八錢

擧世凡て盜賊堂々たる華冑貴紳はこれ尤も盜の巧みなる者なり外貌端麗にして擧止閑雄なる者尤も畏怖すべし諷刺的大小說。

小笠原大尉著 **海戰日錄**

若林海軍大尉畫
實價四十錢
郵稅六錢

舊唐津藩主小笠原子爵職海軍大尉たり黃海の役高千穗分隊長として殊功あり本書は子爵自ら其大海戰の間に立ちて叱咤するの餘暇嬌綺の錦腸を練りて海戰の記事を錄したるもの讀者をして惻然として肌に粟するの思ひあらしむ挿入する處の若林大尉の畫は蓋し日清海戰畫の巨擘なり彼我の各艦汪洋を突きて馳騁するの狀宛然身其境に莅むが如し畏くも此ノ度の嘉賞書なれば我國民たるも正に一讀すべきの書なり。

乙夜の臨見

あらせられたる珍

以心庵著

不鳴衙

筒井年峰畫
實價三十錢
郵稅六錢

智恵院の宮が幕府の專横を憤慨して蹶然緇衣の袖を揮ふて立ちたりと雖も不幸にして中途に仆るゝ悲哀小説

中島逐波

東武士

寫眞
美譽

富岡永洗畫
實價廿錢
郵稅四錢

朔風雪を催して喬松獨凍たり、幕末の潔士中島三郎助、君家の爲めに微軀を擲ちて、父子屍を刈ねて五稜廓に仆るゝの間、忠僕貞婦聞喋愚漢交互錯雜妙味深し。

講談相撲

贔負競

日就社編
實價廿五錢
郵稅六錢

豪慢自負無學にして博士ぶる講釋師の失策或は逸話を收め更に轉じて男の内の男山櫓大鼓の香と共に八百八町に鳴り渡る其關取の失策談をあつむるもの

上島笠山

釋元恭

淺井忠畫
實價廿五錢
郵稅六錢

快僧釋元恭、蹶然踏破す四百州、入ては哥老會の參謀たり、出ては宇宙の眞理を弄ぶ、其善陀落山頭獅子吼の一聲、頗る人意を强ふするもの、須く一讀すべし。

冷血翁著

近世偉人談

菊版美本
實價二十錢
郵稅四錢

匿名の作家筆を傳記の上に馳て近世精忠の偉人を描く苦の浪海擾隊女將軍女郎花六無齋梅の薫迂拙男關東布衣御船崎等潔士女丈夫十二人の面目彷彿紙上に横はる

仁禮敬之

忠魂帖

寫眞版入
實價廿五錢
郵稅六錢

風泣いて雲悲しむ、これ日清戰役忠死の靈、其凛烈たる風采は本書の内に在り、一讀其人に接するが如し。

海國

雙語六

若林大尉表紙畫
實價共
金十五錢
郵稅

谷口政德氏が海國社の贊助を得て編纂したるもの筆者は渡部金秋氏にして表紙畫は軍人畫家の聞え高き若林大尉の特に寄贈せられたるもの少年子弟を益する多し

屋象樓主人著

風流花圃

全一冊洋裝美本
實價十五錢
郵稅二錢

目次●總論●都々逸季寄●都々逸は新作をうたふべき乎●都々逸うたひ方●都々逸は誰にても作らるゝ事●姿言葉の事●切字の事●通ふ言葉通はぬ言葉の事●都々逸の種類並十二躰の事●正躰●尻取●天地●折句●贈答●典故●文句入●翻譯●名所●地口●滑稽●字餘●題により都々逸を作る事●都々逸改良論●新作都々逸●附錄花ふゝき●千紫萬紅●いろは別新作六百餘題

煩惱菩薩

花柳お多福

鈴木華邨畫
チリメン表紙
實價廿錢

明治雛鶴、お坐附、端唄、都々逸、養生阿保多羅經等悉く新作の飛花落葉、一讀忽ち通人粹人となる天下の御家賓泰平の世の好伴侶。

諸大家傑作

小說花籠

定價八錢
郵稅四錢

日本未來

全二冊
實價廿五錢
郵稅十錢

春之夕暮

一風子著
一價七錢
郵稅三錢

新三國史

實價十五錢
郵稅四錢
名士肖像入

清佛海戰日記

毛鐵道人著
實價二十錢
郵稅四錢

北支那雜記

通譯官瀨戸晋著
實價十五錢
郵稅四錢

破窓之風琴

辻治之著
實價十三錢
郵稅四錢

魯敏遜漂流記

牛山鶴堂譯
實價十錢
郵稅四錢

禽獸世界

狐の裁判

井上勤譯
實價十八錢
郵稅六錢

世界未來記

蔭山廣忠譯
實價二十五錢
郵稅十錢

卅五日間

空中旅行

井上勤譯
實價十八錢
郵稅六錢

萬里絶域

北極旅行

福田直彦譯
實價三十五錢
郵稅十錢

尊號美談

福地源一郎著
實價七錢
郵稅二錢

國會開設之前後

末廣鐵腸作
實價二十錢
郵稅四錢

合巻書籍目録

新作十二番

半紙木版摺
實價郵税共
一冊金三十三錢

現今小説家の巨擘を以て目せらるゝ、篁邨、紅葉、美妙、三昧、南新二、學海、香雪、得知、の諸氏が、各其月の如く花の如き詩想を練りて或は花の朝の妍を競ひ、或は月の夕の粲を恣まゝにする一世の傑作を梓に上し、題して新作十二番といふは、以て弊堂得意の小説を出版したるの心なり。

一番	饗庭篁邨著	勝関	全
二番	紅葉山人著	此ぬし	全
三番	山田美妙著	敎師三味	全
四番	宮崎三昧著	桂姫	全
五番	南新二著	鎌倉武士	全
六番	學海居士著	十津川	全
七番	香雪山人著	梅その	全
八番	幸堂得知著	逢菾嘶	全

鐵道小説

切賊 鳴神組	實價八錢 郵税二錢
滑稽小説 寒帷子	實價八錢 郵税二錢
漂流之佳人	實價八錢 郵税二錢

諸大家傑作 聚芳十種

實價一卷十二錢
郵税各四錢
合卷全二冊
實價金壹圓
遞送料廿錢

一卷	香雪散人著	花の種	全一冊
二卷	紅葉山人著	新色懺悔	全一冊
三卷	山田美妙齋著	やたらじま	全一冊
四卷	南翠外史著	臥待月	全一冊
五卷	抱一庵主人著	闇中政治家	全一冊
六卷	廣津柳浪子著	糸のみだれ	全一冊
七卷	三昧道人 露伴子著	戀の重荷 七化	合卷 全一冊
八卷	忍月居士著	黄金村	全一冊
九卷	幸堂得知著	さゝきげん	全一冊
十卷	竹の舍主人著	雪達摩	全一冊

小説 むら竹

饗庭篁村著

全部廿卷合卷五冊
大凡三千頁
實價壹圓二十錢
運賃廿錢

巢林子が肺肝より出で、江島屋が骨髓を得、といへば胎内潜り覗せ物の口上めけどうそでも味噌でも何でもないと作者御自身の手褒、弊堂考へますに夫れではまた、風來山人一家の風潮を傳へ、また曲亭の曲、柳亭のやはらか味ありといふとを褒落されたりと存ぜられ候、全部御購求あつてよろしく御評判のほど願上候。

全部目録

第一集 從第一卷至第四卷 ●玉簾●懲の月●下宿屋●走馬燈●擱へ所●他山の石●松の雨●聟撰み●深山木●納涼臺●藪椿●三筋町の通人●人の噂

第二集 從第五卷至第八卷 ●水の流れ●義理の柵●飜譯小説目鏡●驅落の驅落●今年竹●藪が身の毒●雪の下萠●魂膽●病の原因●舊恩に酬●影法師●ムツカシヤ●軒の垂水

第三集 從第九卷至第十二卷 ●跡取子息●時の用●振分道●人の行末●文の間違●大阪の話●闇の梅●權妻の果●面目玉●俳優氣質●夜の錦●つり堀●中よし●擬博多●時雨の舍り●兒の手柏●廻り車

第四集 從第十三卷至第十六卷 ●煩惱之月●腹の子●大石眞虎の傳●當世寫眞鏡●暗の馬●緣の糸●めかし損●當世寫眞鏡●孝女の幸ひ●作り●糸の亂れ●當世寫眞鏡●苦樂

第五集 從第十七卷至第二十卷 ●蓮葉娘●對扇●紅葉●小菊娘●新殺生石●川添柳●驛めぐりの記●鹽原入浴の記●秩父紀行●房州紀行●木曾道中記もしほ草

文學世界

半紙木版摺彩色
實價八錢
郵税二錢宛

第一	紅葉山人作	命の安賣	全一冊讀切
第二	山田美妙齋作	猿面冠者	全一冊讀切
第三	二十三階堂作	かくし妻	全一冊讀切
第四	巖谷漣山人作	か・た糸	全一冊讀切
第五	忍月居士作	辻占賣	全一冊讀切
第六	正直正大夫作	かくれんぼ	全一冊讀切
第七	江見水蔭作	野試合	全一冊讀切
第八	松華庵主人作	ひつじかい	全一冊讀切
第九	金子春夢作	今みゆき	全一冊讀切
第十	乙羽庵主人作	おもひ川	全一冊讀切
第十一	安田露友作	有り哉無し哉神も佛も	全一冊讀切
第十二	廣津柳浪作	いとし兒	全一冊讀切

小說百家選

諸大家傑作
全部十五卷帙入
實價壹圓廿錢
遞送料廿錢
實價一冊十二錢
郵稅六錢

第一卷　都の風（紅葉補）　有馬竹太郎（柳濱）　舞衣（太華）　赤毛布（花瘦）　煩惱

第二卷　南雲大王　龍水生

第三卷　指環　鐵鑰（上）　風鑰（完）　三味道人　青軒居士

第四卷　指折　矢柄輪（下）　完　三味道人　濱太郎稿人

第五卷　金環鳥美帽　廣津柳浪　永井小石人　子（完）

第六卷　かゝる世　衣（完）　奴（完）　堀江渡人　紫山乙羽人

第七卷　船頭大膳　銀杏がへし（完）　江見水蔭　金子春浦

第八卷　常陸帶（完）　須藤南翠

第九卷　烏帽子折　新宇治川　宇田川宗市（完）　川文海　新川水蔭

第十卷　水鳥室　帽子折（完）　守田文海　深編笠（完）　巖谷山人　宇田川文海　中村花瘦

第十一卷　草紅葉　かつら　阿波能（完）　ものめ（完）　濱笠（完）　紅葉山人　國主人　眼鏡主人　男鹿人　前田曙山人

第十二卷　貧乏神（完）　遊蛇草（完）　五銭華（完）　十錢旅行（完）　瓶中（完）　紫金（完）　豐水山人　南陽外史　舟居生人

第十三卷　不平大名（完）　此羽織（完）　鐵道市川（完）　く鳥（上）　中村山人　蓮花瘦　新巖人

第十四卷　ぬくめ鳥（下）　女心（上）　中村山人　蓮花瘦人

第十五卷　女手枕（完）　有本山人　蓮水人

狂言百種

故河竹默阿彌作
全部合卷一冊
實價各六十五錢
遞送料各二十錢

第一號　村井長庵巧破傘　八幕　全一冊
第二號　玆江戸小腕達引　怪談月笠森　三幕　全一冊
第三號　島衛月白浪　淨瑠璃　五幕　全一冊
第四號　木間星箱根鹿笛　淨瑠璃　四幕　全一冊
第五號　勸善懲惡孝子譽　五幕　全一冊
第六號　新皿屋舗月雨暈　巖石砕濤布勢力　三幕　全一冊
第七號　三人吉三廓初買　七幕　全一冊
第八號　水天宮利生深川　身光於竹功　三幕　全一冊

大通世界

幸堂得知標註
全三冊讀切
字入繪噺
實價廿七錢
郵稅四錢

此書は幸堂得知標註字入小說黃表紙縮摹半紙木版彩色摺の表紙見返し美麗なる和本也。

古今名譽實錄

全十二卷
合本上下二冊
一冊六十錢
郵稅廿錢

稗史俗傳は嘘でかためし芝居講釋は空事多し世人已に今日正史なく實傳なきを憾む弊堂此度嚴祕の古寫本數十卷を得たれば之を根據として豪雄偉傑の眞傳を編し文章を平易にして大方に頒つといふ。

珍談倶樂部

長方形美本
實價各一冊十二錢
郵稅各一冊四錢

詩人が胸に浮かんだ空中の樓閣、珍談倶樂部とは當家でござる、マア一寸入つて御覽下る、御家に傳はる小說家、文學者、美術家も居れば、政治屋も居る、軍人も居る、俳優も藝者も、僧侶も宣教師も、醫者もてんしやもいやもうてんやわんやに大勢居並んで、銘々面白いといふ面白い話、珍談といふ珍談をならべたてるみ内々で筆記いたして毎月一回づゝ出版仕る、尤もこれは倶樂部員には極内の儀でござれば、高い聲では申されぬ、下やによつて飛切の低い價をもつて發賣いたす、サア〳〵買てごらうとろ。

第一卷目次

懺悔日錄……松葉子筆記
渚　水……同　人
あなわわれ……馬留雜九

第二卷目次

一死一生……枯林子
琴　心……田山花袋

高等探偵

菊版製本各一冊
實價十八錢
郵稅四錢
卷讀切

●木戸少佐
●大毒藥
●戀の嫉刄

着想奇嬌にして筆力勇健讀み去り讀み來つて其快言ふべからず天下の奇書と言ふも決して自負にあらざるなり。

歷史叢談

菊版美本全二冊
實價一冊二十五錢
郵稅八錢宛

古談。事蹟。逸事等百餘件を集輯せり

此編は兒童に歷史中の事蹟を知らしめ娛樂の中に我前賢潤達爽快の流風遺韻を咀嚼せしめ高尙健全の氣風を涵養せんとの目的なり記する所一々道德を勵みず勸善懲惡を附會せずされど兒童の惱髓を涵潤にすべき不潔の事蹟を混入せず。今や眞正の國史の誕し來るべき辰に當れり將た珍奇なる古談の漸くに國民に遠ざかるべき時期なり國史の眞に赴くと共に此の編の無用に屬せざるは編輯者の信ずる所なり。

探偵小說

合卷 全一卷より四卷迄 五冊 實價各金三十五錢 郵稅各十二錢

實價一冊七錢 郵稅各四錢

二卷
一集 十文字
二集 百萬兩
三集 電氣の死刑
四集 五人の生命
五集 やれ手紙

四卷
十六集 無頭の針
十七集 手形之賊
十八集 火中の美人
十九集 四本櫻指
二十集 緋

二卷
六集 影法師
七集 美人の跡
八集 風流醫者
九集 血染の釘

五卷
廿一集 殘美人
廿二集 船中の殺人
廿三集 物言ふ玉
廿四集 女の死骸
廿五集 親の子か
廿六集

三卷
十一集 活人形
十二集 怨の片袖
十三集 ひだりき、髮
十四集 黑い手
十五集 銀行の秘密

探偵小說 完尾

修身書談

全十卷合本上下二冊菊版美本實價一冊廿五錢郵稅八錢宛逸事佳話數百件を集む

世間の修身書多しと雖も兒童の心に面白き者ならでは飽きて讀まざるの憂あり然りとて中庸を外れたる狂瀾奇人の行を記したる事は瀆白にして他の色に染み易き少年の天性に對して教化の目的を誤まること尠からず此書は文明の時世に適當なる面白き立志修身の談を和漢洋の歷史寓言等に求め平易の文體を撰み假名を施し圖畫を挿み少年をして讀んで倦まざるの間に不知不識德性を養ふの目的にて編輯したるものなれば學校の教師并に家庭の教育を任とする父兄は毎刊必ず一本を購ふて兒童の教導に備へ給はんことを乞ふ。

幼稚園

四六版美本 實價各七錢 郵稅各二錢

○支那征伐手柄はなし 全二冊
○歷史繪はなし 全二冊
○修身繪はなし 全二冊
○鳥づくし 全一冊
○獸づくし 全一冊

日清交戰錄

日清交戰錄補遺

當版全四十冊合本四冊 挿畫三百餘葉實價全部金二圓五拾錢別減價一圓四拾錢送料四拾錢

全一冊合本實價四拾錢 特別減價三拾錢 郵稅拾錢 貳錢紙數六百頁挿畫數十集

本書は京城の小戰より始り牙山平壤豐島海洋旅順威海衞等の海陸戰を詳記し大總督府凱旋を以て收まる補遺は新領地臺灣の授受より土匪掃蕩の戰記等一つも餘す處なし國民の血誠外人の觀察敵國の內情等部門を分つて記述し合本には總目錄を付して索引の便を與へ寫眞版は戰地の光景軍士の肖像を示し挿畫は桂舟永洗華邨三畫伯の健筆になる好畫題を描きたる良畫なり。

文界の風雲漸く廻りて花笑ひ鳥唄ふの好季節を卜して本書は毎月一回發行の目的を以て江湖に出でたり書中の是非は敢て自から贊せず編輯主任の任は斯文の大家

新小說

幸田露伴編輯 逐次發行 實價一冊十五錢 郵稅各二錢

幸田露伴子にあり其の選に上るもの元より吻々辯を費やすを要せざるなり試みに一本を購つて其の眞味を掬し玉へ。

珍書百種

宮崎三昧編輯校訂 逐次發行菊版美本 實價十二錢 郵稅四錢

此書一たび出でゝ鬼神哭せず山川撼かず天粟を降さず雨も降らず風も吹かず至て平穩上日和なり之を平凡といへば誠に平々凡々一向詰らぬ詮議なり但一たび此書を繙く者は再び手を釋く能はざる面白味あらん。

古今史譚

樂眞子後凋生合著

全五冊全部一千一百貞 餘實價每冊金三十錢 郵稅各六錢 合本全一冊實價金一圓 小包稅十五錢

古今史譚は樂眞後凋二先生が博引宏證廣く諸家の秘錄をかり之に自家の學識を加へて尤も眞率に古今の史乘の誤を正し落ちたるを補ひたるものなり。

寫眞畫報

全廿冊 號外一冊發行

郵稅一冊一錢五厘也

初め戰國寫眞畫報と題し第一卷は明治二十七年十月より發行せる者にして小川一眞氏及堀健吉氏の寫眞彫刻版を用ひ日清韓の人物景色風俗戰爭等の圖畫を揭げ之れに說明を加へたる者にして寫眞彫刻版(Photo-Engraving)の挿圖ある雜誌の嚆矢なり特に其第五號には東京上野に於て行ひたる第一回祝捷會の寫眞のみを揭げ第十一號には京都名勝古跡及神社佛閣等を輯め第十二號は同地近傍近江大坂神戶播磨等の名所を輯め第十三號は大和奈良の名所を揭ぐ而して第十四號以下は範圍を擴張し世界の森羅萬象何くれとなく揭ぐる事となし政治家軍人豪商紳士美女藝人より萬國の地理風俗等を網羅す挿畫の精美に說明の詳悉を併せ見れば之を掌に指すが如し。

全部上下二卷特別減價金二圓

遞送料四十錢

美術書畫類目錄

海戰畫帖

若林大尉畫
全二冊
實價六十五錢宛
郵送料四錢宛

著者は常備艦隊の將校なり日清の役軍に從ひて怒濤鯨波の間に敵の堅艦と戰ふもの數次其後我奮闘の狀を直寫して水彩畫帖に上すもの實に數百葉の多きに至る弊堂特に氏に乞ひて之を岡村信陽堂に附して印行せしむ然れども製版頗る至難にして屢々挫折したりと雖も然も百難を排して第一卷**黃海**の卷を發兌し大いに大方の喝采を得たり我艦隊々伍整々として進むの間敵艦漸く來り忽ち翻山倒海の大快戰を現じ來る第二卷**威海**の卷は我軍連勝電艇夜濤を劈いて北洋水師殲滅の慘狀望み見るが如し。

中野其明編輯

尾形流印譜

日本紙木版摺美本
實價廿五錢
郵税四錢

尾形流百圖

日本紙木版摺上下二冊
實價六十錢
郵税八錢

激戰中 平壤之眞景

寫眞版廿二圖入
全二冊各一冊
定價金四十錢

上卷目次

野津陸軍大將
大島陸軍少將
立見陸軍少將
平壤城内市街之圖
從船橋里望大同江之圖
混成旅團大部之圖
從大同江羊角島下流之圖
望敵軍右翼砲臺之圖
牡丹臺之圖
從平壤城内東北壘圖
壘望大同江之側面圖
城外村落兵燹後之圖
北征從軍之新聞記者

下卷目次

山縣陸軍大將
小川陸軍少將
福島陸軍中佐
兵站部之圖
混成旅團入平壤之圖
船橋里殉國勇士之墓
仝堡壘戰後之圖
於第五師團本部之圖
堂下俘虜詳居之圖
大同江左方奉字軍營圖
平壤野戰病院之内
敵之創兵治療之圖
從軍新聞記者

占領地眞景

盛京省之内
全一冊横本
寫眞銅版廿圖入
定價四十五錢
郵税四錢

征清第二軍將校
花園口第二軍幕營
仝揚陸場臨時架設之棧橋
仝海岸第二軍貨物揚陸場
仝其二
仝沖碇泊船艦
貔子窩口全市之景
仝干潮之景
仝滿潮之景
金州城遠望之景

金州城纛砲之景
野戰砲兵金州城砲擊景
金州城北面步砲兩兵進擊
仝攻擊之際第二聯隊[illegible]壁景
仝城北門之樓閣
仝市街之大半
仝城略取後俘虜亂闘之圖
高家窰南方敵兵之伏罪
仝城内第二軍司令部施粥之圖
大連灣柳樹屯棧橋之景

日清戰爭繪卷

鈴木華邨筆
遲塚麗水說明
實價一冊廿五錢
郵税金二錢

第一卷目次 京城之卷

其一 釜山夜景
其二 仁川上陸
其三 韓廷改革
其四 京城衝突
其五 韓兵逃走
其六 危機一髮
其七 皇軍入城
其八 皇軍守韓闕
其九 王妃臺園
其十 閔家滅亡
其十一 朝鮮風俗
其十二 袁世凱

第二卷目次 豐島之卷

其一 豐島海戰
其二 操江捕獲
其三 仝續
其四 高陞擊沈
其五 乘組員救護
其六 廣乙座礁
其七 佐世保病院
其八 濟遠逃走
其九 浪速航行
其十 高陞事件取調

第三卷目次 成歡之卷

其一 龍山幕營
其二 公使飛檄
其三 振威雷雨
其四 糧食徵發
其五 將校偵察
其六 安城夜渡
其七 白衣諜者
其八 松崎大尉戰亡
其九 成歡戰
其十 勇喇叭卒
其十一 雨將校
其十二 成歡大捷

第四卷目次 牙山之卷

其一 敵將靈傳
其二 殘兵遁逃
其三 我軍入牙山
其四 牙山占領
其五 牙山縣廳
其六 敵營破壞
其七 銅雀凱旋
其八 戰利品
其九 兩將連騎
其十 船長決死

第五卷目次 平壤之卷上

其一 東京宮城
其二 有栖川宮
其三 大纛進發
其四 威海衛砲擊
其五 臨津江進軍
其六 黃州小戰
其七 斥候殉國
其八 殉國勇士墓
其九 東端林平
其十 船橋里塵戰
其十一 野戰病院
其十二 林大尉

第六卷目次 平壤之卷下

其一 伊藤總理大臣
其二 野津師團長
其三 勇士奪敵船
其四 朔寧支隊徒涉
其五 牡丹臺攻擊
其六 左寶貴戰歿
其七 勇士開玄武門
其八 立見少將語敵將
其九 殲滿州騎兵
其十 平壤之陷落
其十一 俘虜舉役
其十二 清婦執役

第七卷目次 黃海之卷

其一 海軍根據地
其二 西鄕海軍大臣
其三 黃海大海戰
其四 比叡號火災
其五 決死守火藥庫
其六 西京丸苦戰
其七 樺山海軍中將
其八 超勇號沈沒
其九 定遠號火災
其十 赤城號苦戰
其十一 臨死唱萬歲
其十二 砲手豪雄
其十三 沈沒清艦破壞
其十四 艦中劍舞

第八卷目次 遼東之卷

其一 大山々縣兩大將
其二 載仁親王殿下
其三 變服偵察敵狀
其四 大軍徒涉
其五 鴨綠江軍橋
其六 虎山大激闘
其七 閑院宮傳令使
其八 九連城攻擊
其九 我軍入九連城
其十 大東溝進擊
其十一 鳳凰城占領
其十二 安東縣民致慶
其十三 桂大迫兩將軍
其十四 滿州騎兵

第九卷目次 旅順之卷

其一 山地師團長
其二 乃木陸軍少將
其三 陸戰隊偵察
其四 第二軍上陸
其五 哨兵健闘
其六 金州行軍
其七 金州城攻擊
其八 斥騎曉發
其九 和尚山占領
其十 小野口偉功
其十一 [illegible]兵俠勇
其十二 椅子山攻擊
其十三 海軍援護
其十四 旅順市街戰
其十五 旅順占領
其十六 張[illegible]之參

從征畫稿

全四冊
淺井忠畫
大判六枚一冊
實價一冊三十錢
郵稅四錢

本書は畫伯淺井氏朝鮮平壤の役に第一軍に從軍し其後轉じて第二軍に從ひ花園口上陸以來旅順に至る數閲月作圖の原料に充んため日々目擊せる實況を寫生し積んで數百枚に上れり弊堂同氏に乞ひて修飾出版せんと思ひ立ちたれ共原圖は素と戰地倉卒の際筆を走らしめしもの之を修飾するは却て其趣致を滅却するの恐れありとて一も改竄する所なく直に着色石版に付したり故に製版大に困難にして漸く花園口より旅順迄の戰況數十枚を印刷して四卷となし廣く世の憂國の諸彦に頒つ

美術名印部類

川崎千虎 松尾四郎 合著

國風畫の部
實價三十錢
郵稅四錢

此書は編者が多年苦心經營して本朝美術家の落款印影を描寫集聚したるものなれば其精密正確なること固より言を待たず先第一着に國風畫則ち巨勢春日土佐住吉板谷等の系圖を掲げたれば美術家たるもの及好古家たるもの必ず坐右に缺くべからざる一大珍書なり。

凱旋土産

●大元帥陛下御尊影 ●皇太子殿下御尊影

●陸軍大將小松宮殿下 ●陸軍中將北白川宮殿下 ●放陸軍大將有栖川宮殿下 ●陸軍少將伏見宮殿下

●海陸將校 ●海軍大將西郷從道 ●陸軍大將山縣有朋 ●陸軍大將野津道貫 ●陸軍中將桂太郎 ●陸軍大將大山巖 ●陸軍中將山縣有朋 ●陸軍少將小川又次 ●陸軍少將大島義昌 ●海軍少佐閑院宮殿下 ●海軍大佐有栖川宮殿下 ●陸軍少尉山階宮殿下

●內閣諸公 ●內閣總理大臣伊藤博文 ●內務大臣野村靖 ●司法大臣芳川顯正 ●外務大臣陸奥宗光 ●文部大臣西園寺公望、●前大藏大臣渡邊國武 ●農商務大臣榎本武揚 ●前逓信大臣黑田清隆 ●特命全權公使井上馨

扁額用美濃寫眞版西洋紙一枚摺紙質堅牢光澤麗立一尺一寸檔一尺七寸三分實價八錢郵稅二錢

美術畫

堅軸大判堅一尺六寸幅一尺二寸
奉書極彩色
實價各金十二錢
郵稅二錢宛

目次

○第一號 長澤蘆雪眞筆 丹鶴愛雛鳥之圖
○第二號 狩野越前守法眼元信筆 玄宗皇帝楊貴妃之圖
○第三號 不明者筆 女神虛無僧之圖
○第四號 狩野雪信女子眞筆 美人之圖
○第五號 英一蝶眞筆 獅子舞遊兒之圖

美術世界

渡邊省亭畫
全部廿五卷
半紙摺美本

美術世界は木版彩色摺を以て極めて鮮明美麗に印刷する繪畫叢書に候へば彫工の苦心摺師の手際緻密巧妙を極めざるはなし隨つて摺高の加はるに從ひ版木の磨滅を免かれざるを以て板おろしの當座に摺立てたるものと數千部を摺立てたる後の物とは其の緻密巧妙の上に於ておのづから其出來榮を異にせざるを得ずされば彫刻彩色の精巧果して弊店の豫言に違はざるや否やは本書御一覽の上御判定下され速かに御注文ありて可成初刷の美麗精巧無類飛切なる向を御購求被下候樣豫め廣告仕候

各一冊實價三十錢郵稅一冊に付四錢郵劵代用は壹割增

●全部廿五卷御注文は金七圓郵稅八拾錢

海軍畫話

石版彩色入
實價二十錢
郵稅四錢

海軍大尉若林欽君畫及說明

國民一般に海事思想に乏く海軍事理を解せざる如き傾向あるは弊堂の常に遺憾とする所なり今や文運日進の時に際し有識の士は海軍力の重大なる國防上片時も忽にすへからざるを知ると同時に帝國軍艦の稍少數にして邊海の防備未た完成せざるを嘆せずんはあらず然りと雖とも事の成るは成るの日に成るに非らず必す由て來る所あり大河の汪洋は源泉の滾々に起る帝國海軍の膨脹擴張を望まんには表面的當局者の畫策企計に由ると雖とも又自ら國民の腦裏に海事敎育を注射せしむるの必用あり。弊堂の本書を編せる實に此目的に出でたれば軍艦兵器は勿論水兵日常の勤務動作艦內操練の一斑操砲水雷等一々描寫し兒童と雖とも一目瞭然直に海軍の事理に通ぜしめ以て他日の海國民の原素たらしめん事を期す

橋爪貫一譯 男女交合新論

全 百六十頁 金十錢 郵稅四錢

本書は東京淺草瀧山佐吉なる者爲惡なる類似僞板出版致し直に差止候へ共地方實捌へ直段の安き爲め間り居り候哉も難計候間著者及出版所御吟味の上御買問違なき樣御注意願上候

●目錄●第一交媾は最も貴重すべし●第二愛情は情人と交媾せんとの望みに出●第三交媾は男女の構造愛情及び纏綿の精神たり●第四交媾の適否に依て利害苦樂を異にす●第五交媾の目的及び其方法●第六兩親の形狀性質等は其兒に遺傳す●第七父母たるべき者は未生兒の爲に其才德行狀を修養すべし●第八精神の愛は體生に必要なり●第九精神の愛を以て交媾は淫慾の爲になす交媾よりも許多の快樂を生ず●第十精神の愛は淫慾を壓し淫慾は精神の愛を壓す●第十一愛情と生殖器とは相感應す●第十二戀愛する人には陰具勃張し厭忌する人には陰具萎縮す●第十三愛情と交媾とは必ず相伴ふ●第十四甲に愛情ありて乙と交媾するは姦通を重ぬるなり●第十五情慾は撮生に必要なり●第十六交媾には男女とも盛に情慾を發動すべし●第十七情慾は女子にありて最も緊要なり●第十八女子は男子なして情慾を發動せしめ生殖の功を遂る職務を負ふ●第十九交媾の時女子淫情を生ぜざれば男女共共害を受く●第廿男女淫情を交換せざれば激慾を生ず●第廿一多淫の夫に忠告の言●第廿二女子の情慾少き理由及び是を發生せしむる方法●第廿三孕胎の後は交媾すべからず●第廿四新婚の夫妻に忠告の言●第廿五父母の望に隨て男兒或は女兒を生ず得べき法　附變生子の說●第廿六撮生に可なる日時を論ず●第廿七交媾に付ての注意●第二十八交媾は全身の作用を促動す●第廿九精神の嗾激と羞恥とは體生に害あり●第卅情慾を節抑するは害あらざる說●第卅一亂精の交媾は爲すべからず●第卅二妻を奮ふる害を論ず●第卅三避孕は天理に背く事●第卅四去精を控へる害を論ず●第卅五精神の愛は避孕の眞法なる事●第卅六子なき原因及び其治法を論ず●第卅七陰部解剖の學を世に普及する事の必要なる說●第卅八精蟲の說●第卅九睪丸の構造及び其効用●第四十陰莖の構造及び其効用●第四十一尿道と攝護線との構造及び其効用●第四十二龜頭と包皮との構造及び其効用●第四十三子宮の構造及び其効用●第四十四陰道の構造及び其効用●第四十五卵巢卵珠喇叭管の構造其効力●第四十六男女の陰具は互に能く適合す●第四十七陰具の摩擦は全身の作用を起す●第四十八壓力は交媾に必要なり●第四十九孕胎の說

通俗 男女自衛論

合卷 實價十八錢 一冊 郵稅 四錢

卷之一　房事の事
卷之二　手淫及多淫の害
卷之三　遺精生殖無功并に生殖不能の論
卷之四　痢病、消渴、尿道狹窄、勝胱炎衒、睪丸腫及勝胱帶の病
卷之五　婦人手淫の害

軍醫總監石黑忠悳先生序
醫學士谷口神太郎君著

本書は醫學士谷口神太郎氏が高尚なる醫學上の識見を以て尤も通俗平易に記述したるものなり外科編内科編共に素人療治にて即治し得る樣編述したれはこれを一讀會得するあらば人生を養ふの功少々にあらず

通俗 病理問答

第一編　内科之部
第二編　外科之部

實價一冊十八錢　郵稅各四錢

新作 花柳交合福

醉仙史著

袖珍半紙摺 美本。口畫 鈴木華邨子畫

本書は表題の通り花柳に春、情凝りて。香の散る端うた糸の道。皆新調にして。得も云はれぬ味ある文句なれば。佳人才子の虎の巻と謂つべし。殊に充分の禪味を含み。文詞も卑しからねば。大僧正大博士。貴顯紳士も。讀みたまへ。粹に亘り心地よく。醉はず醒めず長閑を。保つ樂は此袖珍に。澤山御坐候

春陽堂近刊

小說雜書豫告

逍遙作 華邨畫	牧之方	露伴著 省亭畫	戀の俘			
紅葉著 諸家畫	多情多恨	逍遙著 省亭畫	二心			
櫻痴著 年方畫	片輪車	偉人之解剖	松菊餘影			
弦齋著 華邨畫	日之出島	川崎著 紫山	藤田東湖			
逍遙著 不倒	列傳躰小說史	藍州著 桂舟畫	北條早雲			
吁付譯 森山	中原大亂史	鷗外居士作	かげ草			
煩惱菩提	花柳れ多福	○此外數十種○				